神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)

神の言葉は出来事となって実現する

神の母聖マリアの前晩のミサに参加している人は、今年１年本当にお世話になりました。また、来年もよろしくお願いいたします。当日のミサに参加しているみなさん、新年明けましておめでとうございます。今年も、よろしくお願いいたします。
年賀状は、こうして目の前であいさつできる方には原則出しておりません。ご理解賜りたいと思います。2012 年、平成 24 年の信仰の歩みを、神の母聖マリアの姿に倣って１歩ずつ進めて行きたいと思います。
皆さんにとって、年の初めの行事は何でしょうか。長崎教区の司祭にとって、新年早々の行事と言えば、1 月最終火曜日の司祭団マラソン大会です。昨年１月のマラソン大会にわたしは 12 年ぶりに参加しまして、10 キロのコースで１時間を切ることもできず、自分としてはみじめな思いでレースを終えました。
マラソン大会終了後の懇親会でそれぞれの成績が発表され、感想を一言述べるように求められました。わたしは、自分のふがいない記録に腹が立っていましたので、腹立ちまぎれにこう言ったのです。「来年はもっと準備して、１時間を切ることができるよう仕上げて来ます。だから、今回１時間前後だった先輩後輩の神父さま方は、来年はわたしのケツを拝みながら走ることになるでしょう。」
大口をたたいてしまいました。結果を出すため、昨年 12 月から努めて走ってきました。おかげで 10 月頃に 80 キロあった体重は現在 73 キロになり、体の切れが戻れば、10 キロを１時間切るタイムで完走できると感じています。気合が入っています。
前回１時間６分かかったのを、６分以上縮めると公言したわけですが、実現できなかったら笑い物になります。言葉は、どんな時でも責任を伴います。その言葉が実現する言葉なのか、実現しない言葉なのか。言葉が実現した時、その人は信頼される人になります。
１月１日、神の母聖マリアの祭日にわたしたちに与えられている福音朗読は、羊飼いが幼子を探し当て、その光景を、人々に知らせる場面です。羊飼いたちは、先に飼い葉桶に寝かされている乳飲み子について天使から告げられていました。
天使に告げられた出来事は、すでに実現していました。それは羊飼いが確認しなくても、必ず実現する言葉です。なぜなら告げられた言葉は天使の言葉ではなく、天使が神から託された言葉だからです。神の言葉は、必ず実現するのです。
羊飼いたちは、急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てました。ところで羊飼いたちは、天使から何を期待されていたのでしょうか。飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てることでしょうか。羊飼いにとって、飼い葉桶に寝かされている乳飲み子を探し当てることはたやすいことだったでしょう。彼ら自身羊を飼っていました。だいたいどんな場所に動物を休ませるか、羊飼いは熟知

していたはずです。
天使は、もっと大きな使命を羊飼いに期待したのではないでしょうか。羊飼いたちがマリアとヨセフ、飼い葉桶に寝かされてある乳飲み子を探し当てたあと、自分たちが目にした出来事は、「天使を通して神から告げられた言葉」「必ず出来事となって実現する言葉」だと人々に告げ知らせること。これが、天使が羊飼いに期待したことではないでしょうか。「わたしは、出来事となって必ず実現する言葉を確かめて来た。」この通りに羊飼いは話したわけではないでしょうが、人々に知らせたのは同じ意味の言葉だったと思います。ただ単に、乳飲み子が飼い葉おけに寝かされていたよと話したわけではありません。天使が出来事を告げ、それを聞いた羊飼いたちがその目で確かめ、「神の言葉は、出来事となって必ず実現する」と、理解したのです。
話を聞いた人々は、羊飼いたちの話を不思議に思ったとあります。これは、理解できずに戸惑ったということです。理解できなかったのです。ただの赤ん坊の誕生と変わらないと、それ以上の意味を探ることができなかったのです。
ところがマリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていました。マリアは天使に告げられた言葉と、生まれた乳飲み子とはつながっていると感じたのです。マリアが産んだ乳飲み子は、「必ず出来事となって実現する言葉」なのだと、感じ取っていたのではないでしょうか。
この神の母となったマリアの姿、羊飼いの行動が、わたしたちの今年１年のあるべき姿だと思います。「神の言葉は、出来事となって必ず実現する。」わたしたちに与えられた救い主は、必ず出来事となって実現する神の言葉なのだと、思い巡らし、人々に知らせること。これが、わたしたちが毎年新たに掲げる１年の抱負だと思います。
では具体的に、どんな神の言葉を思い巡らし、人々に知らせればよいのでしょうか。アヴェ・マリアの祈りと、ミサの奉献文から、例を挙げましょう。アヴェ・マリアの祈りの中で、「主はあなたとともにおられます」という天使の言葉が含まれています。
わたしたちが、「神の言葉は出来事となって必ず実現する」と信じて今年歩き始めるなら、必要な時、必ず神はわたしたちのそばにいてくださるでしょう。あなたの暮らしの中で出来事となって、必ず実現するでしょう。
ミサの奉献文の中では、「これは、あなたがたのために渡される、わたしのからだである。」という聖別の言葉があります。わたしたちが、「この言葉は出来事となって必ず実現する」と信じて１年を始めるなら、わたしのからだ、わたしの血となってくださった神の言葉が、わたしたちを生かしておられると、生活の中で実感できる場面が与えられます。
ぜひ、神の母マリアの姿と、羊飼いの行動を、この１年の大きな目標として据えましょう。わたしたちが神に感謝できる体験を積む時、「神の言葉はやはり、出来事となって必ず実現する」と思い出せますように。神の母聖マリアの取り次ぎを、ミサの中で祈り求めましょう。

主の公現（マタイ 2:1-12）

主の公現(マタイ 2:1-12)

自分のすべてを持ち寄って幼子にひれ伏す

先週の水木金、実家に帰っておりましたが、戻って来て体重計に乗りましたら、73 キロが 75 キロに増えていました。つい気を緩めてしまって、こたつに入ったままポテトチップスをつまんでいたのがいけなかったようです。とは言っても、練習はサボりたくないなぁと、気にはしておりました。
休暇の初日は雪が降って、走りに行く勇気が出ませんでした。翌木曜日は、めったにない好天だったのですが走らず、かわりに１万歩くらい歩きました。ようやく金曜日に、片道２キロのコースを見つけて２往復しました。１キロ６分でカバーするのが今年の目標ですから、８キロを 48 分で走れば設定タイムです。
最近はストップウォッチをたすき掛けして走っていまして、確かめてみたら 46 分でした。１キロ５分 45 秒でカバーした計算です。ようやく、おととし霊名のお祝いで買ってもらったウェアの出番がやってきました。今年はこれと、ランニングパンツを着て、マラソン大会に出場しようと思っています。
わたしにとっての司祭団マラソン大会は、かつては記録を争う大会でした。記録を争えない今は、過ぎた１年をどのように過ごしてきたか、不摂生して過ごしたのか、現状維持なのか、少しは自分に鞭打って過ごしてきたのか、公の前に報告する大会になっています。
相手がどうこうというのは関係ありません。あくまで自分との闘いです。健康維持のために走ろうとか、そんな気はさらさらありません。公の面前で、「来年はもっと準備して来ます」と宣言して、結果を出す。それが、わたしにとっての今の司祭団マラソン大会だと思っています。
さて、今日の典礼は「主の公現の祭日」です。東方の占星術の学者たちが、幼子イエスを拝み、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げたことが福音朗読で読まれました。「占星術の学者たち」と訳されているギリシャ語は、英語の magic とか magician のもとになっている言葉で、一方で学者という意味、他方で魔術師という意味を持っています。
すると、もとのギリシャ語は２通りに訳すことができるわけで、わたしたちが朗読した新共同訳聖書のように「学者」と訳した場合と、もう１つの可能性「魔術師」と訳した場合では、話の内容もずいぶん変わってくることになります。
学者であれば、彼らは星の研究を通して幼子にたどりつき、これからは幼子を心の導き手、星として自分たちの国でこれまで通り学者として活躍する話ということになります。一方、「魔術師」という意味であれば、魔術に明け暮れていたこれまでの生活を改め、魔術にではなく幼子によって世界が救われることを自分たちの国で告げ知らせ、人々に貢献する話ということになります。
あえて、「魔術師」という意味に取らなくてもよいのですが、「学者」であれ、「魔術師」であれ、自分たちにとって大切な物を贈り物として

幼子にさ献げたことは、よく考える必要があると思います。真の学問を追い求める人であれ、魔術に心を奪われている人であれ、自分にとって最上の物を、幼子イエスの前に献げたのです。
この態度は、わたしたちも見習う必要があります。東方から訪ねて来た「学者」または「魔術師」は、自分の知恵を絞って得た結論が、目の前にいる幼子にひれ伏すことでした。
人が、だれかの前にひれ伏すというのは、自分を低いものと認める姿です。自分よりも高い人にかがむことで、教えられ、導かれ、以前よりも豊かな生き方をいただこうとする態度です。身をかがめる相手のちょっとした言葉やしぐさで自分は幸せを感じることができる。そういう相手だからこそ、身をかがめ、ひれ伏すのです。
わたしたちは、幼子イエスの前に、喜んでひれ伏すことを願っているでしょうか。イエスが、わたしたちの知恵を絞って得た結論として、教えてくださる方、導いてくださる方、以前よりも豊かな生き方をくださる方であると感じているでしょうか。
また、占星術の学者たちは、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げました。それぞれがやってきた土地で、これ以上ない最高のものがこれらの贈り物だったでしょう。仮にこの人たちが魔術師で、贈り物は彼らの商売道具であったとしても、彼らは自分たちの持ち物をなげうっても構わないと考えたことがわかります。
わたしたちは、ミサの献金をもって、イエスさまへの日々の献げものとしているわけですが、自分がこれだけ献げても構わないと考えて、献金しているでしょうか。
「自分は幼子イエスの前に出るにはふさわしくない」そう考えている人がいるかもしれません。心配要りません。「魔術師」だったかもしれない、占星術の学者たちが、幼子の前にひれ伏したのです。イエスの導きを受け入れ、これまでの生き方を入れ変えようという心のある人ならば、幼子の前にひれ伏すことはふさわしくないどころか極めてふさわしい態度なのです。
馬小屋の飾り付けも、御公現が終わると片付けることになります。しるしがなくなっても、わたしたちの心に星が指し示したお方が住んでくださり、導きを与えてくださいます。これから、たくましく成長して数々のしるしを与えてくださるイエスの声に耳を傾ける。その決意を、このミサの中でおささげいたしましょう。

年間第 2 主日（ヨハネ 1:35-42）

年間第２主日（ヨハネ 1:35-42）

「来なさい。そうすれば分かる」と言える生活を保つ

マラソン大会に向けての走り込みはぼちぼち進んでいますが、張り切りすぎたかもしれません。背中で腰に近い部分の筋肉を痛めてしまいました。まったく走れないわけではないのですが、走り出しを恐る恐るしているといった現状です。
急に練習を始めて、あんまり詰め込み過ぎたかなぁと反省しています。ここ数日は、様子を見ながら練習を増やしたり減らしたりしているところです。体を壊してしまっては元も子もありませんので、用心したいと思います。
年間の主日に入りました。今年は主日の朗読配分がＢ年ですから、マルコ福音書を中心に日曜日の朗読が選ばれます。今週はたまたまヨハネ福音書が選ばれていますが、来週からはマルコ福音書が選ばれていきます。
今週の朗読箇所は、「最初の弟子たち」がイエスによって選ばれる場面です。ヨハネ福音書は、最初の弟子たちが選ばれる場面を、マタイ・マルコ・ルカの共観福音書とは違った見方で描いています。
共観福音書では最初の召命物語はガリラヤ湖で、４人の漁師を弟子にするという形で描かれていますが、ヨハネ福音書では洗礼者ヨハネの弟子であった２人がイエスの泊まっている場所に泊まり、弟子になっています。さらにイエスのもとに泊まった人がほかの人を連れて来て、イエスの弟子が増えていきます。
ここで疑問を感じるでしょう。最初の弟子たちは、共観福音書が述べているように湖で選ばれたのか、ヨハネ福音書が描くように違う形なのかということです。
わたしは、どちらも最初の弟子たちを選ぶ物語なのだと思います。一方は湖畔で起こった出来事で、今週朗読されたのは陸上での出来事です。同時に出来事は起こりません。それぞれ、別の場面と考えるべきです。ですから、共観福音書は湖畔での出来事を最初の出来事ととらえているし、ヨハネ福音書は洗礼者ヨハネのもとにいた弟子たちのことを最初の出来事ととらえている、それだけなのだと思います。
今回は、ヨハネが最初の弟子たちを選ぶ場面ととらえた出来事にそって、学びを得ることにしましょう。最初は洗礼者ヨハネの弟子であった２人の人が、洗礼者ヨハネから促されてイエスのもとに行きます。そしてイエスのもとに泊まりました。
この、イエスのもとに泊まったことが、２人に決定的な影響を与えることになりました。日本人の感覚で言うと、「寝食を共にした」ということです。どこかに集まってしばらくの時間過ごすのとは違う何かが、寝起きすることで起こったに違いありません。
今日の出来事につながる、面白い体験を思い出しました。太田尾教会に赴任していた時のことです。１人の小学生男子が、「神父さまと一緒に泊まりたい」とわたしのところに願い出ました。生まれて初めてのことでした。戸惑いながらも、本人の母親に了解をもらってからおいでと伝

えると、母親も喜んで送り出してくれまして、その男の子はパジャマと着替えを持って、司祭館にやって来たのです。それこそ、金曜日の午後４時ごろのことです。
わたしは子供の扱いに全く慣れていないので、午後４時から次の日まで、どんなふうに時間を過ごせばよいのか、まったく見当もつきませんでした。思い出せるのは、風呂に一緒に入ったことと、晩の祈りを一緒に唱えたことと、わたしの布団の隣に小さな布団を敷いて、一緒に眠ったこと、そして、目を輝かせてとても楽しかったと母親に報告しながら帰っていったこと、それくらいです。
けれども、その子にとっては一生忘れない思い出になったことでしょう。その時のことがどのように本人の信仰に影響していくのかはわかりませんが、少なくともわたしは、神父さまに興味を持ち、神父さまと一緒に寝泊まりしてみたい、神父さまの生活を体験してみたいと思っている子供が、中にはいるものだということを強く感じたのです。
イエスに、「ラビ、どこに泊まっておられるのですか」と尋ねた最初の２人は、イエスに強く惹かれ、イエスの生活を体験して、いつもイエスと共にいたいと感じた人たちです。イエスはほんのわずかの言葉で、イエスと共にいたいと感じた人を引き寄せました。「来なさい。そうすれば分かる。」（1・39）
イエスの言葉は、わたしたちの生活を振り返る大切な点を教えてくれます。わたしたちは、どこかにいるはずの「自分に興味関心を持っている人」を前にして、見て、一緒に寝泊まりして、それで自分がどんな人かわかる、そういう生活をしているでしょうか。わたしの生き方に興味をもって訪ねて来る人に、「来なさい。そうすれば分かる」という単純な言葉で呼びかけることができるでしょうか。
カトリック信者がどのような人たちなのか、修道者がどのような人たちなのか、司祭がどのような人なのか、面白半分ではなく、真剣に知りたがっている人もいるはずです。よく学んで、その生活を自分も受け入れたいと考えている人がいるかもしれません。そういう人たちに、わたしたちの生活は、「来なさい。そうすれば分かる」と言える生活ができているでしょうか。
もしも、「来なさい。そうすれば分かる」という言葉をかけるチャンスが回ってきたら、それはまたとないチャンスです。本当に、二度とないチャンスかもしれません。そのチャンスを、神の国のために最大限活用しましょう。
信徒、修道者、司祭、それぞれがこうやって自分の召された生き方を全うしているのだなと、すぐに見てとれるような生き方を整えておきましょう。神は準備をして待っているわたしたちに、救いの道を尋ねてくる人を必ず送ってくださいます。

年間第 3 主日（マルコ 1:14-20）

年間第３主日（マルコ 1:14-20）

時は満ちた。生活の中心に何を据えますか

この前、信者さんからこう言われました。「気のせいかなぁ。神父さま、痩せたような気がする。」気のせいじゃないですよねー。お腹とか、今までサッカーボールが入っていたのが、ソフトボールくらいになったのですから、これで痩せたことに気づかないなんて、どうかしています。痩せてちょっと助かっていることがあります。これまでは歩いたりするとシャツとかがはだけたりして、ひんぱんに前を整えなければなりませんでした。最近は、少し歩いたくらいでは洋服がはみ出さなくなりまして、あーこれもお腹が引っ込んだ効果なんだなぁと実感しています。
福音朗読は、マルコ福音書からイエスの宣教開始にあたっての第一声と、ガリラヤで漁師を弟子にする場面が選ばれました。イエスは宣教にあたっての第一声で「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（1・15）と仰いました。この呼び掛けをどう理解するか。漁師を弟子にする場面からヒントを得たいと思います。
まずガリラヤの漁師だったシモンとその兄弟アンデレ、彼らがイエスの招きを受けます。イエスは２人が湖で網を打っているのを御覧になり、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」（1・17）と言われたとあります。
みなさんは、この場面に驚きとか、疑問とか、何か感じないでしょうか。仮にわたしたちがイエスさまと同じように岸にいて、網を打っている漁師が浜串の沖の波止場にいるとしましょう。どれくらいの声だったら、沖にいる漁師に聞こえるのでしょうか。あるいは、沖にいる漁師の心をとらえて、網を捨てて従ってくれるでしょうか。
おそらく、大声で叫ばないと、岸にいる人の声は聞こえないはずです。イエスは大声で言ったのかなぁと、みなさんはお考えでしょうか。もしそうであれば、少なくとも最初の言葉は、「おーい」と呼び掛けてからでないと、漁師はイエスの声に気付かなったでしょう。
わたしは、今話したこととはちょっと違う考えをもっています。つまり、イエスが呼び掛けたのは、湖で網を打っている真っ最中ではなく、岸に戻ってから、静かに声をかけたのではないかなぁ、と考えたのです。タイミングを見計らって、それから声を掛けた。そう考えます。この方法ですと、「おーい、ちょっと話があるんだけど、聞こえるかー」みたいな大声は出さなくて済みます。一方で、２人の漁師がどうしても話を聞かなければならない、そういう雰囲気作りが必要です。
そこでこう考えました。シモンとアンデレが湖で網を打っているのを御覧になった時からずっと、片時も目を離さず、２人を見つめておられたのではないか。そう考えました。さっきからずっとわたしたちを見ているあの人は、いったいだれだろう。わたしたちに何の用事があるのだろうか。わたしたちが岸に上がって来てからもずっとわたしたちを見つめている。きっと何か大事なようがあるに違いない。イエスがひたすら見つめ続けたことで、２人の漁師に心の準備ができた。そ

れを見計らって、声を掛けたのではないか。そう考えたのです。
もちろん真実はどうか分かりませんが、十分に心の準備をさせてから、声を掛ければ、効果的だというのは皆さんも理解できると思います。
いつか岸辺に立って、海の上にいる人を見つけて、考えてみてください。わたしの考えもまんざらでもないと思います。
さて、シモンとアンデレは、網を捨ててイエスに従いました。また、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネも、イエスの呼び掛けに応え、父ゼベダイと雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行きました。
彼らが取った行動をまとめると、漁師の仕事を生活の中心に据える生活から、イエスに従って歩むことを生活の中心に据えた、となります。
ここから、さかのぼってイエスの宣教活動にあたっての第一声「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」という呼び掛けは、「イエスに従って歩むことを生活の中心に据える」そういう呼び掛けだったと理解するのが適当だと思います。
ここで考えてほしいことがあります。イエスは、この宣教活動の始まりに、初めて「イエスに従って歩むことを生活の中心に据えなさい」と呼び掛けたのでしょうか。第一声としてはそうだと思いますが、わたしは、もっと以前から、具体的にはイエスの誕生のその時から、この第一声を発し続けていたのではないかと思うのです。
イエスの誕生は飾りも何もない、粗末な場所での誕生でした。喜ばしいことの何もない中での、唯一の喜びの源でした。そこへ羊飼いが訪ねて来て、後には占星術の学者たちも贈り物を携えて拝みに来ます。神殿に奉献される時、シメオンは幼子を抱いてもうこれで十分だと満たされました。12 歳になって神殿へ出向いた時も、父なる神のもとに留まりました。
これらはすべて、中心に何を据えて生きるべきかを教えているのではないでしょうか。どの場面も、中心に神を据えて、イエスの導きを中心に据えて生活することを、教えていると思うのです。
そして、イエスはあらためて、何を中心に据えるべきかを第一声として呼び掛けられました。これは、わたしたちへの呼び掛けでもあります。ガリラヤの漁師たちのように、すっかり生活が入れ替わる人も中には必要でしょう。男の子が司祭職を目指して神学校に行くとか、女の子がシスターを目指して志願院に行くとか、それも大い期待します。それと同時に、わたしたちの日々の生活も、中心に何を据えるかを考えてほしいのです。
中心に何を据えるのか、見誤ってはいけません。これが中心だと思っても、それが根こそぎ揺さぶられ、洗い流され、何も残らないかもしれないのです。イエスの第一声「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」この声にふさわしい生活を積み重ねることができるように、ミサの中で照らしと導きを願いましょう。

年間第 4 主日（マルコ 1:21-28）

中から出るイエスの権威で教え、導く

いよいよ火曜日にはマラソン大会に出場して来ます。練習以上のものは出ないと思いますから、いきなりトロフィーをもらってくるとか、そういうことは言えませんが、去年の長距離の部 14 人中 13 位よりは、明らかに順位を上げられると思います。
タイムとしては、今年の長距離の部は浦頭教会からマリアの園までの往復 8 キロだそうですから、48 分、順位は 1 桁台、あわよくば 8 位入賞と、その辺が目標でしょうか。練習は昨日までで仕上げました。今日からは体を休めて、火曜日に走りたくてたまらないと、そういう状態に整えたいと思います。
もしも、冷やかし半分で応援に行く人がいらっしゃるようでしたら、当日朝 8 時 10 分に土井ノ浦から出る船に乗ってください。これが便利です。同じ船は、午後 3 時 55 分に出て、5 時ごろ土井ノ浦に着きます。わたしは前日よきおとずれの仕事で長崎にいるので長崎から福江に行きますが、帰りは土井ノ浦に着く船に乗ろうと思っています。
2 ヶ月の練習でしたが、あらためて分かったことがあります。練習を積んだ人には、練習に裏付けられた自信が、顔に表れるということです。何か目標を見据えているとか、周りにだれがいても自分の走りをちゃんとできるとか、そうしたことはかぶり物では決して身につかないもので、中からにじみ出てくるものだと思います。
さて今週の福音朗読ですが、イエスが安息日に会堂に入って教えると、「人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである」（1・22）とあります。
律法学者たちも、実は権威を振り回していたのですが、彼らの権威は律法に頼った権威で、いわば律法をかさに着て、威張っているだけでした。イエスは、律法学者とは全く違った形で、「権威ある者として教えた」のです。イエスには、中からにじみ出る権威がありました。
律法学者たちも、正しい権威を振るうことは可能だったでしょう。しかしそれは、常に律法に依存していて、しかも律法を正しく理解しているときにのみ備わっている権威です。彼らは律法を離れては、単なる人間に過ぎなかったのです。
イエスは違いました。会堂で教える時も、汚れた霊を追い出す時も、どんな時でもイエスの中に権威がありました。それは、だれとも違う、イエスだけが備えていた中からにじみ出る権威でした。
この、イエスだけが持つ権威、中からにじみ出てくる権威に、人々は驚いたのです。不思議に思ったのではなくて、圧倒され、畏敬の念をもったのです。中からにじみ出てくるものは、その人を雄弁に物語ります。人々は、イエスこそ真の権威をもっている方だと、理解したのです。
この場面から、わたしたちも何かを学び取りましょう。わたしたちも、自信を持って何かを話したり、教えたりしなければならないときがあ

ります。よくわたしがたとえにあげる話ですが、外出先で食事をするときがあるわけです。そういうときに、食前食後の祈りを唱えることはすばらしいことですが、どのような権威を示すかに注意が必要です。わたしたちは、見せびらかそうとして祈ることもできます。反対に、だれかに見せようとしてではなく、心から食事に感謝するために祈ることもできます。前者は、権威をかさに着た態度ですが、後者は権威がにじみ出た態度です。人々が公の場で祈るあなたを見て、その姿に圧倒されるのは、どちらの心がけでしょうか。見せようとして祈った姿でしょうか、心から感謝の気持ちがあふれて祈った姿でしょうか。皆さんは、スポーツ選手が十字架の印をする姿を見たことがないでしょうか。その十字を切る姿にわたしたちが圧倒されるのは、見せようとして十字を切っているからでしょうか、喜びが心からあふれて十字を切っているからでしょうか。答えは明らかです。
いつも、中からにじみ出てくる権威が人を圧倒します。中から表れる権威が、本当の意味で人を教え、子供を導き、従わせるのです。権威をかさに着ても、権威を振り回しても、人は心を打たれないし、子供は心を開き、耳を傾けようという気にはなりません。ですから、わたしたちが何かの場面で教えなければならない、導かなければならないとしたら、中から出てくる権威によって、教え導くのです。
人によっては、自分にはそんなものが備わっていませんという人がいるかもしれません。何かの仕事を任されたり、選ばれて上に立つことになった。けれどもどんな顔をして、自分に任せられている人を教え、指導すればよいのだろうか。悩むかもしれません。
権威をかさに着てはいけない、権威に頼ってはいけないと言いましたが、1 つだけ、頼れる権威があります。それは、イエス・キリストです。イエス・キリストは、わたしたちにとっての唯一の権威です。ですから、あなたが自信をなくし、子供に、また人に教え導くのをためらっているなら、あなたの中にイエス・キリストがいるように心がけたらよいと思います。
つまり、「イエスだったら、この場面をどのように教え導くのだろうか」と考えながら、声をかけるということです。自分自身は確信を持てなくなっているかもしれませんが、「イエスだったらどう判断し、行動するだろうか」そのことに心を配るようにすれば、あなたが教え導こうとするとき、イエスが権威を与え、助けててくれるのではないでしょうか。
突き詰めると、わたしたちの中からにじみ出てくるものは、イエス・キリストであるべきだ、ということです。練習に裏打ちされた自身や、積み重ねた経験もあるでしょうが、それらは一歩間違えると、かさに着てしまうものになります。いつも、わたしたちの中から、イエス・キリストがにじみ出てくる。そういう権威の使い方を、イエス・キリストに願い求めましょう。

年間第 5 主日（マルコ 1:29-39）

イエスによって変えられ、わたしも人を動かしていく

皆さん。マラソン大会、結果出しましたよ。何と、去年の 13 位から、5 位に急上昇しました。1 キロ 6 分、48 分でゴールするだけの練習を積んできましたが、本番では 1 キロ 5 分 25 秒でカバーし、43 分 21 秒でした。詳しいことは、張り付けている成績一覧を見てください。
ほぼ、満足できる結果だったのですが、惜しかったのは自分の前を走っていた 4 位の先輩です。8 秒差でした。20 メートルあったでしょうか。3 位は、土井ノ浦の後輩です。彼とは 1 分近く離れていたので、来年追い抜くのは難しいかもしれませんが、目標にはしたいと思います。
ついでの話ですが、水曜日の晩、中学生のけいこのために浜串教会の聖堂の 2 階に上がってすぐ、「マラソン 5 位、おめでとうございます」と言ってもらいました。嬉しかったですねー。これまでの 2 ヶ月間の苦労が吹っ飛びました。わたしくらいの年齢であれば、中学生の子供がいても不思議ではないわけですが、子供に喜んでもらった親の気持ちがよく分かりました。子供が喜んでくれているその一言があれば、親はどんな苦労も苦労と感じないのでしょうね。
では福音の学びに入りましょう。イエスと弟子たち一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行きました。シモンのしゅうとめが、熱を出して寝ていたのですが、イエスは彼女を深くあわれみ、彼女の熱を取り去ってくださいました。
シモンのしゅうとめは、イエスのいやしを受けて、一同をもてなします。この出来事は一見するとわたしたちには縁遠いように見えるかもしれません。同じように、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、多くの悪霊を追い出してくださったとなっていますが、わたしたちはこの話を身近な出来事と感じることができないかもしれません。
奇跡に目を奪われがちですが、イエスとシモンのしゅうとめの反応を整理すると、中心にあるのは「悩み苦しんでいる人がいて、イエスはその人の悩み苦しみを取り去ってくださり、その人は一同をもてなす」という図式です。この中心にあるものが、何より大事だと思います。
つまり、わたしたちは人生を歩む中で、さまざまな悩み苦しみを経験しますが、その都度イエスはやって来て、あなたの悩み苦しみを取り去ってくださいます。もちろん、それは人間側が期待したとおりには起こらないかもしれません。
病人訪問をしながら、司祭はご聖体のイエスさまを届けますが、残念ながら司祭は病気を取り除くことはできません。けれども、ご聖体のイエスさまがおいでくださったことで、お見舞いを受けた人は慰められ、力を受けるのではないでしょうか。
ですからイエスは今も、人生のさまざまな悩み苦しみを抱えている人のもとを訪ねて、その悩み苦しみを取り除いてくださっています。救いの入り口を開くために洗礼を授けてくださり、罪の暗闇の中にある人に罪のゆるしを与えてくださり、いのちのためにご聖体となって食べ物を与

えてくださいます。
また人生に迷う時期に堅信の秘跡で聖霊の七つの賜物を注いでくださり、病気や老齢でいのちの危険にさらされている人を病者の塗油で励ましてくださり、イエスを捜し求める人々のために叙階の秘跡によってイエスの代理である司祭を生み出してくださり、2 人が一体となって歩んでいくために婚姻の秘跡で祝福してくださいます。
人間の側の期待通りとはいかないかもしれませんが、さまざまな形で、「悩み苦しんでいる人がいて、イエスはその人の悩み苦しみを取り去ってくださる」という図式が成り立っているのだと思います。問題は、そのあとの、「その人は一同をもてなす」という部分が残ります。わたしたちは、人生の様々な場面でイエスと出会いますが、その結果、一同をもてなすということにつながっているでしょうか。
シモンのしゅうとめは、自分が直面している悩み苦しみを取り除いてもらった感謝を、一同をもてなすことで態度に表しました。わたしたちもぜひ、イエスに出会い、イエスに自分の重荷を取り除いてもらった感謝を、形に表したいと思います。
いろんな場所に、感謝を表す形があるでしょう。家族に対してもてなしをすること、教会という、神の家族に対して奉仕活動をしてもてなすこともあるでしょう。小学生、中学生、高校生の教会活動のために力を貸すことも考えられます。自分が関わっているボランティアのグループ、社会の中での活動に参加することを通してなど、いろんな場所で自分にできるもてなしを発揮できます。
イエスはこの一連の動きを促すために、巡回して宣教しました。イエスは宣教に先駆けて人里離れた所で祈っておられますが、弟子たちはイエスを見つけると、「みんなが捜しています」と言いました。けれどもイエスは 1 つの場所に執着せず、次々に近くのほかの町や村へ出かけます。人々がイエスに出会い、イエスによってもてなす人に変えられていく。その一連の動きを活発にするために、どんどん場所を変えていきました。
初めは、イエスさまがエンジンを動かしてくださいます。それは、エンジンがかかった人が、他の人のエンジンを動かすためです。イエスはそうして、あちこちで神に出会い、神に変えられる人を生み出し、その人が周りの人を動かすことを期待しているのです。
きっと、今日のミサで、イエスはわたしたちのエンジンを動かしてくださり、わたしたちにも、わたしたちにつながるだれかを動かす人になるように、期待しているのだと思います。わたしたちはすでに模範になる信仰の先輩をたくさんいただいています。
特に、今日 2 月 5 日に祝う日本 26 聖人はそうです。26 聖人はイエスによって殉教者の証しをするだけのエンジンを動かしてもらい、まわりの多くの人をさらに動かしたのでした。今日 26 聖人の取り次ぎを願いましょう。そして、イエスによって変えられ、まわりの人をもてなすことができるよう、ミサの中で恵を願いましょう。

年間第 6 主日(マルコ 1:40-45

イエスに触れた人は、清められる

本原教会に、同じ郷里の戸村神父さまという先輩がおられます。本原教会はフランシスコ会が担当している教会です。先週の月曜日、本原教会の朝のミサに参加しました。先輩神父さまを初め、4 人で共同ミサをささげました。
その日、2 月 6 日は聖アガタの記念日でした。ミサ中、先輩司祭とのつながりを思い出していました。中学・高校時代もよく本原教会に顔を出していましたが、特に大学生の時代にかわいがってもらいました。
聖アガタの、「アガタ」とは、「よいもの」という意味があるそうです。創世記に、「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」（創世記 1・31）とありますが、殉教者アガタも、ご自身を神への純粋なささげもとのなさって、「よいもの」となられました。
戸村神父さまも、同郷のわたしを、いつも「よいもの」として扱って下さいました。大学の夏のスクーリングで、休暇になると当時栃木県の松が峰教会に赴任していた神父さまのところに転がり込み、ご飯をご馳走になり、観光名所の日光に連れて行ってもらったりしました。
よく考えるとわたしは教区の神学生だったので、どれだけかわいがってもらってもフランシスコ会には得にならないわけです。それなのに、先輩はわたしを「よいもの」として、「極めて良いもの」として接して下さいました。その心の広さに、わたしは頭の下がる思いです。
福音は、重い皮膚病を患っている人をご覧になったイエスが、「深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、『よろしい。清くなれ』」と言われると、たちまち重い皮膚病は去り、その人は清くなった。」（マルコ 1・41-42）という奇跡物語ですが、「手を差し伸べてその人に触れ」という部分に、わたしは心を打たれます。
重い皮膚病、それは、病気にかかっていない人を震え上がらせる症状だったと思います。思わず飛び退くような症状の人に、イエスは手を差し伸べ、触れて下さいました。イエスが医学の専門家だったから診察したのではなく、イエスは深く憐れんで、手を差し伸べたのです。
初めに、本原教会の同郷の神父さまの話をしましたが、目的があってわたしをかわいがって下さったわけではありませんでした。教区の神学生とか、自分のところの修道会の神学生とか、そういう区別なしに、寛大に接してくれた。その寛大さが、わたしの心に触れたのでした。
イエスのなさった奇跡は、それだけで十分心に触れる出来事だったと思います。声が届くはるか遠くから、「よろしい。清くなれ」と仰っても、病気は治ったかも知れません。けれどもイエスは、あえてこの重い皮膚病を患っている人に近寄り、触れた下さったのです。病気であるか、健康であるか、まったく区別なく接してくださるイエスの憐れみ深さに、この重い皮膚病の人は触れたのではないでしょうか。
イエスに触れてもらい、重い皮膚病の人はいやされたのですが、イエ

スは「だれにも、何も話さないように気をつけなさい」（1・44）と厳しく注意します。心を打たれ、どうしても話したくなるような体験をした人は、たとえ話すことを止められても、止めることはできないと思います。
例えばそれは、「これは内緒よ。だれにも話さないでね」と言った話が、どこまでも伝わっていくのと同じです。わたしが戸村神父さまに受けた恩も、面と向かって「だれにも話すなよ」と言われたことはありませんが、きっとそのつもりだと思います。けれどもわたしには、仕舞っておくにはもったいない、貴重な体験です。
重い皮膚病を癒されたその人にとっても、イエスが自分に触れて下さったその憐れみ深さ、病気を完全に取り去ってくださる神のわざを、話さないではいられなかったのではないでしょうか。
これは、わたしたちへの模範だと思います。わたしたちも、イエスのように、だれかの心に触れるようなお世話、おもてなしをする力が与えられています。何も経済的に豊でなければ、心に触れるお世話ができないということではありません。祈りを教えることによっても、親切をほどこすことによっても、人の心に触れ、その人が心を洗われるということは可能です。
イエスはまずそのお手本を示してくれました。そしてわたしは幸いに、そのような人の心に触れるお世話を知っている恩人と出会いました。今はわたしが、だれかの心に触れ、その人をいやしたり慰めたり、もう一度立ち上がるお手伝いをしたりする番だと思います。
もしもカトリック信者が、だれかの心に触れるようなお世話ができるとしたら、それはわたしを通してその人にイエス・キリストを届けるときです。わたし自身は、心に触れるような力は持ち合わせていないかも知れません。けれどもイエスは、人の心に触れ、イエスに心打たれた人が自分の体験を次の人に知らせる、そういう力を持っています。ですから、わたしの生活の中で、心からある人にお世話しようとするなら、もてなす人にイエス・キリストを体験させるとよいと思います。食事に招待したとき、食前の祈りを唱えて体験させるのも良いでしょう。そのとき、お世話を受ける人は、「同じことをほかの人からも受けたことがあるけれども、どうしてこの人のお世話は心に触れるのだろうか」と感じてくれると思います。
こうして、わたしたちのお世話、奉仕、隣人愛を通してイエス・キリストを体験させるためには、もっともっとイエス・キリストを知る必要があります。聖書の朗読会を活用したり、教会備え付けの聖書を借りていって、平日読み続けることもできます。いろいろ手を尽くしてイエス・キリストをよりよく知ると、わたしたちの生活そのままでだれかがわたしたちを通してイエスに触れる方法も、見つけることができるでしょう。
より多くの人が、イエスに触れ、イエスに触れた人が、さらに多くの人にイエスを知らせることができるよう、ミサの中で恵みを願いましょう。

年間第 7 主日(マルコ 2:1-12

イエスの前に運ばれた人は、いやされて

次の日曜日、浦上教会で叙階式が行われます。司祭叙階が 1 人、助祭叙階が 2 人です。司祭になるのは、曽根小教区の大水助祭です。わたしは叙階式というのは、教会が自分たちと社会に向けて証しをするとても大きな場だと思います。
何を証しするかと言いますと、ひとことで言えば「イエス・キリストは自分の生涯をかけて信じるに値する方です」という証しです。とくに司祭・助祭叙階は、生涯独身を貫いて、その生き方を全うするわけですから、教会にとって、また社会に対して、決定的な影響を与えることができます。午後 3 時からですので、あわせてお祈りいただければと思います。
考えてみるとこんな大きな喜びの日に、子どもたちを何とかして叙階式に参加させることができるなら、子どもたちの心に憧れを抱かせる絶好の機会なのになぁと今になって思います。五島の場合は、26 日日曜日午後 3 時の叙階式に参加させて、その日のうちにどうやって帰ってくるのかという問題があります。なかなか実現は難しいのですけれども、叙階式や、誓願式に子どもたちを連れて行くのは、チャンスがあれば実行したいと思います。
今週の中風の人をいやす物語で鍵を握っているのは、病人を運んできた四人の人です。大勢の人が集まっている場所に、四人の男が中風の人を運んできました。この四人は、イエスさまだったら病気を治せると信じて、中風の人を運んできた人たちです。群衆に阻まれていて、ふつうであればあきらめるところを、彼らはイエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろしたとあります。
イエスはこの人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言いました。四人は、病気の治癒のために行動したつもりでした。けれども、イエスは奇跡を、罪を赦す神の子としての権能に結び付けたのです。イエスは神の子であると、人々が神を賛美し、律法学者が神への冒とくだと心の中で考えるようになったきっかけを、病人を運んだ四人の行動で橋渡しをしたことになります。
中風の人は、病気であっただけでなく、何かの罪を抱えていたことになります。どのような罪だったのかは分かりません。運んできた四人は、病気を抱えている人の罪までは分からなかったかも知れません。けれどもイエスによって、罪の赦しと、最終的に病気のいやしまでいただいた様子を見て、イエスは罪を赦し、病気もいやす、この世でただ一人の人だと知りました。
病気の人を四人がイエスの前に運んできて、その様子をすべての人が注目しています。運んできた四人、弟子たち、取り囲んでいる人々、律法学者などです。もっと言うと、今日物語を黙想しているわたしたちも、様子に注目している中に含まれていると言えます。
そして、それぞれにイエスさまに対する思いが湧いてきました。神を賛

美する人々も現れましたし、神を冒とくしているとして心の底から憎しみを覚えた人も現れました。同じ場所にわたしたちも立っているわけです。
わたしたちも、自分の信仰を言い表す必要があります。イエスは病気の人を連れてきたときに、連れてきた人に見えていなかった部分、罪の赦しも与えて下さいました。このことでイエスさまは、わたしたちに考えさせようとしていると思います。「わたしは、あなたが気付いていない部分にも力をもっています。あなたはわたしを、信じて受け入れてくれますか。」
この招きに、よく考えて答える。これが今週のわたしたちの宿題です。例えばそれは、司祭・助祭に叙階される人々のように、「生涯をかけて信じるに値する方です」という信仰を表すこともできるでしょうし、「生活の基本、生きる土台です」という信仰の表し方もできるでしょう。ある人は命の危険にさしかかっていて、「最期を委ねることのできるお方です」と答えるかも知れません。
後輩司祭が誕生するこの時期、20 年前を振り返って、わたしはどうだったのかなぁとやはり考えてしまいます。「生涯をかけて、信じるに値するお方です」と、たしかに証しをしたと思うのですが、今その証しは曇っているのではないかなぁ、そう反省させられます。
わたしたちは誓いを立てたり、決心を抱いたり、またその誓いからある一定の時間が経っていたりしますが、それが初めのままの純粋な状態で保たれているかなぁと振り返ってみたらよいと思います。もし思う所があれば、何を補えばよいか、考えましょう。わたしたちの生活は、証しの生活であるし、証しを機会あるごとに振り返り、更新していく生活でもあると思います。
最後に、イエスの前に運んでこられた人は、罪を赦され、病もいやされてどこへ行ったのでしょうか。その続きの物語を、わたしたちが受け継ぎましょう。わたしたちの生き方で、「起き上がり、すぐに床を担いで、皆の見ている前を出て行った」その後の物語を「イエスを証しする物語」として、完成させましょう。

四旬節第 1 主日（マルコ 1:12-15）

四旬節第 1 主日(マルコ 1:12-15)

すべてが神に信頼することから始まる

説教の前に、福見教会は来年 4 月に教会献堂百周年を祝おうとしています。福見教会では、信徒が一致してこの日を迎えるために、標語を募集しました。すべての応募の中から、百周年の準備会議のメンバーが 5 つを選びまして、その中から 1 つ、教会の垂れ幕にしたいと思っています。福見教会の方々は、必ず 5 つの候補のどれかに、1 票を投じていただきたいと思います。

今日、浦上教会で叙階式が行われますが、わたしにとっての叙階式はほろ苦い思い出です。叙階式の前日、浦上教会の真下にあるカトリックセンターで叙階式を受けるわたしたちは明日に備えて泊まっていました。すでに島本大司教さまから浦上教会で働いてくださいと任命されていたこともあって、夜になってもなかなか寝付けませんでした。

「落ち着け、落ち着け」そう思うのですが、どうしても眠くなりません。そうしてようやく眠りについたのが 2 時頃だったのでしょうか。わたしは夢を見ていました。叙階式がすでに終わり、祝賀会が浦上教会の信徒会館で行われていたのです。

わたしのほかに、2 人が司祭に叙階されることになっていましたが、その 2 人は無事に叙階式を終えて舞台に上がり、皆さんから祝福を受けていました。そしてわたしは、なぜかパジャマ姿で、司祭に叙階された 2 人のお祝いをしている信徒会館の外に立って中を覗いていたのです。

ビックリして、飛び起きました。時間は朝の 4 時、まだ辺りは真っ暗です。「あー、夢か。」夢でよかったですが、この先が思いやられるなぁと思ったのを覚えています。興奮して、そのあとは結局眠れませんでした。

今になって思うのですが、あの夢はわたしに 1 つのことを教えてくれていたのだと思います。それは、司祭に叙階されるというのは純粋に神の恵みによるものだということです。わたしは司祭に叙階されることが許されて、前日カトリックセンターに待機していました。朝目が覚めれば、当然司祭に叙階される。わたしはそう思っていたのかもしれません。

ところが、イエスはわたしに違うことを教えようとしておられました。あなたは寝坊して、司祭叙階式に間に合わなかった。あなたの準備は十分足りていたけれども、夢の中ではわたしがあなたを呼ばなかったから、あなたは司祭に叙階されなかった。司祭叙階の恵みがどこから来るのか、もう一度よく考えなさい。そういうお告げだったのでしょう。

今であれば、イエスがわたしに教えようとしていることはよく分かります。司祭の務め、たとえそれが、どんなたやすい務めでも、神の恵みがなければその務めを果たすことはできないのです。司祭はだれかのため

に祝福を祈ることができます。ロザリオなどの信心用具の祝別、御像や十字架像の祝別も、特別な技術は何も必要ではありませんが、神の恵みがなければわたしは無力なのです。
一切を、神に頼って生きている。一切を、神に頼って果たす。そういう生き方を忘れてはいけないよと、叙階式の直前に夢の中で念を押してくださったのだと考えています。
今週の福音朗読はとても短いのですが、イエスが誘惑にさらされて、それと戦って打ち勝つ場面と、最初の宣教活動の様子が生き生きと描かれていると思います。わたしは、自分の叙階式にまつわる苦い思い出と重ねて考えました。
直前の誘惑、神に信頼することだけが、誘惑に打ち勝つ方法です。自分は鍛えているから、自分は長い訓練を受けているから誘惑に勝てる。そんなものではないのです。自分の力に頼ってはいけないことをよくよく教えるために、イエスが父なる神に信頼して過ごした四十日間を紹介するわけです。
人が過ちを犯さないためのいちばん確かな道は、神に全面的に信頼することなのです。わたしは配偶者を愛している。わたしは自分の愛情に絶対の自信を持っている。そうかもしれませんが、それは誘惑に打ち勝つ最高の武器ではないのです。自分に頼ろうとするとき、悪魔は巧みにその隙を攻撃してきます。
わたしはイエスさまを愛してこの奉献生活を生きている。わたしの愛は揺るがないから、誘惑に打ち勝つことができる。そういう思いは、悪魔が誘惑する格好の材料になってしまいます。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（1・15）この一言を人々に告げ知らせるとき、わたしは神に信頼して声を上げるのです。宣教開始までの準備が万全であっても、自分に信頼するのではなく、先に宣教に出かけられたイエスに信頼してついて行くのです。
これは、生き方をすっかり変えることでもあります。神への信頼を土台に置いた生き方。どんなに得意なことでも、自分に信頼するのではなく、最後まで神の導きにだけ信頼を置いて務めを果たす。徹底してこの生き方を貫く人は、四旬節の回心を果たした人なのだと思います。
どうか、今年の四旬節が、わたしの中にあるわずかな自信さえも砕いて、神に信頼することだけを追い求める四十日でありますように。神に信頼することより確かな道はないと、人々に証言できる人にわたしたちを造りかえてくださいますように。

四旬節第 2 主日（マルコ 9:2-10）

四旬節第2主日(マルコ 9:2-10)

まずはそう言ってみよう

「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。」(9・5)今週の福音朗読の中で、このペトロの言葉が目に留まりました。「ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。」(9・6)とありますから、実際には舞い上がっていて、よく考えずにこう言っていたのかもしれません。
それでも、ペトロの言葉は非常に意味深いと思います。イエスと、そこに同時にエリヤとモーセが現れて、そこへ3人の弟子たちが居合わせました。ペトロは、イエスの光り輝く姿を見て、その神々しさに「すばらしいことです」と言ったのかも知れません。たとえそうでなくても、イエスと一緒にそこにいることは、すばらしいことなのです。
イエスと一緒にいることを、言葉は違いますが「すばらしい」と理解していた人々を紹介しましょう。シメオンがその一人です。彼は、幼子イエスを神殿で奉献するためにやって来たヨセフとマリアの前で幼子を抱き、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」(ルカ 2・29-30)と声を上げました。
まだ何もイエスのみわざを見ていないのに、シメオンは十分満足ですと言ったのです。それは、「イエスと一緒にいること、そのことがすでにすばらしい」ということを表しているのだと思います。
また、イエスの十字架上での場面、イエスの右と左には犯罪人が十字架に磔にされていました。犯罪人の一人が「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」(ルカ 23・42)と言いました。するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(同 23・43)と言われます。犯罪人はイエスのみじめな姿しか見ていないのに、イエスの隣りにいることを「すばらしいこと」と理解していたのです。
シメオンも、犯罪人の一人も、イエスの華々しさを見たわけではありません。あっとおどろく奇跡を見たわけでもありません。むしろ、無力なイエスしか見ていませんが、彼らはそのイエスの側にいることを「すばらしいこと」と捉えることができたのです。
もちろん、イエスの華々しい場面も、示すことができます。イエスは親戚のラザロが死んだとき、もう埋葬されて四日も経っているラザロをよみがえらせました。「ラザロ、出て来なさい」(ヨハネ 11・43)と大声でラザロを呼び、墓から出てくる場面は、今週のイエ

スが変容する場面と変わらないくらい、神々しい場面、華やかな場面だと思います。
華々しい場面、神々しい場面で「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」と声を出すのは何も難しいことではありません。けれども、イエスと一緒にいるどんな場面でも、「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」と声を上げることが、イエスの期待していることではないでしょうか。
今週の福音朗読の結びで、「一同が山を下りるとき、イエスは、『人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない』と弟子たちに命じられた。」（9・9）とあります。今日はイエスの神々しい場面を見たかもしれません。けれども明日は、イエスのみじめな場面、避けて通りたいような場面を見せられるかもしれません。それでも、「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」と声を上げる。弟子たちの信仰がそこまでたどり着くのを、イエスは待っているわけです。
わたしたちにも、イエスは同じ期待を持っているのだと思います。今日３人のお子さんが福見教会で初聖体を受け、そのご家族、そしてここに集まった福見教会信徒の皆さんが、喜びで一杯になっていると思います。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」と、素直に喜びを表現できるはずです。
この喜びを知ったのでしたら、さらに一歩踏み込んで、どんなときでも、イエスと一緒にいることはすばらしいことですと、信仰を表明していただきたいのです。華々しい場面だけでなく、信仰に疑問を持ったり、カトリックの信仰のために冷たい視線を浴びたりする、そんな時でも、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」と言える。そんなイエス理解を、もって欲しいと思います。
誰にとっても喜ばしい場面があります。今年２月 26 日の司祭助祭叙階式がそうでした。今日の初聖体式がそうです。また堅信式、結婚式なども、イエスと一緒にいることを素直に喜べることでしょう。その喜びを、生活全体に結び付けて欲しいのです。イエスと一緒にいることは、いつも、どんなときも、すばらしいこと。その理解を、長い時間かかってもよいから、体に覚えさせて欲しいのです。
生活の中では、簡単に喜べない場面も多いかもしれません。その一つひとつに、イエスはそばにいてくださいます。簡単に喜べない場面を、「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」とひとまず言ってみること。イエスがそばにいてくれるのだから、どんな場面でも本当はすばらしいのだ。心からそう言える人に、育っていきたいのです。
今日、初聖体を受けるお子さんたちは、イエスさまをお迎えする家のようです。「仮小屋を三つ建てましょう」とペトロが言った、イ

エスを一緒にお泊めする住まいです。どうかこれからも、イエスが一緒にいてくださることはとてもすばらしいことだと、保護者の皆さん言い聞かせてあげてください。これからの生活のいろんな場面、朝起きたとき、ご飯を食べるとき、何かを願うとき、何かをがまんするとき、お祈りを通して神さまと一緒にいることはとてもすばらしいと、教え続けて欲しいと思います。
この教会に集まることを出発にして、「わたしたちが神さまと一緒にいることは、いつもすばらしい」そんな言葉を、子どもたちが覚えてくれるように、導いてあげてください。わたしも一緒に、お手伝いしたいと思います。
それでは、説教を終わって、初聖体の準備がふさわしくできているか、子どもたちに尋ねたいと思います。

四旬節第 3 主日（ヨハネ 2:13-25

四旬節第３主日（ヨハネ 2:13-25）

決して壊されない、真実の礼拝

黙想会が終了しました。さすがに説教師の神父さまも、4日間すべて終わった翌日、金曜日の朝はお疲れのようでした。それからすると中田神父はぜんぜん疲れていませんで、本当に楽させてもらいました。
ただ、別の部分では、ふだん気を回さないことに気を回したので、その点では疲れたと言えるかもしれません。「昨日はゆっくり眠れましたか」とか、ふだん絶対言わないですからね。ほかにも、食事が始まって、食事中どんな話題に触れようかとか、いろいろ考えていると初日はおかずの味がまったくしませんでした。
でもそんなことって、皆さんはふだんからしていることで、別に大げさに取り上げるようなことでもないのだろうと思います。そう考えると、主任司祭１人で暮らしている場合は、わたしも含め、自分勝手、独りよがりな暮らしをしているのだなぁということかがよく分かりました。
今年の説教師の評判はとても良くて、来年も来てくださいという声をそれぞれの教会から聞いています。いちおうわたしの頭の中には来年依頼したい説教師の予定はあるのですが、皆さまの希望が多ければ、また来年もお呼びしてもよいと思います。
さて今週四旬節第３主日に選ばれた福音朗読は、イエスが神殿から商人を追い出す話です。「イエスは縄で鞭を作り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し、鳩を売る者たちに言われた。『このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。』」（2・15-16）
この様子は、言葉や態度で注意を促すというものではなくて、イエスさまによる神殿の破壊行為だと思います。当時のユダヤ教の礼拝は、神殿でいけにえを伴って行われるのがふつうのしきたりでした。
いけにえは、汚れのないものであれば、自分で持ち込んだものでも通用したわけですが、遠い場所からやって来る人々が、汚れのない状態を保ったまま、いけにえの動物を連れてやって来るのは手間も暇も掛かって非常に困難なことでした。
そこで、神殿のいちばん外の境内で、いけにえの動物がそこそこの値段で売られていたわけです。さらに、神殿の中で使用できるお金は、神殿内だけで通用する古い貨幣である必要がありました。
当時一般に流通していた貨幣、例えばデナリオン銀貨は、「皇帝の肖像と銘」が刻まれていて、皇帝は自分を神としてあがめることを要求していたので、神殿でデナリオン銀貨は使えなかったのです。そこで神殿専用の硬貨と両替する人々が重宝するのでした。
神殿で商売が広がりすぎるのは、祭司やファリサイ派の人々も手放しで

は喜べない状況でしたが、しかたがないとして黙認していたわけです。けれども商売を野放しにしておけば、皆が皆無欲ではいられないわけです。そんな複雑な事情が絡んだ中で、イエスはわたしが破壊行為だと言った行動に出ます。
あえてわたしが破壊行為だと言ったのにはわけがあります。すでに話した通り、当時の礼拝の行いには、お金が絡んでいましたし、動物のいけにえが不可欠でした。イエスが神殿に奉献されたときでさえも、ヨセフとマリアは鳩をいけにえにささげたのです。
お金絡みの礼拝、いけにえに頼った礼拝を、やさしく注意するのではなく、まったく新しい礼拝に生まれ変わらせるため、イエスはこれら従来の礼拝を破壊しようとなさった。わたしはそう考えました。何よりも、当時のしがらみから抜け出せない礼拝と、礼拝にまとわりついている商売こそが、本来のあるべき礼拝を破壊していたのです。本来の礼拝を破壊していた行為を、イエスが破壊しようとした。わたしはそう受け取りました。
イエスの乱暴な態度に、神殿で商売をしていた人々、その商売を黙認していた人々はかんかんに怒りました。「あなたは、こんなことをするからには、どんなしるしをわたしたちに見せるつもりか」（2・18）それでも、イエスの毅然とした態度は変わりません。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」（2・19）礼拝の名を借りて金儲けをしていた人と、それを黙認する人たちがどれだけ礼拝を汚し、破壊させても、わたしは三日で建て直してみせる。イエスの強い決意が伺えます。
ところで、なぜイエスは「わたしは三日で建て直してみせる」と、断言できるのでしょうか。未来のことを、どうやって断言できるのでしょうか。「わたしは三日で、成し遂げてみせる」と、ほかの誰が断言できるでしょうか。
イエスは、ご自身の十字架上のいけにえによって、破壊された礼拝を建て直そうとしていました。「この神殿を壊してみよ」とは、「もし壊すなら」という意味よりも、もっと強い意味があると考えます。つまり、「あなたたちは神殿での本来あるべき礼拝を破壊している。気の済むまで破壊するがよい。わたしはみずからをいけにえとしてささげることで、本来あるべき礼拝を取り戻す。」イエスはこのように仰りたいのです。
イエスご自身が決めて、いのちをささげる。だから、未来のことであっても断言することができます。できるかできないか分からない未来のことではなく、誰にも強いられず、みずから望んでいのちをおささげになる。だから、確かな未来となります。イエスは、確実にご自身をおささげになることがおできになるお方なのです。
イエスがささげられる礼拝は、決して滅びない礼拝です。わたしたちは、今ここで、イエスをおささげする礼拝、ミサをささげていま

す。この礼拝は、父なる神に届く真実の礼拝です。ですから、この真実の礼拝、決して滅びない、どんなに時代が進んでも破壊されない礼拝に近づくために、わたしたちはできる限りの努力をしましょう。
日曜日に、ミサに集う人々はたくさんいます。もし、もう一つこの真実の礼拝を積み上げるために、平日のミサに参加してみようと努力してくれたら、どんなにすばらしいことでしょう。決して滅びない価値ある礼拝を、週にあと一度、積みまして人生を歩むなら、どんなに豊かな人生でしょう。
ぜひ、イエスが建て直したこの最高の礼拝を、人生の中に、一週間の中に、あと一日積み上げる。今週はそのようなことを考えてみてください。

四旬節第 4 主日（ヨハネ 3:14-21）

四旬節第４主日（ヨハネ 3:14-21）

光に近づく人に闇は打ち勝てない

3 月 12 日に、46 歳の誕生日を迎えましたが、今度は長崎の信徒発見の記念日でもある 17 日に、叙階記念日を迎えました。20 年前、1992 年の 3 月 17 日、島本大司教さまによって司祭に叙階させていただきました。たぶん、わたしの司祭生活は折り返しが来たと思います。つまり、40 年は司祭生活を期待できるだろうと考えています。50 年はちょっと期待しすぎでしょう。
折り返しは何事においても大事なことです。漁船が漁に出て、仮に大漁したとしても、折り返して無事に港に帰ってこなければなりません。世界の屋根と言われるような山に登っても、折り返して無事に下山しなければ成功とは言えません。わたしも、折り返して 40 年は務めを果たさなければ、わたしの司祭生活は未完成ではないかと思っています。引き続き皆さまのお祈りと、ご協力をお願いいたします。
この記念の日のすぐあとに、小教区で釣り大会が計画されたことは思い出に残る出来事です。みなさんと親しく交わる行事をもって、新たな折り返しの司祭生活を始めることができたのですから、それはとても喜ばしいことだと思います。天気は思わしくないようですが、今日１日、大いに楽しみたいと思います。
福音朗読に入りましょう。6 年前も考えた箇所を取り上げてみました。どこまで行っても出会うことのないものがあります。たとえば右と左。どこまで右に行っても左と出会うことはありません。または東と西、北と南。東へ東へどこまで行っても西と出会うことはありません。
このたとえを頭に置いて今日の朗読をたどっていくと、決して出会うことのないものが取り上げられていることに気付きます。それは、「光」と「闇」です。次の箇所です。「光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ」（3・19）。
光を求めれば求めるほど、闇は遠くなり、闇を追い続ける人間にとっては光は遠のいていくのです。物には表と裏のあるものがありますが、光の裏は決して闇ではありません。正反対ではありますが、光と闇に接点はないのです。
今日の朗読で示されている「光」、この光とはいったい誰のことでしょうか。「光が世に来た」とあります。「光」の意味を間違いなく理解するために、今日の朗読は直前で次のように言っています。「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」（3・17）。するとこの「光」とは、御子イエス・キリストであることは明らかです。

この光であるイエス・キリストに対して、人間はどちらかの態度を取り始めます。「光の方に来る」のか「光の方に来ない」かです。当然、選ぶべき態度は「光の方に来る」態度、朗読の中から取り上げると「真理を行う」ことがわたしたちの取るべき態度になります。繰り返しになりますが、「光の方に来ない」態度と「光の方に来る」態度とは決して出会うことはありません。イエスから遠ざかる態度を繰り返しているうちにいつの間にかイエスに近づいていたなどということはないのです。わたしたちがイエスに向かう態度をとり続けない限り、イエスのもとに集うことはできないのです。
そこまでは、わたしたちみなが頭で分かっていることです。けれども、分かっていたとしても切り替えることができない弱さもあります。周りの人も働きかけた、本人もいくら何でもそろそろ教会との関係を取り戻さなければと考えるようになった。でもそれでも、動けない、足が向かない、出かけようとしたけれども途中で帰ってしまった。人間はそれほど強くありませんから、いろんなことがあり得ると思います。
わたしたちを照らし導く光であるイエスは、何度も立ち直りそうになって挫折する姿を見て諦めてしまう方でしょうか。わたしはそうは思いません。神はある意味で諦めの悪いお方だと思います。人間であればさじを投げるような状況であっても、神は決して諦めない。そのことを表す明らかなしるしが、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」という部分に示されています。
その場を逃げ出したり、どうなっても構わないとまでなげやりになったりする人間を神は決して諦めず、独り子をお与えになるほど愛されたのです。神に残された最後の手段までも、わたしたち人間を「光の方に来る」ためにお使いになったのです。
イエスは、ご自分が父である神から遣わされた者であることをはっきり意識していました。この世界の人間をどこまでも愛して救いに導くためにご自身が遣わされたということを自覚していました。イエスはご自分の使命をある程度実行して終わったりはしません。ご自分を世に与えるのですが、ある程度与えるのではなくて、十字架の上で、いのちもすべてお与えになったのです。
光の方に来るのが正しい道だと分かっていても逃げてしまう弱い人間を光であるご自分と出会わせるために、イエスはみずからいのちを投げ出すのです。そのままでは光を憎み、避けてしまう人間をもご自分と向き合うことができるように、みずから、いのちを与え尽くすのです。
今週は四旬節の第４週目です。２週間後には受難の主日を迎え、十字架の場面の朗読を読み、ここまで出会いの場を準備してくださった神の深い愛に触れます。放っておくと闇を好んでいく弱い人間との出会いの場を、いのちをかけて準備してくださるその時が近づい

ています。わたしたちも、神との出会いの場に足を運んでくれない人たちに、何とかその機会を用意してあげましょう。
例を挙げておきます。聖木曜日、イエスが最後の晩さんの席で弟子たちの足を洗ったように、わたしたちもミサの途中で男性 12 人の足を洗います。せっかくの機会ですから、洗足式に新しい人を誘って、もう一度出直す機会を作ってあげましょう。
また、聖金曜日には、十字架の道行きをします。ここでもなかなか教会に足が向かない人を誘って、今まで背負ってきたものの代わりに、キリストのしるしである十字架を背負ってもらい、新しい出発を作ってあげましょう。
イエスが出会いの場をご自身を与え尽くして用意してくださったように、わたしたちもイエスとの出会いの場を、より多くの人に示してあげる努力が必要だと思います。

四旬節第 5 主日（ヨハネ 12:20-33）

四旬節第５主日（ヨハネ 12:20-33）

一粒の麦の実り、あなたはどう向き合う

明日と明後日、小学生と中学生１日ずつ春の黙想会です。先週火曜日に、今年の黙想会の説明会があって、参加してきました。鯛ノ浦教会の敷地をいっぱいに使って、聖書の箇所を拾ってプリントに書き込み、イエスさまの全生涯を学ぶようになっています。
まず、鯛ノ浦教会の敷地を７つに区切ります。その７つの場所に、６個ずつ聖書の箇所を貼り付けたヤクルトの入れ物が隠してあります。６個ずつ、７つの場所だから、全部で 42 個です。
浜串小教区は、浜串教会の小学生が１つのグループ、福見・高井旅教会の小学生がもう１つのグループとして行動します。中学生は全体で１グループです。このグループで７つの場所を移動しながら、42 個すべての聖書の箇所が記されているヤクルトを見つけ出して、イエスさまのすべての出来事を拾っていく。これが、今年の黙想会の仕組みです。
鯛ノ浦教会の７つに区切られた敷地の中の、どこかに聖書の箇所を貼り付けたヤクルトが隠されています。どこに隠されているか、グループで力を合わせて探さなければなりません。42 個すべて見つけて、その時間も競うそうです。タイムが良かった３位までは、すばらしい商品が用意されています。３位までにぜひ入って欲しいですが、とにかく知恵と力を尽くしてください。
先週の火曜日、定置網を引き上げに行く船に乗せてもらい、見学に行きました。今年に入って、定置網の船に乗ってみたいなぁと思っていたのですが、ようやく願いが叶いました。手早く作業する船員の皆さんに目を丸くして、仕事もろくにしませんでした。カラスを追い払うくらいしかお手伝いできませんでしたが、アジを袋に詰めてもらって帰りました。また機会があったら乗りたいです。
次の火曜日は中学生の合同黙想会に早くから子どもを連れて行きますし、その次は聖週間の火曜日で長崎での聖香油ミサに出席しますので、次に乗ることができるのは御復活明け、４月 10 日になりそうです。
さて福音朗読は、ギリシア人がイエスに会いに来る場面から始まって、人の子は上げられる、つまり十字架の上で命をささげるという最期の場面の予告をしている箇所でした。ギリシア人がイエスにお目にかかりたいと願っている。そのことをきっかけにして、「人の子が栄光を受ける時が来た」（12・23）と打ち明けました。
ギリシア人はユダヤ人からすれば外国人です。外国人、すなわち救いに招かれているユダヤ人だけでなく、すべての国の人がイエスにお目にかかるその時が来た、イエスはそう仰ろうとしているのでしょう。今こそ、一粒の麦が地に落ちて死に、多くの実、すべての人

の救いという実を結ぶ時が来たのです。
「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」（12・24）今年、このイエスのみことばを繰り返し口ずさみ、思い巡らすうち、次のように考えました。「イエスはご自分のことをぶどうの木と言ったり一粒の麦と言ったりしている。これは、収穫に関係するたとえだから、実際の収穫についても考える必要があるのではないか。」
今週の朗読で、イエスは御自分がどのような死を遂げるかを、一粒の麦にたとえました。イエスの十字架上の死によって、多くの実を結んだとき、それは収穫される必要があるのではないでしょうか。
作物が実を結び、収穫の時期が来ると、当然収穫に取りかかります。なぜ収穫するか。それは、作物の実りが、自分にとっても、他の人々にとっても、大きな喜びをもたらすからです。
イエスが、一粒の麦となって、多くの実を結んでくださいます。罪のゆるし、神との和解、救いの約束です。このイエスがもたらした実りを刈り取る人は、当然これらの実りが、自分にとっても、他の人々にとっても、大きな喜びをもたらすと考えて収穫に取りかかるわけです。自分に何の役に立つのか、他の人々にどんな喜びをもたらすのか分からずに収穫する人はいないのです。
では本当に、イエスがもたらす実りが役に立つと信じているでしょうか。ミサに集い、聖体の恵みにあずかりながら、イエスがもたらしてくださった実りは、今もわたしに喜びをもたらし、多くの人を喜びで満たすと、そう信じているでしょうか。もしそうであるなら、教会に足を向けない人に、あなたもイエスの実りを収穫に行きましょう、そう声をかけてほしいと思います。
あるいは、教会と全く縁のない生活をしている人に、自分は主日に教会に行っていること、教会でイエスの実りを喜び合っていることを告げ知らせ、分かち合っていただきたいのです。告げ知らせる相手から、「教会に行って何になるのだ」と言われたときこそ、イエスによる罪のゆるし、神との和解、救いの約束は、あなたにとってもきっと喜びになるよと誘ってほしいと思います。
収穫は、次の種蒔きのことにも思いを向けさせます。イエスはわたしたちを次のように招きます。「わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」（12・26）
イエスが、一粒の麦となって命をどのように用いるべきかお手本を残されました。「わたしに従え」とイエスは招いているのですから、わたしたちも、一粒の麦となる必要があります。一粒の麦となって多くの実を結び、罪のゆるし、神との和解、救いの約束を告げ知らせる者となれるよう、ミサの中で恵みを願いましょう。

受難の主日（マルコ 15:1-39）

受難の主日(マルコ 15:1-39)

あなたは何を十字架につけろと叫びましたか

長崎教区の司祭の異動が発表されました。ほとんどが、若い司祭の転勤でした。上五島地区は、今年の移動にはだれもかかっていません。また今年度も、現在の体制で司牧活動が進められていきます。詳しいことはよきおとずれ４月号がもうすぐ届きますので、そちらをご覧ください。
ちなみに、２月 26 日に叙階された大水満新司祭は、浦上教会の助任司祭として、今日から浦上で働いてくれることになっています。
聖週間が始まりました。特に聖なる三日間は、都合をやりくりして典礼にあずかってほしいと思います。今年は聖木曜日が福見教会で夜７時、聖金曜日が浜串教会で夜７時、復活徹夜祭は福見教会夜７時と浜串教会夜９時です。復活の主日のミサは、浜串教会が朝７時、高井旅教会が朝９時です。それぞれの教会はもちろんですが、できればお互いの教会に行って、三日間の典礼をすべて参加してほしいと思います。
実際には、参加が難しい方もいらっしゃるでしょう。そのような方のために、予定では聖木曜日までに聖週間の説教をすべて準備して、プリントにまとめて配りたいと思っています。高齢や病気などで参加が難しい人は、木曜日までに教会の入口にプリントを用意したいと思いますので、この期間の補いにしてください。
さて、今年の受難の主日にあたって、役割分担をした受難の福音から、群衆役をした皆さんの言葉を１つだけ取り上げたいと思います。群衆役のみなさんが出した言葉は何だったでしょうか。あれこれ言ってないので、すぐに思い出せるはずです。群衆はただ一言、「十字架につけろ」と叫んだのです。
「十字架につけろ」という言葉は、イエスを死に追いやる言葉です。確実に、イエスを亡き者とし、排除する言葉です。さまざまな言葉が飛び交う中で「十字架につけろ」という言葉が聞こえたのではありません。群衆が皆、いっせいに「十字架につけろ」と言ったのです。ですから、イエスを取り囲む群衆皆が、イエスを十字架につけることに加担したことになります。
群衆が十字架につけたのは、イエスお一人だったでしょうか。もちろん、イエスを十字架につけたのですが、「自分にとって都合の悪いことから逃れたい」そういう利己心に関わるものすべてを、イエスに背負わせて十字架につけたのではないでしょうか。
本来なら、自分で背負わなければならない罪を、わたしたちはいろんな理由をつけて逃れようとしています。今日だけ人をだましてやり過ごそう、この場だけ嘘を言って逃れよう、他人は死んでもしかたないが自分は死にたくない。そんなあらゆる利己心が、「十字架

につけろ」この一言に込められているのではないでしょうか。
マルコ福音書は、イエスが十字架に磔にされてから発したのは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味の「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」という言葉だけでした。
群衆に向かって、「あなたたちは、何も十字架につけるものはないのか」と追求することもできたはずです。けれども、イエスは御父のみ旨だけを尋ねて亡くなりました。わたしたちが十字架に磔にしなければならないものをすべてイエスが引き受けて、御父にゆるしを願ったのです。
この一週間、イエスが成し遂げてくださる救いのみわざを一緒にたどっていきましょう。わたしたちには何も手を出すことのできないイエスの尊いみわざを、できれば三日間通して、この目に焼き付けることにしましょう。

聖木曜日（ヨハネ 13:1-15）

聖木曜日（ヨハネ 13:1-15）

尊い場所にも日常にもイエスはおられる

聖木曜日の今日、わたしたちはイエスの２つの姿を考えてみたいと思います。福音朗読では、イエスは食事の途中で席を立ち、弟子たちの足を洗います。弟子たちの足を洗う姿、これがイエスの１つの姿です。
もう１つは、最後の晩餐で、パンとぶどう酒のもとに、イエスがご自分の御体と御血を存在させ、わたしたちのいのちの糧となってくださる御聖体です。これが、イエスのもう１つの姿です。この２つの姿から、今日わたしたちが持ち帰る学びを得ることにしましょう。
わたしが皆さんに示した２つの姿は、何を意味しているのでしょうか。弟子たちの足を洗うイエスと、御聖体となっていのちの糧になってくださるイエス。何を言いたいのでしょうか。
２つの姿は、２つのあり方、存在のしかたを表しています。つまり、イエスはごく普通の、日常的な場面に存在してくださるし、一方でとても崇高な、特別な場所にも存在しておられるということです。
「上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。」（13・4）このしぐさは、きっと僕たちのしぐさです。一家の主人、またその家族が抱えている使用人の取る態度です。そんなありふれた出来事の中に、イエスは存在してくださいます。
シモン・ペトロは、仲間の弟子たちの足を洗うイエスに、「わたしの足など、決して洗わないでください」（13・8）と言いました。主であり、師であるイエスが、使用人のしぐさをまねているなど考えられなかったのでしょう。主であり、師であるイエスが、使用人として存在するはずがなかったのです。
けれどもイエスは、シモン・ペトロの常識の範囲をひっくり返します。主であり師であるわたしは、最も低い身分の中にも、存在することができる。どんなに卑しい仕事、どんなに醜い務めの中にも、イエスは存在することができる。イエスはそのことを、弟子の足を洗うことで証明なさったのです。
一方でイエスは、世界でたったひとりしかできない御業の中に存在してくださいます。パンとぶどう酒のもと、「取って食べなさい。これは、あなたがたのためにわたされるわたしのからだ。」「受けて飲みなさい。これはわたしの血の杯。」世界で一つ、世界中のだれもが驚嘆する業の中に、イエスは存在するのです。
ではこの、２つのあり方、存在のしかたは何を意味するのでしょうか。わたしはこう考えます。イエスは、すべてのものの中に、すべての出来事の中に、存在することができる。たとえ人から低く見られ、だれもが嫌がる仕事の中にも、イエスは存在することができます。

それと同時に、だれもが目を見張る、だれもがあっと驚く仕事の中にも、イエスは存在することができるのです。どんな場所にも、どんな仕事の中にも、イエスを見いだそうとすれば、見つけることができる。イエスはそんな思いで、弟子たちの足を洗う出来事と、聖体の秘跡の制定の２つの業を弟子たちに示されたのではないでしょうか。
さらに、最後の晩餐の出来事は次のような雰囲気の中で行われたと書かれています。「イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」（13・1）イエスは弟子たちを愛しておられたから、低く見られている業の中にも、尊い業の中にも、ご自分が存在することをお手本として残されたのです。
イエスの業は、わたしたちへのお手本です。互いに愛し合うなら、どんなに低く見られている仕事の中にも、わたしは存在できるはずです。もちろん、だれもがうらやむような尊い仕事の中にも存在できます。わたしたちは他者を愛するとき、すべての働きの中に存在できる者にならなければならないのです。
配偶者どうし、一緒に働く仲間どうし、司祭と信徒、司祭と修道者、修道者と信徒。あらゆる関係の中で、イエスが示された模範を果たすように、わたしたちは求められているのです。わたしは司祭だから、そんなつまらない仕事はしない。わたしは信徒だから、そんな立派な務めはしない。どちらの場合も、人類をこの上なく愛し抜かれたイエスがすべての出来事の中に存在しておられることを考えれば、口にしてはいけない言葉ではないでしょうか。
ぜひ、この世界のあらゆる出来事、あらゆる仕事をもう一度見渡してください。そこにイエスが存在することなどできないはずだと思い込んでいた場所にも、イエスは共にいてくださいます。すべてのことの中にイエスの存在を意識しましょう。イエスがそこにいてくださるなら、すべてがイエスの存在を証明する道具になります。今日の学びを持ち帰り、すべての場所、すべての出来事を通して、イエスを証しする人となる。そのための恵みを、今日のミサの中で願いましょう。

聖金曜日（ヨハネ 18:1-19:42）

聖金曜日（ヨハネ 18:1-19:42）

使命のために生き、使命のためにいのちをかける

聖金曜日、イエスの御死去を仰ぎ見ました。イエスの御死去を、ひとことで言い表すとしたらどういう言葉が当てはまるでしょうか。それは、使命を全うして亡くなられた、ということではないでしょうか。
神の御独り子が、人となってわたしたちの間に住まわれ、十字架上でいのちをおささげになりました。人となったということは、必ず死ななければならないということです。どのような最期がいちばんふさわしいか。イエスはその姿を十字架の上で示したのです。それは、「使命を全うして亡くなる」ということでした。
ヨハネ 6 章 39 節でイエスは次のように言われます。「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。」イエスは御父から託された使命を完成させるために、十字架上でいのちをささげてくださったのです。
このイエスの亡くなりかたは、わたしたちに何を伝えようとしているのでしょうか。わたしたちにも、使命のために生き、使命のためにいのちをささげ、人生を全うするように招いているのです。何も語りませんが、そのお姿で、「あなたは自分に与えられた使命のために生きていますか。あなたは自分の使命にいのちをささげてくれますか」そう語りかけているのです。
ではわたしの使命とは何でしょうか。ペトロのように、いよいよになった時にイエスを「知らない」と拒むことでしょうか。あるいは「十字架につけろ」と叫ぶことでしょうか。それとも、槍で、イエスのわき腹を突き刺すことでしょうか。もちろん違います。わたしたちの使命は、それぞれの生活の中で、イエスがわたしのよりどころですと表明することです。
「イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。」（19・25）何かの目印の場所に立って待ち合わせをする人のように、自分はイエスのそばに立っていますと表明するのです。それは、表だった派手な活動ではありませんが、わたしが生涯果たし続ける使命として十分です。「あなたはカトリック信者か」と聞かれた時に「はいそうです」と答えるだけでも、イエスのそばに立っていると表明できます。
朗読の中でわたしたちの使命を考えさせるもう 1 つの姿がありました。アリマタヤ出身のヨセフは、イエスの遺体を取り下ろしたいと、ピラトに願い出ました（19・38）。イエスのために何かをしたいと、誰かに願い出ること。これもわたしたちが果たし続け、そのためにいのちをささ

げるのに十分な使命です。
イエスのために何かをしたい。その気持ちを形にする場所は教会の内にも外にもあります。教会内の活動に、人を誘うこともできます。あるいは、小さないのちを守る運動は、一般社会よりも教会が積極的に外に向けて訴えかけることのできる場面です。こうしたことに、積極的に関わり、使命を果たすこともできます。
今もイエスは、わたしたちに十字架の上から呼びかけています。あなたは今、使命のために生きていますか。使命のために、いのちをささげてくれますか。これから、十字架の礼拝に移ります。主の十字架をあがめながら、わたしは、こんな使命のために生きてみます。こんな使命のために、いのちをかけてみますと、心の中で表明しましょう。自分の十字架を担ってイエスに従うことができるように、力を願うことにいたしましょう。

復活徹夜祭（マルコ 16:1-7）

復活徹夜祭(マルコ 16:1-7)

だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか

主のご復活、おめでとうございます。今年の復活の喜びを黙想するために、真っ先にイエスのご遺体が納められた墓に行った女性たちの言葉を選びたいと思います。「彼女たちは、『だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか』と話し合っていた。」（16・3）この言葉です。
彼女たちがこのようなことを考えていたのは、もちろんイエスのご遺体に香料を塗るお世話をするためでした。イエスさまの復活を理解しての行動ではありませんでした。けれども、彼女たちの言葉は確実に、イエスのために次に何かしようという気持ちに満ちあふれていました。
彼女たちにとって、墓に埋葬されているイエスに次にすることは、香料を塗ることでしたから、そのことに心が向かっていたのです。「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」この言葉は象徴的に、イエスのために次に何かをしようと考えた人の言葉だったのです。
この言葉を発した女性たちに、神の使いが現れ、別の使命を与えます。「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」（16・7）
神の使いが彼女たちに新しい使命を与えました。墓に泣きに来た女性たちに次の使命を与えたのではありません。墓に、イエスのために次に何ができるかを考えてやって来た女性たちに、新しい使命を与えたのです。
この事実は、わたしたちにも考えさせます。イエスが死んで、復活しました。この場面で、次に何をしようかと考えている人には、復活したイエスが新しい使命を用意してくださるのです。反対に、イエスが死んで復活したのに、下を向いて泣いている人たちには、次に向かう使命を受け損なってしまいます。
わたしたちの教会に当てはめてみましょう。わたしたちの教会も、何かが死んで、何かが復活しようとしている時期だと思います。この時期に、「次に何ができるだろうか。次にこういうことができるのではないだろうか」と考える人には、復活したイエスは照らしを与えて次の使命へと向かわせると思います。
ところが、「あれもできなくなった、これもやむなく廃止となった。廃れていく一方だ」と、下を向いているだけでは、イエスの照らしにも気付かず、次の使命も取り逃がしてしまうのではないでしょうか。
ここでわたしたちは考える必要があります。わたしは今、この教会のために、次に何ができるか考えているだろうか。小学生として、中学生高校生として、社会人として、大きいことか小さいことかは関係ありませ

ん。次に何かしようというその気持ちが大切です。それさえあれば、復活したイエスが本当に必要な次の使命を、与えて派遣してくださると思うのです。
次に必要になってくること。「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」そう考える人がもっとたくさん増えて、この教会に新しい力となってくださることを期待します。
この教会のためだけでなく、上五島地区や、長崎教区のため、次に何が必要だろうか、何ができるだろうかと考える。そんな考え方の人を、今復活したイエスは捜し求めています。そして、次の行動を起こす人の力が集まって、望まれる浜串小教区、望まれる長崎教区の神の民となっていくことができるように、復活の主に願うことにいたしましょう。

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

あなたも、イエスの復活を知ったもう一人の弟子

あらためて、御復活おめでとうございます。今日の福音朗読は、先に墓に行ったマグダラのマリアの報告を受けて、その後に出かけた弟子たちのことが取り上げられています。シモン・ペトロと、イエスが愛しておられたもう一人の弟子が墓に向かったとされています。
ここで「イエスが愛しておられたもう一人の弟子」とあります。もちろん常識的には、使徒ヨハネのことをこう呼んでいるのだと考えるべきです。もちろんその点は踏まえてなのですが、今年わたしは、もっと豊かに、もっと大胆に考えてみたいのです。
「イエスが愛しておられた」という言葉は、とくに使徒ヨハネにふさわしいと思います。イエスの十字架上での最期の場面にも、ほかの弟子はだれも留まりませんでしたが、愛する弟子という呼び方で登場しました。誰がイエスを裏切るかを尋ねたのもこの弟子です。復活し、弟子たちに出現なさった時、「主だ」と声を上げたのも同じ弟子です。イエスから愛されている人でなければ、これほど近くで登場させることはできないと思います。
ただ、イエスが愛しておられたのは、シモン・ペトロも同じです。この弟子をいちばん愛して、別の弟子はそれより少し劣る愛し方をしたとは考えられません。聖木曜日の晩には、弟子たちをこの上なく愛し抜かれたのですから。
そこで考えるのは、「イエスが愛しておられたもう一人の弟子」は、イエスを信じ、イエスを愛しているすべての人に当てはめてもよいのではないか、ということです。すなわち、あなたも、イエスの復活を知ったもう一人の弟子、イエスが愛しておられたもう一人の弟子だということです。
イエスが愛しておられたもう一人の弟子の姿を拾いましょう。シモン・ペトロと一緒に走ったが、「ペトロより速く走って、先に墓に着いた」（20・4）とあります。あなたはまだ若さに自信がありますか。速く走って、イエスに会いに行くために競走できますか。ではイエスが愛しておられたもう一人の弟子になることができます。
彼は先に墓に着き、身をかがめて中をのぞきましたが、彼は中には入りませんでした。あなたは先に墓についても、責任ある人に最初に墓に入る栄誉を譲る謙虚さがありますか。責任ある人の意見を聞いてから自分の態度を決める慎重さがありますか。ではイエスが愛しておられたもう一人の弟子になることができます。
あなたは、一緒にイエスのもとについた責任ある人と一緒に、イエスの復活を心から信じてくれますか。神のご計画、神の愛は、一度死んでも、

必ず復活すると信じ、それを人にも知らせることができますか。では、イエスが愛しておられたもう一人の弟子になることができます。
わたしたちはどこかで、イエスの愛しておられたもう一人の弟子になれるのではないでしょうか。足が速くて謙虚で、復活を信じる堅固な信仰この３つをすべて備えてはいないかも知れませんが、そのどれかには当てはまる、そのどれかには近い生き方をしているのではないでしょうか。
わたしたちがイエスの愛しておられたもう一人の弟子であるならば、シモン・ペトロのような責任ある人と力を合わせて、復活したイエスの証人となるべきです。それはつまり小教区の一員として、主任司祭や小教区評議会の方々と力を合わせて、証しをすることです。
イエスは今生きて、わたしたちを喜びで満たしておられる。復活したイエスを信じる人は、今喜びを抱えて生きることができると、あなたが生きる場所で証ししてください。復活したイエスは、さまざまなしるしで、これからあなたの証しを裏書きしてくださいます。

神のいつくしみの主日（復活節第２主日）（ヨハネ 20:19-31）

神のいつくしみの主日（ヨハネ 20:19-31）

神はどんな人にもいつくしみを忘れない

先週火曜日、性懲りも無く定置網の舟に乗せてもらい、沖合での作業を見学させてもらいました。この日はカメラをもっていって、お父さんたちの作業の様子をいろいろ写真に納めてきました。調子に乗って写真を撮っていたら、途中で「神父さん、ちょっと、どいてくれ」と言われ、あちゃーと思った場面もありました。
この時はカッパは着ていったのですが、手袋をせずに行きまして、結局新品の軍手を貸してもらい、ちょっとだけ手伝いをしました。獲れた魚の中から、アジを選り分ける作業です。わたしもさすがに、アジなら見分けが付くので、喜んで手伝いました。
戻ってきてからは、すべての魚を種類別、大きさ別に選別する作業が始まりました。アジの選別が終わってから、今度はイカの選別も手伝ってみたのですが、このイカは発泡スチロールに入れるのかなと思って選んでみると、お父さんにはねられ、ではこれではどうだと選んでも、またはねられ、なかなか力になれませんでした。
最後は、発泡スチロールに入れないイカ、いちばん小さいイカを選ぶ手伝いを命じられました。これならわたしにもできると思って、手伝っていたのですが、「神父さん、これはマツイカ。」そう言われて、この作業でもわたしが選んだものがはねられました。なかなか、選別作業も難しいです。邪魔ばかりしていたのですが、ただで魚をもらって帰りました。今月は長崎に行く用事が何回かあるので、もう乗れないかもしれません。
さて今週は、前教皇ヨハネ・パウロ２世が「神のいつくしみの主日」と命名された復活節第２主日です。わたしたちに対する神のいつくしみを、朗読を通して読み取りたいと思います。
イエスの復活後、弟子たちはその事実を何度か聞かされながら、まだ恐れのために尻込みして家の戸に鍵をかけて閉じこもっていました。時間は夕方です。「その日、すなわち週の初めの日の夕方」（20・19）とあります。
朝、まだ暗いうちに、マグダラのマリアが墓に向かい、出来事をシモン・ペトロとイエスが愛しておられたもう一人の弟子のところに知らせに来ています。何かが起こったことをすでに知っていたのです。けれども弟子たちは、その日の夕方になっても、恐れに囚われていました。
イエスは弟子たちの恐れを取り除こうと、家の中に閉じこもっている彼らの真ん中に立ちました。「あなたがたに平和があるように」と言われました。言葉で、恐れを取り除こうとします。手とわき腹とをお見せになりました。行動で、恐れを取り除こうとします。いろいろな手段を尽

くして、弟子たちの心の中にある恐れを、取り除こうとされたのです。そして最後に、彼らに息を吹きかけて言われました。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」（20・22-23）最後には聖霊の息吹によって、いっさいの恐れから弟子たちを自由にしたのです。
ところで、トマスはその場に居合わせませんでした。恐れのため、家の戸に鍵をかけていた弟子たちとは別の場所にいたことになります。もしかしたらトマスは、ほかの弟子たちのような恐怖心はなかったのかも知れません。彼は恐れには捉えられてなかったかもしれませんが、別のものによって不自由にされていました。
「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」これは、トマスの利己心の表れです。イエスが復活したことは、弟子たちの証言「わたしたちは主を見た」という証言で十分です。それなのに、トマスは利己心に駆られ、イエスからの特別な扱いを要求したのです。イエスはトマスの利己心に縛られた心も解き放ってくださいます。わたしたちを不自由にしている最後の砦もまた、利己心かもしれません。こうしてイエスは、すべての人が、復活したイエスによって喜びに満たされるように、縛られている心を自由にしてくださいます。
神のいつくしみはここに最高の形で現れます。神は、わたしたちが復活したイエスに出会って喜びに満たされるように、あらゆる手を尽くしてくださいました。トマスの身勝手な要求にも応えてくださいました。
今わたしたちは、神のいつくしみを感じているでしょうか。復活したイエスは、わたしたちの望みにどこまでも手を尽くしてくださる方だと思えるでしょうか。わたしたちの教会に必要な支えを、いつでも与えてくださる心の広い方だと、理解しているでしょうか。
今週、神のいつくしみ深さに信頼して生きる恵みを願いましょう。トマスの要求にも、十分に応えてくださったイエスは、今もわたしたちの願いに応えてくださいます。信頼をもって、新たな一週間に入ることにしましょう。

復活節第 3 主日（ルカ 24:35-48）

復活節第３主日（ルカ 24:35-48）

イエスはあなたの心の目を開く

浜串小教区に来て３年目に入りますが、司祭が授ける秘跡の中で、ゆるしの秘跡と病者の塗油はまあふつうに授けましたが、洗礼は２人だけ、結婚にいたってはまだ１組も扱っていません。〇〇さん〇〇さん、もう一回結婚してくれませんかと内心言いたいくらいです。
それはひとまず横に置いたとしても、洗礼を２人しか授けていないというのは、司祭として恥ずかしい限りです。わたしの努力も足りないわけですが、わたしが「洗礼受けませんか」と上から目線で誘うよりも、皆さんが、誰か洗礼を受けてくれそうな人を連れてきてください。
良い方法を教えます。誰か知り合いに、洗礼をまだ受けていない人、洗礼を受けたほうがいいなぁという人がこの上五島のどこかにいるとします。その人に働きかけましょう。ただし、「あなた洗礼を受けてみない？」と声をかけるだけではなかなか成功しないと思います。そこで、こう切り出すことをお勧めします。「わたしも神父さまのところで一緒に勉強するから、洗礼受けてみない？」こんなふうにお誘いしてください。
洗礼を勧めたい人がそこにいても、その人が１人で司祭館の敷居をまたぐのは至難のわざだと思います。本来は、そんなに司祭館の敷居が高くてはいけないのですが、実際には１人で訪ねるのは相当勇気が要るでしょう。そこで、まぁ半年から１年、勧めてくれるあなたも、週１回のペースで一緒に勉強してみてはいかがでしょうか。
昔は、洗礼を受ける人が責任もって自分で司祭のもとに行って、洗礼の準備を始めていただろうと思います。ですが今は、そんなこと言っていてはチャンスを逸してしまうことになります。
一緒に勉強すれば、誘ってくれる人も必ずためになるのですから、どうかこの方法で今年のクリスマスか、来年の復活祭までに、洗礼志願者が与えられることを願っています。近所だから、一緒に洗礼の準備に付き合う、この人をよく知っているから、一緒に準備についていく。そうやって、半年から１年、一緒に時間を費やしてくれる人を期待します。
さて今週の福音朗読は、マグダラのマリアに起こった出来事、さらにエマオに向かう弟子たちに起こった出来事の後に続く物語です。復活したイエスは集まった弟子たちの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われました。弟子たちが亡霊を見ているのだと思い、なかなか信じられないでいるので、イエスはその場で焼いた魚を食べました。もちろん、魚を食べることが復活したイエスの果たそうとしていた目的ではありません。イエスが本当にしようとしていたことから、今週の学びを得たいと思います。それは、「イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた」（24・45-46）という場面です。

イエスが集まっていた弟子たちに果たしたかったこと。それは、「聖書を悟らせる」ということでした。そして聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いたり、聖書に書かれている中心的な教えを語り掛けたのです。
「聖書を悟らせる」聖書が大事なことは、わたしたちは言われなくても分かっています。けれども、言われなくても分かっているのに、聖書を大事にしているかと聞かれたら、「大事にしている」と答えられない生活をしています。
残念なことですが、今日を生きるのに、聖書を大事にしていないからです。自分と家族、職場や滞在先などの自分が属している場所で、聖書を大事にしていないからです。それはわたしに責任がありますが、どう大切にすればよいのか、これまで聞いたことも考えたこともないのです。
そこで、イエスは「聖書を悟らせるために心の目を開いて」くださいます。かつて弟子たちの心の目を開いてくださったイエスは、今わたしたちの心の目を開いてくださいます。
どのように聖書を大切にすればよいのか。身近に触れた聖書の朗読箇所を、生活の中で思い出してみたらよいと思います。例えば今週の福音朗読でイエスご自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われました。
今もイエスは、わたしたちの家庭に、わたしたちの職場に、わたしたちが今いる場所に、「平和があるように」と言ってくださるに違いない。そう信じて生活するなら、わたしたちは生活の中で聖書を大切にしていることになります。わたしたちに届けられた聖書のみことばを、生活に結び付けるために、イエスは今もわたしたちの心の目を開いてくださるのです。
今日、復活したイエスは弟子たちに、「『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。」（24・46-48）そう仰いました。この箇所も、わたしたちが心の目を開いてもらえば、生活と結び付けることができます。
つまり、説教の最初に触れましたが、まだいろんな事情やいきさつがあって、カトリックの洗礼を受けていない人を誘って、「一緒に勉強付き合うから、洗礼を受けてみない？」と声をかけること。これは、具体的な生活の中でイエスの証人となる行動です。イエスが弟子たちに命じたことばそのものではなくても、あなたにできる福音宣教の第一歩です。
わたしたちが復活したイエスに心の目を開いてもらうなら、きっと聖書を悟ることができます。わたしたちが手にとって読むことのできる聖書は、ユダヤの国の遠い昔の物語ではなく、今わたしたちの

間で繰り広げられている神の働きを教えてくれるのです。
わたしたちが聖書を悟り、聖書は復活したイエスが今わたしたちの間で働いていることを教えるものだと証しできますように。そのためにイエスがわたしたちの心の目を開き、わたしたちに行動する勇気を与えてくださいますように。ミサの中で願い求めましょう。

復活節第 4 主日（ヨハネ 10:11-18）

復活節第４主日（ヨハネ 10:11-18）

イエスはわたしたちのために命を置いてくださる

大型連休に入りました。休み気分で、真面目な話も耳に入らないかもしれませんが、今日は信徒総会も控えていますし、頑張って、説教も聞いているふりをしてください。
ついこの前の病人訪問の時ですが、家庭でお見舞いを受けているある方が、「病人訪問ご苦労さまです。どうぞこれを飲んでください」と、リポビタンＤを冷蔵庫から出してごちそうしてくださいました。
わたしには冷蔵庫はまったく見えていなかったのですが、その方が冷蔵庫を開けて、きちんと扉を閉めなかったのが様子で分かりました。しばらくすると案の定、冷蔵庫がピーピー言っているわけです。幸か不幸か、リポビタンをくれたおばあさんも、付き添いのため一緒にいたもう１人も、冷蔵庫の警告音は聞こえていませんでした。
そこでわたしは親切心を起こしまして、「ばあさん、冷蔵庫がちゃんと閉まっとらんぞ」と教えてあげたわけです。「冷蔵庫がですか？」と本人は言っていましたが、付き添いで一緒にいた人が冷蔵庫を確かめに行くとその通り扉はきちんと閉まっていません。それでその人が扉を閉めますとバタンと音がしまして、リポビタンを出してくれた本人も、ここでようやく扉が閉まってなかったことを理解します。
そこでこのおばあさんがわたしにこう尋ねるわけです。「神父さま、どうして冷蔵庫の扉が閉まってないことが分かるんですか？」まともに答えようかとも思いましたが、それではまったく中田神父らしくないので、中田神父はこういう人間であるということを知らせるために、次のような返事をしました。
「神父は神さまの次に偉いのである。だから、たとえ冷蔵庫が見えなくても、扉を開けっ放しにしていればすぐに分かるのである。」そのおばあさんは目を丸くして、わたしを見ていました。あの顔では、きっとわたしがああいう冗談を言う人間だと、分かってなかったと思います。
今週の福音に入りましょう。今週の福音でわたしの心に響いたのは、「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」（10・14）という箇所です。イエスのこのみことばを、まずわたし自身に当てはめて考えてみました。
今、わたしにゆだねられている 400 人近い浜串小教区の信徒はわたしの羊です。「わたしは自分の羊を知っており」とイエスが言うように、わたしは小教区の一人ひとりをどれだけ知っているだろうか。司祭が、羊である信徒一人ひとりを知る機会はどれくらいあるのでしょうか。社交的で、どんな場所にでも顔を出す司祭であれば、その才能を発揮してまかせられた羊のことをより多く知ることがで

きるでしょう。ただ、すべての司祭が社交的で、差し出されたものはいっさい拒まないというわけではありません。ちょっと人づきあいが苦手な司祭もいるわけです。わたしもたぶん、そういう部類だと思います。
そんな、人づきあいの才能にそれほど恵まれていない司祭は、限られたチャンスを、一つも見逃さないつもりで、観察する必要があります。一度しか、話しをしないかもしれない。教会で会えればいいけれども、今立っているこの場所でしか、この人とは会えないかもしれない。
それはつまり、出かけた先で、波止場かもしれないし、青方かもしれないし、奈良尾ですれ違う一瞬かもしれません。たぶんその人とは、今この瞬間しか会えないかもしれません。そうであるなら、そのときの印象を忘れないように、そのとき目に留まったことを大切に、心にとどめておく必要があります。そうして、羊飼いとして、ゆだねられた羊を何とか、片面だけでも知ろうと、心にかけているつもりです。
一方でイエスは、「羊もわたしを知っている」と言います。リポビタンの話しではないですが、わたしではなく、違う司祭であれば、違った返事をしたことでしょう。「ああ、こういう返しかたをするのか。だったら、こういう人なのかな。」何かを読み取ることができるのではないでしょうか。
そして羊飼いであるイエスは、羊飼いが本当に羊飼いと言えるかどうかを、次のように結論づけます。「わたしは羊のために命を捨てる。」（10・15）主任司祭が、小教区の信徒のために命を捨てるのでなければ、それは羊飼いとして失格ということです。
「命を捨てる」このギリシャ語を直訳すると、「命を置く」ということになるそうです。これはそのあとに続く「わたしは命を、再び受けるために、捨てる」（10・17）にも関係しています。イエスは命を、再び受けるために、「置く」のです。
イエスは羊のために、命を置きました。イエスが命を置いた羊は、イエスが知っている羊ですが、同時にか弱い羊です。全力で導き、全力で守らなければなりません。小教区の信徒を導き、守っているか。わたしに問われています。
何も自信をもって伝えるものがありませんが、最近気付いたことを１つ話します。出張して長崎に泊まったときのことです。わたしは出張した時に、大司教館の小さなチャペルで、ただ一人でミサをささげることがあります。そこには誰もいませんが、ミサをささげながら、必ず皆さんの顔が浮かんでいます。
不思議なもので、誰もいないと、調子が出ないというか、ミサの祈りの言葉もすらすら出てこないのです。それで、ふだん通りのミサのことを思い出してささげますと、ミサの祈りもすらすら出て来ま

す。そのとき、皆さんの顔がはっきり浮かんでいます。皆さんを思い浮かべ、いつも、どこでもミサをささげています。ずっと、思い続けていますので、時間はかかりますが、羊を知り、羊を守り、導いていけると信じています。
わたしたちの牧者であるイエスが、命を置いて、守り導く姿を、お一人おひとり生活の中で当てはめてみましょう。きっと、今求められていることが何か、はっきりしてくると思います。命を置いて、わたしたちを守り導くイエスに、全面的に従う。ミサの中であらためて確認したいと思います。

復活節第 5 主日（ヨハネ 15:1-8）

復活節第5主日(ヨハネ15:1-8)

イエスに信頼し、ただただぶどうの実を付ける

今から21年前の夏の話しです。上五島地区で子どもの集いが開催されまして、上五島備蓄記念会館を会場にミサが行われました。あの時わたしは司祭になる一歩手前の助祭でして、子どもミサの説教を地区の司祭団から依頼されていました。その当時の地区長神父さまは7年前に亡くなった丸尾武雄神父さまでした。
たまたまその年は、福岡の大神学院で秋に開かれる召命の集いに、1000人が集まる野外ミサの説教を担当することになっていました。夏休みにはすでに説教原稿を書いていましたので、上五島地区司祭団から依頼された時は、「度胸試しにいいか」くらいの気持ちで引き受けました。
もともと、野外ミサでの説教のつもりで用意していたので、備蓄会館のような大きな会場にもぴったりでした。実は上五島地区子どもの集いのミサと、大神学院の召命の集いのミサに選ばれた福音の朗読の箇所が、今週朗読された「イエスはまことのぶどうの木」だったのです。
みなさんの中で、21年前の子どもの集いに、子どもを連れて備蓄会館に行った人はいないでしょうか？あるいは子どもとではなくても、「もういいかい？まぁだだよ」と若い助祭が説教で語り掛けていたミサに参加した記憶がないでしょうか。
わたしは当時は25歳とかなり若かったので、とんだりはねたりして説教をしたのです。説教の取っかかりに使ったのはかくれんぼです。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」（15・5）イエスと弟子たち、イエスと人類とのこの緊張感に満ちた関係をどうやって子どもたちに伝えるか。その取っかかりに、かくれんぼを選んだのです。
ご存じのようにかくれんぼは、「もういいかい」「まぁだだよ」で鬼と隠れている人とが巧みに距離を置いて楽しむものです。ある時は息を潜めて隠れている自分の近くを通り過ぎるかもしれない。ある時はせっかく最高の隠れ場所に入ったのに、違う友だちがやって来て、その友だちのために自分が見つかるかもしれない。生き生きとした緊張感の中で、隠れている人と、探し出そうとする鬼とがつながっている。それが、ぶどうの木であるイエスと、わたしたちとの生き生きとした関係なのだと、ステージいっぱいに動き回りながら話し掛けたわけです。
最後まで、その説教はやりきりました。考えていたことはすべて出し切りましたし、当時としては持てるすべてを出し尽くしました。ところが、ミサが終わってからわたしは、地区長神父さまに叱られまして、あんな説教があるか、だれがこの人に説教を任せたのだと、酷評されたのです。

あー、ご年配の神父さまには、ちと刺激が強すぎたかなぁと反省したのでした。
ですが本番は上五島地区の子どもの集いではありません。福岡の大神学院での野外ミサです。九州全域から 1000 人もの子どもたちが集まり、数多くの司祭も集まり、当時の松永司教さまが司式をなさるミサの中で、まだ司祭になっていない助祭に過ぎないわたしが説教する。これが本番だったわけです。
気を取り直し、11 月 3 日の召命の集いの日までもう一度説教の内容を完全に覚えて、それこそ野外ミサのグランドをいっぱいに使って子どもたちに話し掛けました。説教が終わった時、「やり遂げた」という実感がありました。それを後押しするかのように、会場の子どもたちや保護者がわたしに拍手をくださったのです。説教に拍手が来るなんてそうそう無いことですが、そのときはそういう雰囲気になっていたのでしょう。
無事に、本番の召命の集いのミサ説教が終わった。わたしはそう思いました。ところが、わたしはこの時も、司式された司教さまから説教を酷評されたのです。まるでなってない。説教にあるまじきパフォーマンスだと。この時は本当にうちひしがれました。
この日のために半年掛けて準備したのに、理解されなかった。司祭団の中には理解を寄せてくれる方もいたわけですが、司教さまが公然とあの説教は何だと言っておられるのですから、あえてそれを遮って盾になってくれる司祭はいません。わたしは孤立してしまいました。
あれから長い時間を経て、あらためて考えるわけです。「わたしを離れては、あなたがたは何もできない」（15・5）そうイエスは仰ったのですが、あの時わたしは、イエスというぶどうの木につながって説教していたのだろうか。それとも、イエスにつながっていないまま、意味の無いパフォーマンスをして終わったのだろうか。
３年前も、同じ答えを探し求めていました。そのときたどり着いた答えを引用したいと思います。21 年前の子どもミサと召命の集いの野外ミサに参加した司祭たち、だれもがイエスにつながっている枝だという自覚を持っていたのですが、それぞれの枝が、はじめて説教を任された助祭という別の枝を認めることができないでいたということです。
いろんな理由がそこにはあるかも知れません。今枝を伸ばし始めたあいつに何ができる。わたしたちは何度も枝にぶどうの実を付けてきた者だ。同じ仲間だと言われてもそう簡単には認められない。このような思いが、心のどこかにあったのでしょうか。
問題を複雑にしている原因があるはずです。おそらく原因は１つです。１つの枝から、他の枝を見ているからです。自分という枝から、他の枝を見れば、かなり遠く離れて見える。もしかしたら正反対の方向に伸びているので、全く共通点が見いだせないかも知れません。どうしてこれだけかけ離れている相手を、仲間だと信じられるだろうか。
けれども、わたしたちすべてに聖霊を注ぎ、養っておられるイエスとい

う木から枝を見ることで、見え方は変わってきます。あの枝も、この枝も、もっと言うとすべての枝が、等しくイエスから聖霊を注がれた枝なのです。
わたしという枝から見れば遠く離れているかも知れないその枝も、イエスという木から見たとき、だれもがほぼ同じ距離にあるのです。イエスが注ぐ聖霊の届くところに、すべての枝がつながっているのです。
３年前に思い巡らしたことを読み返して思いました。わたしも、イエスというぶどうの木から聖霊という養分をいただいて説教をしたのだ。枝が伸びた方向は、他の多くの司祭たちと違う方向に伸びていたかもしれない。それでも、神はわたしがいよいよ豊かに実を結ぶように、手入れしてくださったのだと。
わたしたちも、たとえば一つの活動に参加しているある方を見て、自分たちと同じように動いてくれないから、認めたくないと思うことがあるかも知れません。けれども、枝から枝を眺めるのは良い観察の仕方ではないのです。あくまでもぶどうの木であるイエスにつながって相手を観察しましょう。そのとき、違う個性であっても、イエスにつながっている別の枝として認め、理解する道が開けると思います。
互いが互いを認め合い、多くの枝があることを知って、教会にたくさんのぶどうの実が与えられますように。わたしと違う枝であることにこだわるのではなく、違うたくさんの枝を聖霊の賜物で養っておられるイエスのご計画の深さ、広さに信頼できますように。信頼する心を、このミサを通して願い求めましょう。

復活節第６主日（ヨハネ 15:9-17）

復活節第 6 主日（ヨハネ 15:9-17）

イエスの掟を世界に告げ知らせる

今週復活節第 6 主日の福音朗読はヨハネ 15 章の 9 節から 17 節になっていますが、そのうちの 12 節から 17 節が、2 日前の金曜日の福音朗読に選ばれていました。木曜日から金曜日というのは中田神父が福見教会の司祭館に泊まって朝を迎える、そういう時間の過ごし方をしている日です。
具体的には、木曜日夕方 5 時半に福見教会でミサをして、6 時過ぎからの小学生高学年のけいこを終えて、晩ご飯食べたらいろいろ持ち込んだ仕事や趣味をごそごそして、眠りに就くわけです。
さてこの前の木曜日から金曜日のことをなぜ取り立てて話しているかと言いますと、実は金曜日の朝ミサに寝坊しまして、ミサが始まる時間に誰かが司祭館のチャイムを鳴らしてようやく起き上がり、ミサをささげに行ったのです。
福見教会に泊まる時は、わたしのケータイの目覚ましは 2 回に分けてセットしたものが鳴り出すことになっています。1 つは 5 時 15 分、たいていこれでは起きませんが、もう 1 つの 5 時 30 分ではさすがに飛び起きて準備をしています。司祭館から香部屋まで 10m もありませんから、起きさえすればすぐに行くことができます。
ところがこの前は、2 回の目覚ましにまったく反応できませんでした。福見教会は 5 時 35 分に教会の鐘も鳴ります。わたしのベッドから 10m という至近距離でけたたましく鐘が鳴ったはずなのに、その鐘にさえもまったく反応せず、寝込んでいたのです。
それでも、5 分前に誰かが鳴らしてくれたチャイムにはビックリして起きまして、申し訳ない思いでミサを始めました。福音のあとの短い説教も、ふだんは少しくらいは準備をするのですが、準備もなく福音朗読に向かったのです。
わたしが言うのも変な話しですが、神さまはいますね。絶対にいます。福音朗読のあとの説教は、準備して話しをする時よりもよほどまともなことを話していました。自分で話しながら、「なるほどなぁ」と思ったくらいです。そういうことで、金曜日に話したことをもう少し膨らませて、今週の福音の学びとしたいと思います。
選ばれた朗読の中で、イエスの次の語り掛けに注目しました。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。」（15・12）
イエスは掟を弟子たちに示しました。「掟」ということばは、日本語では「社会の定め、決まり」という意味ですが、聖書の世界での「掟」は、神が人間に与える指示、イエスが弟子たちに与える指示

という意味があります。人間の掟を破っても、人間として生きることはできますが、神の掟、イエスの掟を破れば、人間は神との絆、イエスとの関わりを失ってしまい、霊的に死んでしまうのです。
すると、イエスが弟子たちに「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」と仰ったのは、たいへん重いことなのだと分かります。互いに愛し合う生き方をしなければ、わたしたちは神との絆、イエスとの絆を失ってしまうのです。
人を、愛する相手として見ること。わたしは、この見方が他のどんな見方よりも人を価値あるものとして見る生き方だと思います。わたしたちはこの世界の人々をいろんな見方で見ています。見知らぬ人、知り合い、友人、親戚、兄弟、家族などです。
その人をどう見るかで、わたしたちは接し方も変えています。見知らぬ人には、それほど親身になることはありませんが、兄弟や家族には、最後まで心配したり面倒を見たりするのです。その中で、愛する人への接し方がいちばん相手を大切にします。イエスは、互いが互いを、愛する人として接する。これを掟として残しました。
それは、人を、最も価値ある見方で見なさいという招きでもあるのです。いちばん相手を大切にする見方、いちばん相手を価値あるものと見る見方を、わたしたちに求めているのです。
実際、イエスさまがそのようにわたしたちを見てくださいました。ある時ファリサイ派の人が、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」と思った。」（ルカ 7・39）という場面がありました。イエスはこの時も、女性をいつものように価値ある人として見てくださいました。
また神殿でファリサイ派の人が祈った時も、「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。」（18・1）と言いましたが、イエスは徴税人を価値あるものとしてくださいました。イエスさまの模範に、わたしたちは謙虚に見倣う必要があります。
わたしたちの生活を振り返ってみましょう。誰か自分よりも劣る人を心の中に置いて、わたしはあの人よりはましだと、自分を慰めてはいないでしょうか。イエスは違う生き方を求めています。あなたが、自分より劣ると思っているその人を愛してあげなさい。自分よりも劣るのではなく、最も価値ある人として接しなさい。そう呼び掛けるのです。
イエスの呼び掛けは守れる人は守ってくださいという呼び掛けではありません。払える人は払ってくださいという指示ではありません。すべての人が、神との絆を失わないために、神の愛にとどまって生きるために、イエスが求めている指示なのです。

わたしは、毎日の生活の中で接しているいろんな人をどのように見ているのでしょうか。いちばん価値のある見方、その人を愛するという態度で、接してみましょう。今までは見落としていたその目の前の人の価値、良い所が発見できるでしょう。そして互いに愛し合う生き方を選ぶなら、わたしたちはイエスと心を通わせる友となれるのです。
今週は、世界広報の日でもあります。イエスが自ら模範を示し、掟として与えた互いに愛し合う生き方、相手を最も価値あるものとして接する生き方を、生活の中で証しして、世界にイエス・キリストを告げ知らせる者となれますように。このミサの中で力を願いましょう。

主の昇天（マルコ 16:15-20）

主の昇天(マルコ 16:15-20)

あなたの中の喜びを宣べ伝えなさい

浜串教会の３人の小さなマリアさまは、火曜日の夕方５時のミサに来て、休まず侍者をしてくれています。小学１年生が１人、小学２年生が２人の合計３人の小さなマリアさまたちです。夕方５時のミサと言っても、それより１時間前から教会で要理を受け、その後ロザリオの先唱をして、それからミサの侍者を務めてくれています。
今年は、本人たちが３人で喜んで侍者をしているので３人のままで侍者をさせていますが、この３人のうち、教育係の２年生２人は、熱心さのあまり侍者をしている間も１年生に声を出して指導をしておりまして、いろんな声が足もとで聞こえております。
たとえば、杯のカリスにぶどう酒と水を司祭が入れる時は、容器のとってに司祭が指を入れてぶどう酒と水を入れますから、とっての部分を司祭に向けて差し出す必要があります。１年生はまだそこまで理解していませんので何気なく容器を持っているわけですが、「そうじゃなくて、指を入れるところを神父さまに向けるの。違う違う。」お一厳しい指導だねぇと思いながらそのときは様子を見ております。
鈴を鳴らす場面になりますと、まぁ多少タイミングが遅れたりすることは十分予想できるわけで、そういうときに「ほら、今鈴を鳴らして」と指示が飛ぶのは分かるのですが、「もっとていねいに鳴らして」と、ていねいさまで細かい指示が飛んだのには驚きました。わたしは一度も「ていねいに鳴らしなさい」と言ったことはないのですから、どこでそんなことを覚えたのだろうと面白かったり驚いたりしております。
ただ問題は、司祭もミサをささげるのにはリズムとか調子があるわけで、足もとで教育係の指示が飛んでいる中で、気を散らさず、唱える言葉を間違わずにミサを進めていくのは実に至難の業です。たまには唱える言葉が思い出せなくなったり、途中まで唱えていて真っ白になってもう一度最初から唱え直したりして、司祭のほうも自分のリズムを守ろうと必死に闘っていたりするわけです。
わたしはここに至って、この小さなマリアさまたちは小さな子どもなりに福音宣教をしているのだなぁと思うようになりました。今週は主の昇天の祭日で、選ばれたマルコ福音書の朗読箇所には、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」(16・15)というイエスのご命令が響いています。ただし、イエスの言葉からは、福音として何を宣べ伝えなさいと言っておられるのかは見えてきません。
たとえばマルコ福音書が書かれたのと同じ時期、パウロは地中海沿岸で宣教活動をしていたのですが、パウロははっきりと「十字架のイエスを宣べ伝える」という使命を意識していました。たとえばコリントの信徒

への手紙Ｉ第１章 18 節には「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」とありますし、ガラテヤの信徒への手紙第６章 14 節には、「このわたしには、わたしたちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。」とあります。
パウロは、十字架のイエスを徹底して宣べ伝えようとしました。それと比較すると、マルコ福音書からは、福音として何を、伝えるべきなのか見えてこないのです。
でも大丈夫。浜串教会の小さなマリアさまたちは教えてくれています。祭壇のそばでお仕えする喜びを、新入生に教えようと身振り手振り、声を大にしています。主任司祭を通してイエスさまが教えてくださった、祭壇に使える喜びを生き生きと伝える。それが、小学２年生の小さなマリアさまたちにとっての福音宣教なのです。
今、１つの例を挙げました。イエスは誰か手伝ってくれる人を通して、イエスを信じる喜びを全世界に行って宣べ伝えることを願っているのです。何を伝えるかは、それほど問題ではありません。自分が、イエスを信じたことで体験した喜び、イエスに結び合わされて味わった支えや励まし、安心感などを伝えて欲しいのです。
その際、上手下手も関係ないのだと思います。わたしたちは、イエスを信じたことでイエスの弟子となりました。イエスは天に昇って、弟子たちを使って働きます。弟子たちが自力で結果を出すのではありません。あくまでも、弟子たちを使ってイエスが働くのです。ですから、わたしたちはイエスに使ってもらうだけでよいのです。上手でなくても、上等でなくても構わないのです。
「ていねいに鈴は鳴らして」と、わたしが教えてもいないことまで付け加えて侍者の喜びを伝えた小さなマリアさまたちを見ていると、この子たちを通してイエスが働いていることは十分伺えます。教育係の２人の中でイエスが働いて、成長してそのように言ったのではないでしょうか。
「信じる者には次のようなしるしが伴う。彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語る。手で蛇をつかみ、また、毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば治る。」（16・17-18）これらのしるしは弟子たちの中でイエスが働いているからこそ可能になります。
わたしたちは、しるしができなければ福音を宣べ伝えることはできないのではないか、しるしがなければ福音を宣べ伝える資格がないのではないかと恐れる必要はありません。わたしたちに、イエスを信じたことで喜びを体験したなら、十分です。
体験したことを、宣べ伝えましょう。必要があれば、あなたの中で働くイエスが、しるしを伴わせてくださいます。あなたの中に伝えることのできる喜びがあるうちに、出かけて行くことにいたしましょう。

聖霊降臨の主日（ヨハネ 15:26-27;16:12-15）

聖霊降臨の主日（ヨハネ 15:26-27;16:12-15）

聖霊はイエスをあますところなく教える

聖霊降臨の主日を迎えました。イエスによって約束された弁護者、真理の霊が、聖霊です。特に今年は、真理の霊と呼ばれていることに触れて、聖霊について考えたいと思います。
弟子たちはイエスに選び出されてから、３年間イエスと生活、行動を共にしました。その間、聖霊を送る約束はいただいていましたが、実際に聖霊が注がれるのはイエスが御父のもとに昇ってからでした。
今になって思うのですが、イエスはなぜ、ご自分が弟子たちと共におられた時に、聖霊を弟子たちに送らなかったのでしょうか。別の箇所では、「わたしが去って行かなければ、弁護者はあなたがたのところに来ないからである。わたしが行けば、弁護者をあなたがたのところに送る。」（ヨハネ 16・7）とあります。イエスのこのような言葉を重ねて考えると、やはりイエスがおられるあいだは、聖霊を送る時ではないということになります。
そこでわたしが考えたのは、聖霊はイエスと別の何かを教えるものではない、聖霊は、御父とイエスのことを教えてくださる霊なのだ、ということです。聖霊がイエスのことを余すところなく教えてくださるのであれば、目の前にイエスがおられるあいだは、「イエスとはこのようなかたである」という弁護者は必要ないわけです。目の前にイエスがおられるからです。
ここで聖霊のもう１つの呼び名、「真理の霊」について考える必要が出て来ます。「その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」（16・13）とあります。では「真理とは何か」が問われるのです。それはつまり、イエスとはどのようなおかたであるか、ということです。
今回の説教で参考にした材料から、４つの特徴を取り上げます。１つは、イエスは神の愛を人々にすべて示しました。弱い立場の人に対して、病気の人に対して、悲しみの中にある人に対して、神が人間に注ぐ深い愛のすべてを示してくださいました。
２つめに、イエスは交わりをもたらすかたでした。神が、人となってくださったことは、神が人間に交わってくださった何よりのしるしでした。イエスは罪人と呼ばれる人とも交わり、すべての人と交わりました。
３つめに、イエスは永遠のいのちを与える方です。「子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができるのです」（17・2）とあります。イエスを信じる者すべてに、永遠の命を与えてくださいます。

４つめとして、イエスは祈るかたでした。大切な決定をなさるために、朝早く、一人静かな場所に行って祈りました。受難の場面を目前にして、苦しみもだえながら祈りました。十字架の上でも祈りました。こうして御父に祈ることで、御父の望みに忠実であり続けました。
聖霊は、イエスのこの４つの特徴を、弟子たちに忠実に教えてくださる霊なのです。真理、そのすべてをわたしがとらえたわけではありませんが、イエスの真理の４つの特徴を、聖霊は余すところなく弟子たちに教えてくださるのです。
４つ、もう一度確認しますと、神の愛を示し、交わりをもたらし、命を得させ、御父に祈るということです。イエスが生きられたように、わたしたちの信仰生活を導くために、今聖霊がわたしたちに注がれます。わたしたちはイエスの４つの特徴を、聖霊によっていつも教えてもらうことができます。あたかもイエスがそこにいるかのように、教えてもらえるのです。
特に堅信の秘跡を準備している皆さんに、この聖霊の恵みを願って欲しいと思います。堅信を受けようとしている皆さんが、イエスが生きたように、この時代の中で生きていく。そのための助けが、与えられるからです。
特に、証しをする力を願いたいと思います。「あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。」（15・27）わたしたちは何をどうすればよいのか、ほとんど分かっていません。どうすれば、イエスを知らない人々が、「あなたの信じている神について、わたしにも教えてください」と近づいてきてくれるのか、ほとんど分かっていません。
カトリック教会が 2000 年の長きにわたり、受け継がれている一方で、教会は完全に一つではなく、分かれています。どうすれば一致できるのか、ほとんど分かっていません。
今信仰の大切さを理解している人が何とか教会を維持していますが、次の世代が同じように維持してくれるのか、ほとんど分かりません。さまざま、難しい状況が存在します。そんな難しい中で、もっとイエスそのものを聖霊に悟らせてもらい、証しによる実りが与えられるよう、このミサの中で恵みを願いましょう。

三位一体の主日（マタイ 28:16-20）

三位一体の主日(マタイ 28:16-20)

与え尽くす生き方で三位の神を身近に感じる

わたしたちは、何かを知るとき、2通りの形があると思います。1つは、知ったものを、自分のものにする場合です。わたしは福岡の大神学院に行って、はじめて硬式テニスを知り、たくさんの時間を練習に費やして、硬式テニスができるようになりました。プロ級の腕前ではありませんが、左利きであることもあって、まぁそこそこの腕前になりました。
もう1つの知り方は、知ることができたけれども、自分のものにしていない場合です。わたしは教会でオルガンが弾けたらどんなにいいだろうと思って、何度も練習し始めました。けれどもそのたびに挫折して、習得することができませんでした。10回挑戦して、10回挫折しました。途中では手取り足取り教えてくれた人もいたし、練習のための本を80冊以上買いましたが、それも今は本棚の中で眠っています。何かが弾けるようになったこともあったのですが、一曲弾けるようになったからといっても、それは完全に丸暗記して弾けるようになったのであって、鍵盤を覚えたわけではありませんでした。
何かを知って、自分のものになった場合は、かなりの確率でずっと知識として保ち続けますが、自分のものにならないものは、どれだけ知っていても、常にその対象を知り続けようと努力しなければ、いつかは知っているつもりになってしまいます。
結婚している夫婦を例に挙げましょう。結婚する人は、お互いを知り合い、他のだれよりも相手をよく知る間柄になります。けれども、ある時点で相手を十分知っているからもう知らなくてもよいと考えるようになると、次第に知らないことが出て来て、知っているつもりになってしまい、お互いに溝ができることになります。
今週お祝いしている三位一体の神さまについても、わたしたちはまったく知ることができないわけではなく、ある程度知ることができます。けれども、それはあくまでも自分のものにはならない知識として、知ることができるということです。どこまで知っても、自分の持ち物にはならないのです。
まず、三位一体の神さまについて、わたしたちはどれくらい知ることができるのでしょうか。本質として唯一である神の内に、父と子と聖霊がおられること。これはわたしたち皆が、学ぶことのできる知識です。そして、救いの歴史の中で、神である御子が父なる神によって遣わされて人となり、神の愛を示し、神と人類とを一致させてくださったこと。御父と御子が神である聖霊を遣わし、一人ひとりの人間を神の命に入れてくださること。ここまではわたしたちも知ることができます。参考として、「カトリック教会のカテキズム要約」を紹介しておきます。

ところが、三位一体の神についての知識は、残念ながらと言いましょうか、自分のものにはならない知識です。いったんその神秘の内容を知ったとしても、それ以後も常に学び続け、知り続けようとしなければ、いつかは知っているつもりが知らない人になってしまう危険があります。
そこで三位一体の神についてわたしたちに必要なことは、常に知っている内容を新しくしていくということです。そのためには、三位一体の神の交わりにいつも招かれて、神との親しさを保ち続ける必要があります。
神との親しさを保ち続けるためには、どのようにしたらよいのでしょうか。それには、父と子と聖霊がどのように完全な一体性を保っておられるかを知ることが近道です。そのいちばんの特徴は父と子と聖霊は、お互いを完全に与え合うことで一つになっておられるということです。御父は、御子にすべてを与え、御子はそのすべてを御父にお返しになります。その完全に与え合う愛が、聖霊です。
もしわたしたちが、自分を与えるべき相手に、できる限り、完全に近い形で与えるように努力するなら、わたしたちは日々、三位一体の神に似た生活を実行していることになります。自分を完全に与えられなくても、これ以上ないほど与えようと努力するなら、わたしたちは父と子と聖霊に倣う生き方をしているのです。
ところで、自分を与え尽くす生き方を、毎日続けるとしても、与え尽くす力を自分の持ち物にすることはできません。今日与え尽くすことを放棄すれば、その時点で与え尽くさない人になってしまうからです。この、与え尽くす姿は、毎日、毎瞬間続けることで維持できるものです。続けることだけが、与え尽くすという姿を維持するただ一つの道です。
そして、与え尽くす姿を毎日、毎瞬間続けて、維持していく時、わたしたちは三位一体の神が与え尽くす神であることをよく学び、学んだことを常に新しく保つことができます。こうしてわたしたちは、三位一体の姿を、いつも新しい状態で身近に感じることができるのです。
父と子と聖霊の三位の神が唯一であることを、わたしたちがいつも親しく感じることができるように、自分を与えるべき相手に、いつも全力で与え合うことにしましょう。夫と妻の間で、親と子どもの間で、兄弟姉妹の間で。与え尽くす生き方を全うして、三位一体の神の一体性にいつも近くいることができるよう、ミサの中で恵みを願いましょう。

キリストの聖体(マルコ 14:12-16,22-26)

キリストの聖体(マルコ 14:12-16,22-26)

ひかれて小麦となり、イエスのものとなる

先輩の古川武信神父様がお亡くなりになりました。72歳でした。晩年は、14年間透析を続ける生活でした。最後は脳梗塞を併発して、8ヶ月十字架にはりつけにされた司祭生活でした。
透析を受け始めると、ふつうは14年も長生きしないそうです。そんな中で、先輩が示そうとしていたのは、「透析患者の司祭であっても、司祭の務めを全うできる」そういう証しでした。そして実際、司祭・修道者の召し出しを多く輩出し、療養生活に入るまでは小教区の主任司祭として働き、多くの人に愛された司祭でした。
腎臓を患うまでは、思う存分ご自分の務めを果たしておられたと思いますが、腎臓病になってからはそうもいかなかったでしょう。けれども、イエスのご計画は別のところにあったかも知れません。
金曜日に浦上教会で行われた葬儀ミサの説教の中で、古川神父さまの同級生の神父さまが、「彼はイエスに、『人類の救いのためにわたしと一緒に十字架を担ってくれ』とお願いされたのだ。彼だったから、引き受けることができたのだ」と話しておられました。そうだろうと思います。
透析を続ける生活という大きな十字架で、完全に先輩の計画は打ち砕かれただろうと思います。長い巡礼旅行は諦めなければなりませんし、コップ一杯の水をがぶ飲みすることも死に直結するのでできません。
自分の思い描いた人生が完全に打ち砕かれると、大抵の人は失望してしまいます。けれども神父さまは、そこからさらにイエスにより忠実な弟子になったのだと思います。自分の思い描いた人生を生きようとすれば、もしかしたらイエスに左と言われても、いやわたしは右に行くと言うことができるかもしれません。
けれども、完全に打ち砕かれ、それを受け入れた人にとって、イエスから左と言われた時に、迷わず左について行くのです。もしかしたらついて行くしか残されていないのかもしれませんが、それをためらわずに従えるのは、イエスの弟子として、より完成された姿ではないでしょうか。
今週、キリストの聖体の祭日を迎えています。イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱え、「取りなさい。これはわたしの体である。」（マルコ 14・22）と、また杯を取り、感謝の祈りを唱えて、「これは、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」（14・24）と言われました。イエスはご自分のすべてを食べ物として与えてくださいました。
食べ物はどのような性質があるのでしょうか。完全に、自らを与え尽くすという性質があります。パンとぶどう酒の形のもと、何も残さずに与え尽くすというのがその根本的な部分です。

先に亡くなった先輩司祭のことを話しましたが、司祭職に自分のすべてを与え尽くす姿は、イエスが聖体の秘跡にとどまってご自分を完全に与え尽くされたのと同じ姿だと思います。九割九分九厘与え尽くすというのではありません。何も残さず、たとえ一厘でも、一毛でも、自分のために取っておかない姿です。
それはかつての殉教者の姿にも似ています。アンチオキアの司教、聖イグナチオは、次のような言葉を残して殉教したとされています。「わたしは神の穀物であり、キリストの清いパンとして認められるために、獣の牙で粉にひかれるのです。むしろ、獣をあおって、その獣がわたしの墓になるようにしてください。獣が、わたしの体の一片でも残しませんように。」（「毎日の読書」第 8 巻 135 頁、カトリック中央協議会発行）
イエスがわたしたちの食べ物となられたというのは、ご自分のために体の一片も残さず与え尽くすためでした。その与え尽くす愛が、ご聖体の中にとどまっておられます。わたしたちはこのご聖体を、どのくらいの感謝をもって受け取っているでしょうか。感謝しても感謝し尽くせないのではないでしょうか。
与え尽くす愛であるご聖体をいただいたわたしたちは、イエスによって変えてもらう必要があります。それぞれ、任せられている務めがあります。中学生高校生は学ぶ務めがあります。大人には大人としての務めがあります。その務めに、7 割くらい力を注いで流れに乗っていくこともできるかもしれません。実際にそうしてきた人もいるかも知れません
ですが、わたしたちがアーメンと答えていただくものは、清い小麦からできた聖なるパンです。7 割ご自身を与えたイエスがとどまっているのではないのです。そうであるなら、今の生活でもし与えることを惜しんでいるなら、イエスに変えてもらいましょう。
与え尽くす愛を、ご聖体としていただくわたしたちは、与え尽くす愛に生きる人に変えてもらうように招かれています。イエスは、打ち砕かれてイエスのものとなった一人の司祭を高めてくださいました。小麦のようにひかれてイエスのものとなった殉教者を高めてくださいました。
わたしたちも、イエスの手の中の道具として、より使い勝手の良いものとなるために、できることを考えましょう。九割九分九厘協力するけれども、あと一厘自分のものに残しておこうとする気持ちは、そんなに重要なものなのか、もう一度考えてみましょう。
与え尽くす愛のしるしを、今日ミサの中でいただき、大胆にイエスの招きに答える力を願うことにいたしましょう。

年間第 11 主日(マルコ 4:26-34)

蒔かれた種には雨と太陽が必要

祈祷書の祈り、皆さんは祈祷書を開いて唱えているでしょうか。祈祷書に載っている祈りの中には、見ないで唱えている祈りもあるのではないでしょうか。わたしも、見ないで唱える祈りがあります。
たとえば、マリアさまに対する祈り「元后あわれみ深き御母」「聖母のご保護を求むる祈り」「聖マリアに身を献ぐる祈り」とか、聖体に対する祈りでは「聖体に対する聖トマの祈り」「聖体を訪い奉る時の祈り」などです。わたしは幼児洗礼なので、小学生の頃に覚えさせられ、唱えていた祈りは、やはり記憶しています。
しかしどのようにして覚えたのかと言われたら、「分からない」としか答えようがありません。きょうの福音朗読の言葉を借りれば、「夜昼、寝起きしているうちに、芽を出して成長した」そういうことなのだと思います。特別覚えるための工夫をしませんでしたが、日々の祈りの中で、自然に覚えたのです。
現在はどうでしょう。子どもたちに、聖母マリアへのお祈りで、覚えている祈りがありますかと聞いたら、「ない」と答えるかもしれません。覚えていないからどうこうということではありませんが、子どもの時代に種蒔きされた信仰が、芽を出し、茎、穂、そして穂には豊かな実ができる、そんな段階を迎えられるだろうかと心配します。
種蒔きは、どの子どもたちにも行われているのだと思います。保育所での幼い頃の体験がそうですし、小学生時代にロザリオの祈りを唱えて、それに合わせて聖母マリアに対する祈りを唱えてきました。聖マリアの連祷も、当時はすらすら唱えていたはずです。そうした種蒔きが、実を結ぶまでに至るか、蒔かれた種のままでいるかは、その後の過ごし方に何か違いがあるのではないでしょうか。
２つ、考えてみました。１つは、雨です。梅雨の時期に入り、金曜土曜日などはよく降るなぁと思うくらいに雨が降りました。わたしの実家は牛を飼っているため、雨が降ると牛のえさとなる牧草の刈り入れをすることができません。雨は困るなぁと思ったりしたものですが、きっと雨を待ち望んでいる人もいることでしょう。
この梅雨の季節に、わたしは地中の生き物はどうなっているのだろうかと思うことがあります。とくにセミです。この長雨を、セミの幼虫はどう思って過ごしているのでしょうか。セミはご存じの通り何年も地中にいて、１週間とか、２週間しか地上にいません。そのタイミングを、この雨の中、じっと待ち続けているのでしょうか。雨がしみこむ地中で、もう少ししたら地上だと、考えているのでしょうか。
この雨は、畑に蒔いた種に芽を出すチャンスを与えてくれると思います。

ほんの少しの雨ではなくて、たっぷりと降った雨が、種に大きな変化を与えます。子どもに例えると、信仰の種蒔きをされて、たくさんの雨が降り注がれた時に、大きな変化を成し遂げるのです。
信仰の蒔かれた種に降り注ぐ雨とは何でしょうか。教会に集まって、また家庭の中で、繰り返し繰り返し唱えることだと思います。祈りの反復が子どもたちの中に雨となって降り注ぎ、しみこみ、やがて種の中に隠されている神秘を芽生えさせるのです。繰り返しによって十分に祈りに親しんだ子どもたちは、いつかその祈りの必要性を思い出し、自分から祈り始めるようになるのではないでしょうか。
種が実を結ぶもう１つの要素は、芽を出したあとに注がれる陽の光だと思います。十分な雨のあと、十分な陽の光が注がれて、種から芽を出した植物は立派に成長していきます。子どもたちに蒔かれた信仰の種が芽吹いたなら、十分に陽の光を当てなければなりません。
信仰の芽吹きに注がれる陽の光とは何でしょうか。わたしは、唱えている祈りの解き明かしだと思います。祈りの一つひとつの言葉が、意味のあるものとなるように照らしを与えてあげることで、子どもたちはあとで祈りをかみしめ、ただ唱えるだけでなく、願いを込めて唱えることができるようになるのです。
振り返ると、だれかがわたしに降り注ぐ雨をくださり、言葉の意味を十分に理解するための陽の光を注いでくださったので、祈りを覚え、祈りを理解して唱えることができるようになったのだと思います。けれども、それがだれなのか、はっきりとは分かりません。
両親なのか、祖父母なのか、または本家のおじさんおばさんだったのか。それらのすべてかもしれませんが、やはり突き詰めると、わたしに雨を降り注ぎ、陽の光を当ててくださったのは、父なる神なのだと思います。わたしのそばにいる人々を動かして、わたしに蒔かれた種が芽を出し、立派に実るように導いたのは、父なる神なのです。
そこで今週の学びを得ることにしましょう。父なる神の計らいで、だれかがわたしに手を貸してくださり、蒔かれた種が芽を出し、実を結んだように、わたしたちも種蒔かれた人に雨を降らせ、陽の光を当てるお手伝いをしましょう。
芽を出させ、実を実らせるのは神さまがきっと成し遂げてくださいます。わたしたちは神の働きを信じて、人々に蒔かれた信仰の種が大きな変化を始めるお手伝いをしましょう。蒔かれた種の多くが、種のまま留まるなら、神の国の成長はいつまでも望めません。神の国が夜昼寝起きするうちに成長することを、社会に対して証しすることができるよう、ミサの中でその知恵を願いましょう。

洗礼者聖ヨハネの誕生（ルカ 1:57-66,80）

洗礼者聖ヨハネの誕生(ルカ 1:57-66,80)

口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた

黙想会に参加してきました。一度だけ浜串に連れてきたことのあるパウロ会の司祭で同級生の澤田神父さまが黙想の説教師を務めてくれました。マタイ福音書からおもに話しをしてくれて、マタイ福音記者が見ているように見るそのヒントをたくさんいただきました。

今週金曜日、わたしは生活習慣病検診に行ってきます。ちょうど1年前、同じ検診を受けた時はお腹周りとかコレステロール値が標準を超えていたからだと思いますが長崎の保健士から半年間保健指導を受けて厳しい食事コントロールと規則的な運動を命じられました。

あの頃はマラソン大会に向かう時期でもありましたので、80キロの体重が73キロまで落ちて、ズボンも両手が入るくらいサイズが小さくなっていました。またちょっと戻って、体重は76キロくらいなので、今年の検診もひやひやしながら受けることになります。できれば保健士のかたとは会わないで済ませたいものです。

今年は6月24日が日曜日と重なりました。洗礼者ヨハネの誕生を、教会は大切にしているので、日曜日ですが、この祝日を優先させました。洗礼者ヨハネは、イエスに先立って人々の心を神に向かわせ、救い主への準備をさせます。喜びの出来事の中で、わたしはザカリアに注目して今週の学びを得たいと思いました。

朗読された箇所には、周囲の人が驚く中で、名前をヨハネと付ける強い意思を表し、ザカリアに大きな変化が現れます。それまで話すことができなくなっていた彼が、「すると、たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた」（1・64）のです。

ですがこの様子は、少し慎重に観察しなければなりません。「口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた」とあるのですが、ルカ福音記者が言おうとしていることをできるだけ汲み取って考えることが大事です。日本語訳聖書では、「口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた」とあるわけですが、もとの言葉に近いように訳すなら、ザカリアは「口が開かれ、舌が自由にされ、神を賛美し始めた」と書き表すのがより近い表現なのです。

もとの言葉により近い日本語に訳すと何が見えてくるのでしょうか。比べてみると分かります。「ザカリアの口が開いた」様子と、「ザカリアの口が開かれた」様子では、何かが違うはずです。「口が開いた」とは、例えばある時間になったので自然に口が開いたとか、言いたいことがまとまったのでついに話し始めることにしたとか、自分から口を開いて語り始める様子を表しています。

ところが、「口が開かれた」となると事情は違ってきます。それは、

自分で口を閉じていたのではなく、だれかに話しができなくさせられていて、それが話せるようにさせてもらったという意味になります。つまり、ザカリアは神の使いのお告げを信じることができなかったので神から話しができないようにさせられていたのですが、今や神にゆるされて話しができるようになった、口が開かれたということです。

同じように、「舌がほどける」という様子と「舌が自由にされる」という様子も、比べて違いを感じる必要があります。「舌がほどける」とは、何か肉体的な障害のために舌が回らなかったのが今やっと障害がなくなったという感じですが、「舌が自由にされる」とは、だれかから舌が使えないように不自由にされていたのがゆるしが与えられて自由にされたという感じです。

つまり、本来の言葉により近いように日本語に訳すと、ルカが伝えようとしていた本来の様子が手に取るように分かってくるのです。ルカは本来、神がザカリアの口を閉ざし、舌を不自由にしていたのだけれども、今ゆるしを与えて彼の口を開き、舌を自由にし、話すことができるようにしてくださったと伝えているのです。わたしたちが現在読んでいる日本語訳では、よくよく注意しなければ、そのことが読み取れないのです。

ところで、神に口が開かれ、神に舌が自由にされたザカリアは、神を賛美し始めたとあるのですが、人間はだれでも、神にいったん口を閉ざされ、神に口を開いてもらうと、神を賛美し始めるのでしょうか。

わたしはそうは思いません。人によっては、神に不平不満を述べることもあるだろうと思います。自分の口を神が閉ざすのは道理に適っていない。口が開かれたときに神は正しくないと、ザカリアが不満を漏らすことも十分あり得たはずです。

なぜザカリアは、神を賛美し始めたのでしょうか。ザカリアは、すべての出来事が神の手の中にあることをはっきり知ったから、神を賛美し始めたのだと思います。神の前に非の打ち所のない生活をしていたけれども、長い間自分たちに子どもが与えられなかったこと。子どもが授かると知らされて信じることができなかったときに話せなくさせられたこと。これらはわたしに責任はないではないか。そんなことを少し思っていたのかもしれません。

けれどもザカリアは、口を開かれたときにすべてを理解しました。出来事は神の手の中にあり、一つひとつの出来事を神に感謝し、神を賛美すべきであると。出来事に不満を持つ権利はどこにもないことを。そこで、ザカリアは神を賛美し始めたのです。

ザカリアに起こったことはすべての人へのしるしです。わたしたちは何か出来事が起こったとき、ある場合は不満を持つことになります。自分に都合の悪いこと、避けたいことが起こると、どうしても受け入れられないからです。けれども出来事は神によって起こされていると考えたらどうでしょうか。神が一つひとつの出来事を起こしておられる。そ

こには神の思いがあり、神の思いに気付いたとき、わたしたちはあらゆる出来事を神に感謝できるようになるのではないでしょうか。

洗礼者ヨハネの誕生は、すべてが神の手の中で起こっていることを考えさせる出来事です。もっとわたしたちが、出来事が神の手の中で起こっていると考えられるようになるよう願いましょう。そうすると、文句の一つも言いたかったことにも、感謝できるようになると思います。すべてに感謝、すべてを賛美できる人になれるよう、ミサの中で恵みを願いましょう。

年間第 13 主日（マルコ 5:21-43）

年間第 13 主日(マルコ 5:21-43)

希望は神の愛によって信仰のうちに芽生える

金曜日に生活習慣病検診を受けてきました。ちょっと苦しい内視鏡検査もありました。おおむね、結果は良好だったのですが、悪玉コレステロールが一昨年から去年にかけて数値が減っていたのに、今年になって極端に増えていました。悪人から善人になりかけていたのですが、また悪人になったかもしれません。
さて今日の福音朗読は、ヤイロの娘とイエスの服に触れる女のいやしの物語ですが、はっきりしている点があります。それは、人間的には手の施しようがなくなってしまった場面で、イエスは力を発揮してくださったということです。
会堂長のヤイロの娘は、死にそうな状態にあってイエスに願い求め、さらに向かっている途中で亡くなってしまい、「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」（5・35）と周囲の人から言われてしまいました。
イエスの服に触れる女性も、「多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。」（5・26）とありますから、人間的にはまったく希望がなかったのです。
それでもイエスは、人間的には希望の持てないところに、希望をもたらしてくださいます。ところで、この希望にあずかった人々には共通するものがありました。それはイエスへの信仰です。
イエスの服に触れる女は、「この方の服にでも触れればいやしていただける」（5・28）と思ったとあります。ヤイロは、苦しんでいる娘に代わって「恐れることはない。ただ信じなさい」（5・36）というイエスのことばを信じました。
信仰のあるところに、希望が生まれます。会堂長の家に着くと、人々は大声で泣きわめいて騒いでいました。彼らは信仰を持って出来事を見ることができませんので、希望にあずかることもありません。むしろイエスをあざ笑います。いやしの奇跡が起こっても、人々は驚きのあまり我を忘れた状態で、奇跡がイエスへの信仰に結びつきませんでした。
ここからが肝心です。イエスは、信仰を保った人々に何をしてくださったのでしょうか。イエスの服に触れたのは女性のほうでイエスではありません。会堂長は娘の上に手を置いてくださいと願いましたがイエスは娘の手を取っただけです。
イエスのおこなった一つひとつのしぐさに気を取られずに考えてください。何をしてくださったのでしょうか。イエスは、愛を注い

でくださったのです。神の愛こそが、奇跡を起こし、いやしの出来事を起こしてくださるのです。イエスは人々に愛を注ぎます。イエスを信じる人々の上にイエスの愛は実を結び、希望のないところにも希望が生まれます。イエスを信じない人にもイエスの愛は注がれますが、信じない人には実を結ばず、希望に導かれないのです。
ここに、わたしたちの学びがあると思います。信仰と希望と、愛。この３つは、関わり合って働くのです。イエスはすべての人に愛を注がれます。わたしたちからは信仰が必要です。信仰を持ってイエスの愛を受けると、希望が芽生え、生きることができるのです。
わたしたちの生活は、病気や、この世からの別れという悲しみを避けて通れません。それでも、希望のうちに生きていくためには、イエスを信じる信仰が必要なのです。イエスだけが、神の愛を注いでくださって、避けられない出来事の中でも希望を持たせてくださるかただからです。
病気を抱えて生きる人にも、死の危険と隣り合わせの人にも、イエスによって神の愛は注がれています。神の愛が実を結び、希望を持って生きていけるかどうかは、わたしたちの信仰にかかっています。
「イエスはどんなときにも信じるに値するかた。」ヤイロの娘とイエスの服に触れる女の出来事から、信仰の必要性を確認し、イエスへの信仰に留まる決意を新たにしましょう。神の愛がわたしたちの上に実を結び、生活の中に決して失われない希望が芽生えるよう、ミサの中で願っていきましょう。

年間第 14 主日（マルコ 6:1-6）

年間第 14 主日(マルコ 6:1-6)

預言者はどこにいても預言者

聖トマスの霊名のお祝い日以降、またちょっと走り始めています。教会前のバス停から、岬のマリアさまに行く手前の広場まで、６往復して８キロです。ミニバレーの日は半分の４キロ、土日はいろいろあって休もうかなぁと思っています。
走り始めたのはいいのですが、わたしとすれ違って声をかけても、わたしだと分からないおばさんがいて困ります。わたしだと分かるおばさんもいますが、分からない人はこんにちはと声をかけたあとに「どこの兄ちゃんかと思ったよ」と言っています。お願いですから、わたしの姿が完全に見えなくなってから「どこの兄ちゃんかと思ったよ」は言うようにしてください。全部聞こえているんですから。
もちろん、ミサのときに会うわたしの姿形からすれば、半袖半ズボンに、ランニング用の帽子をかぶって「こんにちは」と言われても、「だれかしら」と思うのは無理もありません。ただ、「この兄ちゃんはだれ」と思ったなら、目の前に見えている姿の向こうにある真の姿を見ようとしてください。すると、見えていなかったことが見えるようになります。たとえば、この昼日中に浜串で走ることができる人は、勤め人ではないはずです。また、走っている最中に名前で人を呼ばず、単にこんにちはと声をかけながら走っているのでしたら、浜串で生まれ育った人ではないでしょう。それらを考え合わせると、もしかしたら神父さんではないだろうか。そう思い当たるはずです。
これから何度かわたしの走る姿を見ることになるお嬢さまがた、真っ赤なシャツを着ていても、鮮やかな青いシャツを着ていても、あるいは上下真っ白を着ていても、「どこの兄ちゃんかしら」と言わずに、見える姿の向こうにある真実を考えるようにしてください。いつまでも「どこの兄ちゃんかしら」で済ませるおばさんは、すぐ頭の衰えが来ますよ。
さて福音書は、イエスが会堂で教え、その姿を見た人々がイエスにつまずいてしまう話です。イエスが授かっている知恵と、その手で行われる奇跡に驚きつつも、周囲の人々はイエスを「どこの兄ちゃんかしら」と思ったわけです。さらに悪いことに、「大工の兄ちゃん、マリアの息子、兄弟親戚もすべて知っているあの兄ちゃんじゃないか」とイエスを決めてかかったのです。
思い込みを持たずにその人を十分理解するのは非常に難しいことです。「あー、あそこのほら、ヨセフの家の大工の兄ちゃん」そう思い込んでしまうと、会堂や神殿の境内で聖書を読み、人々に教えるイエスの姿はまるで別人に見えたことでしょう。別人に見えたイエスの向こうにある真の姿を見ようとしなければ、見えるはずのものが見えないのです。

イエスを理解しようとしない人々に、イエスは次のように言います。「預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである」（6・4）。ここで言う預言者とは、民の心を神に立ち帰らせるために、神のことばを預かって語る人です。
預言者はいつも、民の心を本来のあるべき姿に戻すために働きました。しかし、民は神の望みよりも自分たちの望みを優先し、神に逆らい続けました。神に立ち帰らせようとする預言者を目障りだと感じ、ことごとく退けてきたのです。
イエスも、父から授かった知恵を語り、奇跡をその手で行いましたが、それはかつての預言者のように、人々の心を父である神に向き直らせるためでした。けれども人々は、自分たちが良い扱いを受けることをイエスに望み、イエスの預言者としての働きを認めなかったのです。自分たちに都合の良いことを話せば歓迎するけれども、神に立ち帰るために厳しい道を説くなら、イエスを拒むのです。
イエスは、人々のこのような態度に驚きました。「人々の不信仰に驚かれた」（6・6）とあります。預言者として働いているイエスを見ても、イエスが自分たちの心を神に立ち帰らせようとしていることに気付きませんでした。会堂で話すイエスの姿を見ても、人々はイエスへの信仰に導かれませんでした。
イエスは、どこにいてもわたしたちを父なる神に向かわせるかたです。イエスがどんな姿をしていても、たとえどんなに弱々しくても、わたしたちを父なる神に向かわせる預言者です。そのことに気がつかず、徴税人や罪人と一緒にいて食事までしている、断食を弟子たちにあまり求めない、安息日に働いているなど、目先のことに人々はつまずいたのです。
司祭がこうしてミサをしている。司祭はミサに参加したわたしたちを、父である神に向かわせようとしている。では司祭はどういう人なのでしょうか。考えてくださると幸いです。わたしも、できるだけ、どこにいても、何をしていても、人を神に結び合わせる働きを忘れないようにしたいと思います。
浜串地区でランニングをしていても、「どこの兄ちゃんかしら」と思われるのではなく、「神父さまはいつまでも良い働きができるように、体づくりをしているのね」と思ってもらえるようになりたいと思います。
どこにいても、何をしていても、イエスはただ一人のイエスであったように、祭壇に立つ中田神父も、ジョギングをしている中田神父も、ただ一人の中田神父と思ってもらえるように、日々精進したいと思います。

年間第 15 主日（マルコ 6:7-13）

年間第 15 主日(マルコ 6:7-13)

何も持たないあなたをイエスが支える

7 月 1 日にわたしの霊名聖トマスのお祝いをしていただきましたが、巡回教会の福見教会からもらったランニングウェアの背中に面白い文字がプリントしてありました。「この夏走った距離は裏切らない」ですって。面白いでしょ。7 月 3 日以降、昨日までで 58 キロ走っていますが、結果に結びつけばいいなぁと思っています。
みなさんの中には、わたしが走っている姿を見て、「ぜんぜん走ってないじゃないか」と疑う人もいるかも知れません。確かに、トボトボ足を出しているといった感じですが、先は長いですので、温かく見守ってください。
これは来年１月末の司祭マラソン大会に向けていろいろ調整しているのものですから、いきなり夏から全力で走るわけにはいかないのです。今の速さは、最後まで走っても息が上がらないことを目安にしています。まだ１キロ８分くらいです。
もちろん７分で走ることは可能ですが、それだと最後のほうは息が上がってしまい、口ではぁはぁ息をしてしまうのです。そうではなく、最後まで鼻で呼吸できる速さ、それを気をつけています。まぁしだいに力が付いてきたら、ペースも上げるでしょうし、後浜串までの坂道も練習に入れていきたいと思っています。
もしみなさんがやる気があれば、わたしが賞品を準備するので、浜串地区内で健康マラソン大会をしても構いません。一般 10 キロの部、小学生 3 キロの部、歩け歩けの部、それから、20 分なら 20 分とタイムを申告して、申告したタイムにいちばん近い人が商品をもらう組とか、いろんな参加できる形を用意したら、楽しめるのではないでしょうか。
今週の福音朗読はイエスが十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わす様子です。弟子たちが遣わされていく時の特徴は、とにかく「何も持たない」ということでした。
何も持たずに遣わされていく弟子たちを想像してみました。弟子たちは、きっと不安だっただろうなぁと思います。「パンを持たない」というのは、今日食べることができるか分からないまま遣わされたということです。日本の諺では「腹が減っては戦はできない」と言われ、力を出そうという前に食べ物に不足していることは良い状態とは思えません。
また、「袋も持たないように」とあるのは、お布施をしてもらうための袋を準備するなということです。日本のお坊さんが、修行のために町の中で袋をぶら下げて祈っているのを見たことがあります。なかには祈っているお坊さんの袋に、お金を入れて立ち去る人もいました。そうしたお布施は、修行しているお坊さんをきっと元気にしてくれるでしょう。
ところが、イエスはご自分の弟子たちに袋を持たせませんでした。
「帯の中に金も持たず」とあるのは、もしものためのお金さえも、持ち回らないようにという指示です。ここまで「何も持たないように」と命

じられると、「いったいこれで、何ができるというのですか」と言いたくなるかも知れません。
イエスさまは、当時の弟子たちには何も持たないようにと命じて二人ずつ組にして遣わしましたが、同じことを今の時代にも要求するのだろうかと考えてみました。わたしにも、同じことを要求しているのでしょうか。
わたしは、イエスは今も、弟子たちに同じ要求をしながら遣わすのだろうなぁと考えました。たとえば、日曜日の説教をするのに、説教の準備として少し使った参考図書や事典を説教台に持ち込んで並べたら、皆さんは驚いて身構えてしまうことでしょう。
たとえ、準備のときにいろんな資料を使っていたとしても、いざ説教台に遣わされて立っている時は、参考図書や事典で勝負するわけではありません。わたしの声で、わたしの中でかみ砕いて消化したもので、語りかけなければなりません。
最近よく走り込みをしているのですが、中田神父だと明らかに分かる何かを身につけて走ることは不可能ではないと思います。けれども、何も持たないで走ることは、それだけの意味があると思うのです。
本当に何も持たずに走ると、道の途中で出会う人と一対一で出会うことになります。相手がわたしと分からずに通り過ぎることも考えられます。それでも、「わたしをだれだと心得る。畏れ多くも」と宣伝しないで、ありのままの姿で、わたしだと分かってもらうことが、とても大切だと思います。
イエスさまは、何も持たせずに遣わす代わりに、汚れた霊に対する権能を授けています。霊に対する権能、それは、霊魂のお世話ができる権能ではないでしょうか。「持ち物は何もなくても、霊魂をお世話する権能があるから、あなたは十分に働くことができる。わたししか授けることのできない権能を与えているから、あなたはその部分でお世話しなさい。」イエスはそう仰っているのだと思います。
何も持たないでイエスに遣わされるということは、身を守るものも、自分が何者であるか証明するものも、理解されない時に言い訳をするものも、何もないということです。ただあるのは、イエスが授けてくださる権能、霊に対する権能だけです。あとはすべてをイエスに頼って働きます。
何ものにも頼らないで、イエスにだけ頼っている姿、だれも身構えさせないありのままの姿で人と向き合うことが、遣わされる弟子に期待されています。司祭・修道者に限らず、信徒の皆さんも、二人一組で証しする生活に遣わされます。結婚生活であるとか、地区評議会であるとか、クルシリオとか、他のいろんな使徒的活動です。
どうぞその中で、持ち物ではなく、手にしている資格でもなく、ありのままでイエスに信頼して生きていることを証ししましょう。イエスはそこでも、霊魂に働く権能で支えてくださいます。

年間第 16 主日(マルコ 6:30-34)

神の望みに答えるために、休む

「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」（6・31）。イエスが弟子たちにねぎらいの言葉をかけています。弟子たちは初めてイエスに派遣されて宣教活動に出かけました。緊張の連続だったことでしょう。そしてイエスのもとに帰り、報告をすると、イエスは「しばらく休みなさい」とねぎらってくださいました。イエスが弟子たちにうながした休みを、今週は考えることにしましょう。
わたしは、イエスと弟子たちのあいだでの「休み」というとき、「永遠の安息」という意味と、「つかの間の安息」という意味の両方を考えます。イエスは、そのどちらも与えることができるお方です。しかしここでは、「つかの間の休息」を意味しているのだと思います。「しばらく休みなさい」と、「しばらく」という言葉がくっついているからです。
「つかの間の休息」ですが、大切な休息です。それは、休むことで本来の自分を取り戻し、次によい働きをすることに繋がります。
哲学を習っていた時代に、教えていた先生がレクレーションの意味について話してくださいました。カタカナでレクレーションと書いても特別な意味はありませんが、英単語の recreation はラテン語の re-creatio の意味で、「再び創造する」「本来の自分を再び取り戻す」という意味があると教えてくださいました。
イエスが弟子たちにうながした「休み」が、この「再び本来の自分を取り戻す」ことに繋がる「休み」だったのだと思います。ところでこの「再び本来の自分を取り戻す」という様子は、みなさんが頭で考えていることと同じでしょうか。もしかしたら、違うかもしれません。
「本来の自分を取り戻す」と言いましたが、みなさんが考える「本来の自分」とはどんな姿でしょうか。たとえば土曜日日曜日の自分なのか、月曜日から金曜日の自分が本来の自分なのでしょうか。また、会社にいるときの自分が本来の自分なのか、家庭や自分の住む家にいるときの自分が本来の自分なのでしょうか。いろいろ考えると、「本来の自分」とは何を表すのか、人によって少しずつ違いがあるかも知れません。
イエスが、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と仰って弟子たちに本来の自分を取り戻させようとしたとき、イエスが考えていた姿はどんな姿だったのでしょう。イエスが与えた指示のなかに、考えるヒントがあると思います。
まず「あなたがただけで」とあります。弟子たちがつながりを持っている人はいろいろいたかも知れませんが、イエスに派遣された者たちだけで休むように指示しています。「人里離れた所へ行って」というのは、神の前に自分を置いてという意味に取るとよいでしょう。人に疲れただろうから、人を避けなさいという意味ではありません。神とじっくり向き合うための時間が、イエスの与えようとする休息です。最後に「しばらくの間」です。弟子たちはイエスに派遣されている者です。イエスが新たに派遣するそのときまで、派遣に備えるための充電です。
こうしてみると、イエスが弟子たちに取らせようとしている休み、「本来の自分を取り戻す休み」は、神の前に自分を置いて、神とじっくり向き合うことで与え

られるもののようです。わたしたちが、「本来の自分を取り戻す場所」「本来の自分を取り戻す方法」として考えていたこととは、ずいぶん違っていたかもしれません。
けれども、イエスが弟子たちに与えようとしている休みは、実はわたしたちに必要な休みでもあると思います。わたしたちは神に創られ、神に生かされて今生きています。わたしたちが本当の意味で充実した生活をするためには、神の望みにかなった生き方をすることがどうしても必要です。その、神の望みにかなった生き方を取り戻すために、神の前に自分を置き、神とじっくり向き合う。その時間が必要なのです。
それは家庭祭壇があるなら家庭祭壇の前での祈りとか、静かな時に教会に来て、特別何かを祈らなくてもいいから、しばらくのあいだ自分を教会の中に置くこと。そうすることで、わたしたちは本来の自分、神に生かされ、神に創られたことを感謝して生きる生活を取り戻すことができるのです。
金曜日、子供が３人司祭館にやって来て、シスターはいないかとずいぶん粘られました。シスターも休憩したいのになぁと思ったものですから、「神父さまが見張りをするから、海に泳ぎに行かないか？」と誘ったのです。すると子供たちはシスターを引っ張り出すことをあきらめ、一緒に泳ぎに行くと言い出しました。泳いでいる子供たちの見張りをしながら、わたしはひさしぶりに何か違った休息を楽しんでいると感じました。うまく言えませんが、自分のしたいことをして休むのではなく、わたしが神に感謝して生きるために、子供たちの見張りをしたことが休みになったのです。イエスに次に派遣されていくまでの時間を、子供たちを見張ることで充電にあてることができました。
わたしたちがイエスに派遣されている場所や形はさまざまです。派遣の呼びかけによりよい形で答えるために、休息は必要です。神に創られたわたしたち、神に生かされているわたしたちが、今日という日を使って神の望みに答える。そのために必要な充電を神に求めましょう。神が招いてくださる場所で充電を完了して、ためた電気で神さまのためによい働きができるよう、ミサのなかで願いましょう。

年間第 17 主日（ヨハネ 6:1-15）

年間第 17 主日((ヨハネ 6:1-15)

永遠の命を養うイエスに弟子たちも仕える

夏休み期間中、説教はなるべく堅信組の中学生に聞いてもらいたいので、堅信組の心構えと少し結びつけながら話しをしていきたいと思います。そして説教は必ずホームページやブログにも載せていますので、仮にミサに参加していなくても、「こうじ神父」という文字で検索をすれば、インターネットでわたしのブログやホームページが見つかりますから、そこで説教をチェックして夏休み期間中の補いとしてください。
今週の福音朗読は、「五千人に食べ物を与える」という奇跡物語です。この奇跡物語は、聖体の秘跡を考えるのにもってこいの話です。イエスは数え切れないほどの群衆を前にして弟子のフィリポに、「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」(6・5)と質問しました。
ここでイエスは、集まっている群衆はみんな食べ物が必要な人だと考えています。食べ物が必要な人、別に必要でない人、いろんな人がいるのではなくて、集まっているすべての人が、食べ物が必要なんだとフィリポに考えさせているのです。それは、大震災に遭った東日本の人たちとか、大雨で被害を受けた福岡熊本大分の人々のような状態です。
質問されたフィリポも、集まっているすべての人が食べ物を必要としていることを理解しました。けれども、買いに行ったのではまったく足りないことも感じています。「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」(6・7)。そこでイエスは、この数えることもできないような大群衆を食べさせるただ一つの方法は、ご自分が食べ物を与えることだと教えます。言葉ではなく態度で、「大麦のパン五つと魚二匹」(6・9)から、集まっているすべての人に食べさせることができるのはイエスただ一人なのだということを教えようとされました。
同じことは、今この時代にも当てはまります。日曜日の礼拝のために、わたしたちはここに集まりました。五人とか、十人ではありません。何十人も、あるいは百人以上の人が、ここに集まっています。そして集まったすべての人が、食べ物が必要なのです。
この集まったすべての人に食べさせることができるのはいったい誰でしょうか。主任司祭でしょうか。そうではなく、ここでもイエスが、ご聖体となってわたしたち全員の食べ物となってくださるのです。イエスがわずか五つのパンを取り、感謝の祈りを唱えてくださることで、わたしたち皆に、食べ物を用意してくださるのです。
一つ、ここで触れていないことがあります。それは弟子たちの働きです。イエスが数え切れないほどの群衆の食べ物を用意してくださるのですが、食べ物が群衆に確実に行き渡るためには、弟子たちの働きが必要になります。人々は草の生えた原っぱに座らせたままで

す。食べ物は弟子たちによって運ばれる必要があるのです。
わたしはここに、堅信組の中学生の働きが示されていると思います。堅信を受けている人、これから堅信を受けようとしている人は、今週の福音朗読「五千人に食べ物を与える」奇跡物語で、イエスだけが、数え切れないような人に十分な食べ物を与えてくださることを知りました。
学んだことは、実は学んで終わりではなくて、知らせに行く必要があります。数え切れないほどの人が、みんな食べ物を必要としています。それぞれが買いに行って食べる食べ物ではなく、買いに行っても手に入らない、永遠の命を養う食べ物が必要なのです。
人々はイエスが座らせて食べ物を待っています。それを届けるのは弟子たちです。イエスが食べ物を与えてくれる方だと学んだ人が、イエスが与える食べ物を配る必要があります。堅信組の中学生が、永遠の命の食べ物は、イエスさまが与えてくださると、数え切れないほどの群衆に知らせに行く。中学生が今の時代にもこの教えを届けに行くことが、期待されていると思います。
永遠の命を養う食べ物はこれです。ここに集まれば、永遠の命の食べ物にたどり着きますと、堅信組の中学生が知らせに行くことを、イエスは今期待しているのだと思います。
パンは無駄にならないように集められました。そして集めると、人々が五つの大麦パンを食べて、なお残ったパンの屑で、十二の籠がいっぱいになりました。この集められたパンは、今日この時間に集まることができなかった人々に届けるためのものです。健康がすぐれなくて自宅にじっとしている人、病院に入院している人、いろんな理由にがんじがらめになって日曜日に教会に集まれなかった人のためにあります。
弟子である堅信組の中学生が、残ったパンがまだありますと、どれだけたくさんの人がイエスに食べ物を求めても、イエスはご聖体の秘跡となって、永遠の命を養う食べ物をくださいますと、知らせて回る必要があります。これは、堅信組の中学生にもできる働きです。
今週イエスさまは、五千人に食べ物を与える奇跡の物語で、ご自分が数え切れないほどの群衆に永遠の命を養う食べ物を与えるかたであることを教えられました。堅信組の中学生は、イエスがご聖体の秘跡となって、すべての人の永遠の命を養うことを知らせに行く必要があります。永遠の命を養う食べ物がここにありますと、知らせに行くことをイエスさまは期待しています。
聖霊の賜物に強められて、堅信組の中学生がイエスの弟子としてすべての人にご聖体が行き渡るように働くことができますように。ご聖体の秘跡を受けた堅信組の中学生が、残ったパンを必要としている人にも働きかけに行くことができますように。このミサのなかで恵みを願いましょう。

年間第 18 主日(ヨハネ 6:24-35)

聖霊のたまものがイエスを信じさせてくれる

曽根教会の体の大きな神父さま。7月下旬に脳出血を発症してヘリコプターで大村に運ばれ、緊急手術を受けました。聞く所によると右半身に麻痺が出て、言語障害もあるそうです。心配しておりますが、何もない人が脳出血を起こすはずはないのですから、ふだんの生活に問題があったのだと思いますし、わたし自身も気をつけようと思っています。
いきなり主任司祭が１人いなくなったわけですから、大なり小なりわたしたちにも負担が回ってきます。ある先輩は、堅信組の中学生の準備を、いなくなった司祭の代わりにしてあげないといけないなぁと言っておりました。
曽根から遠いわたしにも、神父さまが倒れたのでドッヂボール大会の賞状を代わりに作ってくれと大会を主催する神父さまから頼まれました。わたしはただで引き受けるのはつまらないと思ったので、主催する神父さまをちょっとからかってやろうと思いました。
賞状を印刷したあと、大曽の神父さまに電話しまして、「賞状は印刷したけど、『優勝　浜串教会』ともう印刷しましたからね」と言おうと喉まで出かかったのですが、生真面目な神父さまなのでカンカンに怒るだろうなぁと思ってそれはやめときました。とにかく、ちょっとの体調不良は心配しますが、明らかな病気は心配するだけでなく何が原因ですかとそちらに考えが向かいます。この際司祭は生活を見直すべきです。
今週の福音朗読から堅信組の中学生に伝えたいことは、堅信の秘跡で受ける聖霊の七つのたまものです。1学期の終わりに堅信の秘跡とは何かをお話ししましたが、堅信の秘跡は聖霊の七つのたまものを受堅者に注ぎます。七つのたまものとは、「知恵・理解・判断・勇気・神を知る恵み・神を愛する恵み・神を敬う心」です。
今週の福音朗読には文章に工夫がなされています。それは、「群衆とイエスとが同じことばを繰り返しながら話は進むのに、群衆はちっともイエスの理解が深まらない」そういう様子が描かれているのです。もとのギリシャ語では、はっきり言葉のキャッチボールが見られます。
例として、「捜す」(1)群衆は満腹したからイエスを「捜す」。だがイエスはしるしの意味に気付いて「捜し」てほしい。「神の業」(2)群衆は自分たちで「神の業」をおこなうことができると考えているが、イエスは「神の業」を行うには神がお遣わしになったイエスを信じる以外にないと強調する。「信じる」(3)イエスを「信じる」ことは、イエスを救い主と信じること。だが群衆はイエスの言っている言葉を「信じる」だけで救い主という信仰に深まらない。全部で８回言葉のキャッチボールが繰り返されたのに、心のキャッチボールはまったく深まりませんでした。言葉だけを投げかけたり投げ返したりして、思いは届かなかったのです。

何が足りなかったのでしょうか。たまものが、足りなかったのだと思います。イエスのことを、神から遣わされた救い主と信じるためには、神が聖霊を通して注いでくださる賜物が必要なのです。
そのたまものこそ、堅信の秘跡で受ける聖霊の七つのたまものです。群衆はイエスと言葉のキャッチボールをするあいだに、イエスの言葉に「知恵」があると「判断」し、「理解」します。イエスの言葉を心を開いて受け入れるには「勇気」が必要です。
イエスの知恵ある言葉が、イエスがだれであるかに群衆を導きます。そしてはっきりとイエスを信じるために、「神を知り、神を愛し、神を敬う」賜物が必要になります。これら聖霊の七つのたまものが、堅信を受ける人に注がれて、イエスとの言葉のキャッチボールを通して、イエスをより深く信じ、イエスに従って生きる人になる力を注いでくれるのです。
もう一度、イエスと言葉のキャッチボールをする群衆を思い出しましょう。イエスが神から遣わされた救い主だと理解して信じるための言葉が繰り返し使われても、群衆はイエスを救い主と信じることができません。それは、今の時代でも同じです。
考えてみましょう。イエスが人間の救いのために十字架にはりつけにされて命をささげ、復活しました。聖書を読んだことのある人はみな、文字では知ることができます。けれども、聖書を読んだすべての人がイエスを信じ、礼拝するわけではありません。わたしたちはほぼ確実に日曜日に集まり、約1時間の礼拝をささげていますが、それは、聖霊のたまものが、イエスをより深く知り、愛し、敬うように促しているからなのです。
イエスとの言葉のキャッチボールは、今の時代にも交わされています。イエスが直接キャッチボールの相手でなくても、ミサに行くように促す両親との言葉のキャッチボール、教会の行事や、教会学校、家庭で祈りをするようにと言う家族との言葉のキャッチボールなど、言葉だけやり取りする人はイエスに近づくことはできません。言い訳したり、反抗したりして、イエスのもとに行こうとしないでしょう。
けれども、キャッチボールをするあいだに、聖霊のたまものが言葉の向こうにある大切なものを理解させるなら、イエスのところに向かう力をもらいます。聖霊のたまものは、イエスをこれからも救い主と信じてイエスに近づくための力を与えてくれるのです。
堅信組の皆さん、言葉のキャッチボールだけで終わらないようにしましょう。祈りとかミサとか、言葉だけやり取りしていたらイエスから遠く離れてしまいます。祈りやミサが、救い主に近づく確かな道なのです。堅信をすでに受けた人は、そのことを態度で教えてくれています。堅信の秘跡で受ける七つのたまものが、よりイエスを知り、愛し、敬う力を与えてくれるように、このミサの中で願いましょう。

年間第 19 主日(ヨハネ 6:41-51)

あなたの命は神から来ている

先週行われたドッヂボール大会の結果は、優勝・準優勝・第３位まで、去年と同じ教会でした。先週冗談で「優勝浜串教会」と印刷したと言いましたが、去年と同じ教会名で印刷しておけば、手書きの部分がなくてきれいに出来上がったのになぁと思いました。
皆さんは浜串教会チームの成績が気になるでしょうからいちおうお知らせしておきます。全体で 14 チームが出場しまして、予選を２つのパート、ＡパートとＢパートで繰り広げました。そして浜串チームは、Ａパートの３位に入りました。
ただ、最終的にすべての順位を確定する試合、全体５位になるか６位になるかの試合に、残念ながら負けてしまいました。ですから最終順位は〇〇位ということになります。もうこれ以上は説明要らないと思います。
さて今週の福音からは、洗礼の秘跡について堅信組に語り掛けたいと思います。ユダヤ人たちがイエスについてつぶやき始めます。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか。」(6・42)これは、イエスがどこからやって来たのかについてのつぶやきです。
ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から降って来たパンである」（6・41）と言ったのに、それを横に置いてぶつぶつつぶやいています。中田神父に当てはめて考えると、中田神父は叙階の秘跡によって司祭にしてもらいました。だから、神さまからやって来たものがわたしの中にはあります。
けれども、生まれたのは浜串から車で 30 分くらいしか離れていない鯛ノ浦で生まれました。鯛ノ浦のことを知っている人から見れば、父親母親がだれで、お金持ちか貧乏か、小さい頃はどんな子供だったか、いろんなことを知っているわけです。
イエスは、天からやって来た部分が大事で、そこに目を向けて自分を信じて欲しい、理解して欲しいと願っています。けれども、つぶやいているユダヤ人たちは、「天から降って来た」とイエスが話すのを一切無視してしまいました。
わたしたち皆に当てはめてみましょう。わたしたちには、天からやって来た部分と、この世に属している部分とがあります。わたしはどこからやって来たかと考える時、父親母親の名前を言える人もいるでしょう。けれども、父親母親が全く分からない人もいます。この世のつながりは、絶対的ではないのです。
ですが、もう一つのこと、わたしたちには天からやって来た部分があります。わたしたちの命は、神から与えられたものだからです。堅信組の皆さんに命を与えてくれたのは、天の父です。そして、命が天からやって来たことをすべての人に証明するために、洗礼を受

けています。洗礼の恵みは、人を神の子どもとし、原罪とすべての自罪をゆるし、成聖の恩恵を与え、神の家族としますが、これらはすべて、あなたが天からやって来た部分を持っている、そこから出てくる恵みなのです。
たとえ父親母親がはっきり分かっていても、神の子どもと呼べるわけではありません。天からやって来た部分があるから、すべての人は神の子、神の命をいただいているのです。洗礼の秘跡は、この天からやって来た部分を人々に証明する秘跡と言えます。
すべての人に、天からやって来た部分があります。ですから、洗礼を受けているすべての人、とくに堅信の秘跡を受けようとしている堅信組は、出会う人に、「あなたにも、天からやって来ている部分がある」と話し掛けて欲しいのです。天からやって来ている部分に相手が気付いたら、洗礼の恵みに導いてあげることができます。
今週の朗読でイエスはユダヤ人にもう１つの語り掛けをしました。最初は、「イエスがどこからやって来たか」についてでしたが、今度は「イエスは誰なのか」に目を向けさせようとしています。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」（6・51）
わたしたちには、天からやって来た部分があると言いました。けれどもすべての人がそれを理解し、受け入れてくれるわけではありません。天からやって来た部分があると理解してくれたとしても、洗礼を受けてくれるかどうかは分かりません。
洗礼は、天からやって来た部分があることを公に言い表すことですから、信じることが必要になります。そこで、「イエスが誰であるか」をあわせて伝えることができれば、もっと多くの人に、洗礼の恵みに触れてもらうことができるはずです。
「イエスが誰であるか」いろんな説明ができると思いますが、今週の朗読から分かることは、イエスはすべての人の中にある天からやって来た部分を生かすパンであるということです。天からやって来た部分を生かすパンであるイエスを信じること。それが、人を洗礼に導く大きなきっかけになります。
わたしたちには皆、天からやって来た部分があります。洗礼を受けた人は、それを人々の前で公に言い表している人です。七つの秘跡の恵みは、洗礼の恵みを受けなければ先に進めません。豊かな恵みに養われる入口に、１人でも多くの人を導きましょう。そのための勇気と力を、このミサの中で願いましょう。

聖母の被昇天（ルカ 1:39-56）

聖母の被昇天(ルカ 1:39-56)

主の僕・主のはしためとなる

聖母の被昇天のお祝い日を迎えました。今年は、堅信組の皆さんに病者の塗油の秘跡を考えるきっかけを今日の福音朗読から拾いたいと思います。今日の説教で、七つの秘跡のうち４つを取り上げたことになります。
さて、病者の塗油の秘跡は、まだある人々には十分理解されていない秘跡だと思います。かつては「終油の秘跡」と言われ、危篤の状態にある人に、１度だけ授けるものでした。
それが、今から 50 年くらい前に全世界から司教さまを集めて行われた会議、「第二バチカン公会議」で、「『終油』は、むしろ『病者の塗油』ともいうべきもので、危篤の状態にある人のためだけのものではない。したがって、信者が病気や老齢のために死の危険にある場合、この秘跡を受けるに適した時が来ていることはたしかである」（典礼憲章 73）とはっきり言っています。
病者の塗油は、多くの場合、命の危険が考えられる人に授けます。病気であったり、老齢であったり、１度この秘跡を受けた人でも再び容態が悪化した場合、あるいは同じ病気が長引いて容態がいっそう悪化した場合、繰り返して秘跡を受けることができます。
だから、多くの場合急いで司祭は病人のもとに向かいます。この秘跡は、病人に聖霊の恵みを与えて、救いに関連して人間全体を助け、神への信頼を深めさせ、悪霊の誘惑と死の恐怖に対して抵抗力を強め、また病苦に耐えるだけでなく、これと戦う力を与え、さらに霊的な救いに役立つ場合は、体の健康を回復させ、また必要な場合は罪のゆるしをもたらし、全生涯の回心を全うさせる効力を持っています。決して、病人に終わりを宣告し、恐がらせるものではないのです。
そこから考えると、司祭も病者の塗油を授ける心構えを正しく持たなければならないかも知れません。司祭が、病者の塗油をいよいよこの人も最期だなぁという思いで授けるのは間違いだということです。もっと、病人に病気に耐える勇気と希望を与えるような授け方、心構えが司祭には必要だと思います。
今日の聖母被昇天に与えられた朗読は、マリアがエリザベトを訪問する場面から始まっています。マリアさまの行動に、わたしは病者の塗油を授ける司祭の姿を見つけました。マリアは出かけて、「急いで山里に向かい、ユダの町に行った」（1・39）とあります。
最終的に「マリアは、三か月ほどエリザベトのところに滞在してから、自分の家に帰った」（1・56）のですから、急いでエリザベトのもとに向かう必要はなかったと思うのです。それなのに、マリアが急いだのは、彼女が神の恵みを運んでいたからではないでしょうか。神の恵みを早くエリザベトと喜び合いたい。そんな思いから、

先を急いだのだと思います。
病者の塗油の秘跡も、急いで出かけて授けに行きます。それは、マリアと同じ理由からです。神の恵みを運んでいるから、神の恵みを、病人と喜び合うために、急いで行くのです。
マリアの訪問を、エリザベトは喜びました。「わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。」（1・43）病者の塗油の秘跡も、授けてもらった人と秘跡の恵みを喜び合うことができるのが、本来の姿だと思います。
マリアが運んだ神の恵みは、エリザベトのお腹の赤ちゃんにも働きかけました。「あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。」（1・44）病者の塗油の秘跡も、病人の心と体のすべてを喜ばせる力を持っています。病者の塗油の秘跡は、何よりもまずイエスが病人を訪ねてくれている。この点を理解して欲しいと思います。
マリアはエリザベトの訪問でさらに救い主である神を喜びたたえる気持ちになりました。神はマリアを「女の中で祝福された方」としてくださいました。マリアがエリザベトを訪問したのは、神にお使いを頼まれたようなものです。お使いに行くのは身分の高い人ではなく、身分の低い人です。
けれども、身分の低い人の務めを引き受けたマリアを、神は今や高く引き上げてくださいました。神がマリアを、天まで引き上げてくださったので、マリアは今、ユダの町にいるエリザベトにだけでなく、神の恵みを届ける必要のある人すべてに働くことができます。天に上げられたことで、お使いに出るという、主の僕・主のはしための務めを、いつでも、どこにでも果たすことができるようになりました。
わたしたちも、からだも魂も天に上げられた聖母マリアを仰ぎ見て、マリアの姿に倣うべきです。マリアは、喜んで神の恵みを届けるお使いを果たしました。わたしたちも、お使いを喜んで引き受けましょう。病者の塗油の秘跡は、司祭にできるお使いの１つです。洗礼を受けたすべての人、とくに堅信組は、病者の塗油の秘跡を必要としている人のために、司祭のところに行って秘跡をお願いすることができます。それは、堅信組の皆さんにできる立派なお使いです。
マリアは今神の大きな計らいで、全世界の人に、喜んで神の恵みを運び、人々と神の恵みを喜び合う方に変えられました。マリアの姿に、わたしたちも進むべき道を重ねましょう。マリアに倣って、急いで神の恵みを運び、共に喜ぶ人になることを望みましょう。あわせて、戦争のない、平和な世界を全世界の人が目指して生きるように、ミサの中で聖母の取り次ぎを願って祈りましょう。

年間第 20 主日（ヨハネ 6:51-58）

年間第 20 主日（ヨハネ 6:51-58）

イエスはご自身を与え、人を永遠に生かす

今週の福音朗読を味わいながら、堅信組に結婚の秘跡について話したいと思います。結婚の秘跡は七つの秘跡の中でこの秘跡だけが持っている特徴があります。それは、洗礼を受けたカトリック信者同士が、互いに誓い合うことで、結婚の秘跡を授けるというものです。
他の六つの秘跡は、授ける人と受ける人が別々の人です。洗礼を授ける人と、洗礼を受ける人は別です。その他も同じです。ですが、結婚の秘跡では、司祭は必ずその場に立ち会い、式を進めていきますが、秘跡を授けるのは結婚する一組の男女です。互いが、互いに秘跡を授ける、ただ一つの秘跡なのです。
この、互いに秘跡を授け合う姿から結婚生活の特徴も見えてきます。それは、互いが、互いを与え合うということです。結婚して夫婦となり、夫と妻が、互いに持っている知恵や力を与え合い、日々を過ごしていきます。
今日の福音朗読で、つぶやくユダヤ人たちがイエスにこう言いました。「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」（6・52）。互いが互いに与え合うということは、イエスがわたしたちにご自分を食べ物として与えてくださる姿に似ています。夫婦が、互いを与え合うならば、それは自分を相手に食べ物として与えることになります。自分を相手に与えるということは、相手を生かすことになります。結婚している相手が、疲れていたり思い悩んでいたりする時、もう一方の相手が自分を与えるなら、それは相手を元気づけ、相談することもできるようになり、相手を生かすことになります。
また、ふだん口から入る食べ物は、一度食べて、一度栄養になって終わりですが、結婚した夫婦が互いを与え合うのは、一度だけ相手を生かすのではなく、繰り返し生かすことができます。結婚した夫婦は生涯にわたって相手に自分を与えるのですから、互いをずっと生かし続けることができます。
これは、イエスがわたしたちの食べ物となり、永遠に生きるものとしてくださるのに似ています。イエスが与えてくださるご自分の肉と血は、わたしたちを永遠の命に導くからです。夫婦が与え合う姿は、永遠とまではいかないけれども、25 年の銀婚式を祝ったり、50 年の金婚式を祝ったりするのですから、地上の生活の中で最も長く互いを与え合う姿だと思います。
さらに、イエスはこうも言いました。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。」（6・56）イエスのこの言葉も、互いが互いを与え合う夫婦の姿に通じると思います。「いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。」夫婦でなければ、相手の内にいることはできないでしょう。それは、互いを与え合い、生かす者同士だからできるわざ

なのです。
そこで、今週堅信組の中学生に考えてもらいたいことは次のことです。結婚の秘跡は、自分を相手に与えるすばらしさ、自分を与えて、相手を生かすすばらしさを体験する秘跡です。ですから、できるだけ多くの人が、結婚の秘跡に心を開いて、結婚することを人生の一つの目標にしてほしいと思います。それは同時に、イエスがご自分を与えて人々を永遠に生きるものにしてくださる姿に似る生き方だからです。
ところで、結婚の秘跡の恵みを願うとき、一組の男女が互いに秘跡を授け合うと言いましたが、そこには必ず司祭が立ち会わなければなりません。儀式としては証人も立ち会う必要がありますが、とにかく司祭がそこにいなければ、２人で勝手に教会にやって来て誓いの言葉を交わしても、結婚の秘跡は成り立たないのです。
そうなると、多くの人に結婚の秘跡を願い求めて欲しいですが、その人たちの祝福に立ち会う人も、１人か２人は必要になります。ですから、結婚の秘跡の恵みに多くの人があずかれるように、男子のだれかは司祭になってほしいと思います。どんなに時代が進んでも、男女のカップルだけで結婚の秘跡を有効に授けることはできませんので、だれか、司祭になって祝福してほしいと思います。
イエスはご自分を完全に、粉々に砕いて食べ物となってくださり、わたしたちを永遠に生きるものとしてくださいます。その恵みは聖体の秘跡となって今わたしたちに与えられました。人に自分を与えて、相手を生かす生き方をする人は、イエスがご自分を与え尽くす姿に倣う人です。それは結婚の秘跡の中ではっきりと現れます。
これから先、いつか結婚する堅信組の中学生も、結婚の秘跡の恵みがとても深い生き方に導くことを今日学んで帰りましょう。そして、すでに結婚の秘跡の恵みに生きてきた両親、先輩方をあらためて思い出して、素晴らしい恵みの中にいるのだなぁと理解してほしいと思います。堅信の秘跡を受けるなら、結婚の秘跡の恵みのすばらしさもよく理解できるようになります。信頼して、11 月の堅信の秘跡を待つことにしましょう。

年間第 21 主日（ヨハネ 6:60-69）

年間第 21 主日(ヨハネ 6:60-69)

永遠の命の言葉を語り続けるために

今年の夏休みが始まるにあたって、子供の休み中は、親子で早朝のミサにあずかる良い機会だから、参加しましょうと呼びかけたはずですが、とうとう誰も来ませんでした。残念です。
写真を説教台に貼り付けています。タイトルは、「グリーンランドナウ」です。佐世保市の大野教会の後輩神父さんが、facebook にアップした写真をお借りしました。小学生、「グリーンランドいいなぁ」と思いますか？この写真には次のようなコメントが付いていました。
「これが最新のアトラクション、地上 59 メートル・天空の回転ブランコ『ゴクウ』です。毎朝がんばってミサに来た 15 名の子供と共に楽しんできました。」聞きましたか？毎朝がんばってミサに来た 15 名の子供たちだって。
来年あたりどうですか。朝の 6 時にミサに来て、そのままラジオ放送で体操をして、豪華な遠足。今週休暇を取るので朝のミサがありませんから、今となっては主任司祭の遠吠えでしかありません。
この主日のミサを終えましたら、夏休み休暇をいただきたいと思います。休暇中は放電して何もしないつもりです。実家にしばらく滞在することもそれなりに意味があるのかなぁと思っております。
休暇中、代わりの神父さまが居りませんので、皆さまにはご不便をおかけすることになると思います。司祭がいないということは、司祭でしかできないこと、司祭だけに委ねられている奉仕が受けられないということです。その点は申し訳なく思っております。ミサはこの期間お休みになりますが、釣りには行きたいと思っていますので、近くをウロウロするかもしれません。
今週は堅信組の中学生に叙階の秘跡について福音と結びつけながら話したいと思います。叙階の秘跡は、男性のカトリック信者を、神さまがご自分の使命を果たし続けるために選び、司祭とする秘跡です。12 使徒がまず叙階の秘跡の恵みを受け、使徒の後継者である司教が続き、現在ではそれぞれの司教が、司教の協力者として司祭を叙階しています。
司教の協力者として、司教に叙階していただく司祭、いろんな協力のために派遣されていきますが、まずは小教区の司牧のために派遣されます。ほかにも、将来司祭を目指している神学生を育てる神学院とか、教区全体の活動を取り仕切る教区本部事務局に入るとか、結婚問題など法的な内容を取り扱う部署とか、中には大学の先生であったり留学させて勉強を積んでもらったり、ほかの教区を支えるために派遣されたり、カトリック中央協議会で全国的な働きをしたりします。これらすべてを司教さま一人で果たすことは不可能ですので、協力者である司祭を叙階し、教区を守り導いているわけです。

この、司教さまと司祭が一致して取り組んでいる働きは、「命を与える霊の働き」と言うことができると思います。今週の福音朗読に、「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたに話した言葉は霊であり、命である」（6・62-63）とあります。命を与えるイエスの霊の働きを、司教と司祭は世の終わりまで受け継いでいくのです。
「命を与える霊の働き」と言いました。それはどんなものでしょうか。それはわたしたちがどんなに素晴らしい存在かを明らかにする働きです。人間の命がどんなに素晴らしいか。それは洗礼によって一人ひとり聖なるものとする恵みが注がれるほどです。ほかの生き物には、聖とする恩恵「成聖の恩恵」は与えられません。
また、イエス・キリストがご自分の御体と御血を、食べ物として与えてくださるほど人間は尊い存在です。人間の救いのためにイエスはご自分の命をささげてくださいました。天使のためには命をささげませんでした。
さらに罪をゆるして清めてくださり、聖霊の七つのたまものを注いで強めてくださり、一組の男女を夫婦として祝福し、神の創造のわざに参加させてくださり、命の危険にさしかかった時は病人を訪ねていって励ましてくださいます。人間に注がれるありとあらゆる神の恵みが、人間はどれほど尊い存在かを明らかにしてくれるのです。
人間の尊さ、素晴らしさを証明するすべての恵みを、目に見える形で示すために必要なものは何でしょうか。それは叙階の秘跡を受けた司教・司祭の存在です。叙階の秘跡を受けた司教・司祭が、七つの秘跡を通して示される人間の素晴らしさを目に見える形にしてくださいます。
人間の価値、人間の尊さをイエスはご自分が語る永遠の命の言葉で極みまで証明してくださいました。イエスに耳を貸さず、イエスから離れていった人々もいました。けれどもすべてを捨てて従い、「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」（6・68-69）と立派に答えた弟子も必ずいたのです。
イエスが、わたしたちの素晴らしさを永遠の価値にまで引き上げてくださいました。その働きを、叙階の秘跡を受けた司教・司祭は受け継いでいきます。司祭を目指してから司祭に叙階されるまで、中学生からだと 16 年もかかります。けれどもイエスさまの働きを受け継ぐ司祭の働きは、その１つひとつに永遠の価値があります。
ぜひ子供たちの中に、青少年の中に、日本の社会が与えることのできない価値を人に与える司祭を目指す人が生まれることを願います。イエスが与え続ける永遠の命の言葉を、受け継いで語る司祭が１人でも２人でも与えられますように、今日のミサの中で願いましょう。

年間第 22 主日(マルコ 7:1-8,14-15,21-23)

あなたの心の中に糾明すべき罪がある

休暇をいただきました。月曜から長崎に行く予定をしていましたが、日曜日のミサ後から天気予報を見ていると、どうも月曜日に船は出そうにありませんでしたので、日曜日の夕方５時の五島産業汽船を申し込んで、半日早く五島を脱出しました。
結果的にその判断は正解だったのですが、あとで考えたら日曜日の夜には評議会が入っていて、議長さんにはよろしくお願いしますと連絡はしたのですが、悪いことしたなぁと思っています。
さてサッカーのロスタイムのようなおまけの休みが与えたれて、学生の人たちはさぞ喜んでいることでしょう。わたしが記憶している限り、小学生時代に9月３日が始業式になったことなど聞いたことがありません。くやしいです。
さてぎりぎり夏休みの最後の週で、堅信組に言い聞かせる七つの秘跡の話は間に合いました。今週の福音朗読から、「ゆるしの秘跡」について、呼びかけをしたいと思います。ゆるしの秘跡は、二つの柱があります。罪を犯した人は洗礼以後に犯した罪について、問いただし（糾明）・悔やみ（痛悔）・司祭に告白し・償いを果たします。司祭は罪を犯した人にキリストの名によって罪のゆるしを与え、償いを言い渡します。
どのような罪を告白しなければならないかというと、洗礼以後、まだ告白していないすべての大罪を告白しなければなりません。また小罪を告白することも、教会から強く勧められています。小罪を告白することで、わたしたちの正しい良心を養い育て、悪い傾きと戦う助けになるからです。
そこで、罪について少し考える必要があります。罪と言うと、何かをしなかったとか迷惑をかけたとか、結果だけ考えるのは堅信組の中学生の糾明、告白としては不十分だと思います。告白する人が「日曜日のミサに行きませんでした。２回」と言ったとしましょう。中にはそれだけしか告白のときに言わない人もいます。そんな時、わたしは心の中では「よく考えてほしいなぁ」と思っています。
福音朗読をもう一度読み返しましょう。当時のユダヤ人たちは、昔の人の言い伝えを守り、外出先から帰ると念入りに手洗いをして食事をしていました。外出先が外国人のいる場所、違う宗教を信じている人の場所だと、宗教的に汚れると思っていたからです。
けれども、イエスと弟子たちはその習慣をそれほど気にしていませんでした。ファリサイ派の人々と律法学者たちにとって、手を洗わないイエスの弟子たちの態度は、汚れをできるだけ遠ざけようと努力していた自分たちを侮辱しているように見えたでしょう。
イエスは、きっぱりとご自分の考えを伝えます。「皆、わたしの言うことを聞いて悟りなさい。外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚す

のである。」（7・14-15）ファリサイ派の人々と律法学者たちは、外を一生懸命清めようとしていましたが、彼らの心の中は、手を洗わないイエスの弟子たちへの怒りと憎しみで一杯だったのです。イエスにとって、外の汚れを洗ったか洗わなかったかよりも、宗教指導者の心の中の、怒りや憎しみこそが罪だったのです。
先週中田神父は浜串と福見で平日まったくミサをしませんでした。そのことだけを取り上げたら、重大な罪を犯しています。けれども月曜日から水曜日は長崎で、木曜から土曜日は鯛ノ浦で、ミサをささげました。わたしは朝の６時に、浜串と鯛ノ浦に同時にいることはできません。浜串と福見でミサをしなかったし、できませんでしたが、理由まで考えれば理解してもらえると思います。
堅信組の皆さんも、ゆるしの秘跡を受ける前には十分な糾明をするでしょう。ミサに行かなかった日もあるでしょう。本当に、どうにもならない場合は、わたしは罪にならないと思います。行けば行けるのに、行きませんでした。それは、心の中で罪を犯していると思います。行きたくないという思いを優先したからです。
イエスの言葉はゆるしの秘跡のしかたをもう一度考えさせます。「人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」ミサに行かなかったのは結果に過ぎません。なぜ行けなかったのかをよく糾明して司祭に告白する必要があります。起き上がれないくらい頭が痛くて行けなかったのか、起きなさいと親から言われたのに、聞こえないふりをして行かなかったのか。事情はまったく違います。
中には病院に入っていて日曜日のミサに行けませんでしたと言う人がいますが、それは結果だけを気にしている人です。病院にいれば行けるはずがないのですから、そんなのは罪ではありません。
「人の中から出て来るものが、人を汚すのである。」堅信組の中学生は、保護者といっしょに 11 月の堅信式の前にゆるしの秘跡を受けます。お祈りをしませんでした３回、ミサに行きませんでした２回というような告白はもううんざり。不合格です。
イエスは「人間の心から、悪い思いが出て来る」とも言っています。思い、言葉、行い、怠りについて、悪い思いがその時になかったか、よく糾明をしてほしいと思います。決して、教会に行かなかったことだけが罪なのではありません。生活全体を見つめて、心の中で、悪い思いを持ったときのことを糾明・痛悔・告白してほしいと思います。
最後に、司祭は、だれがどんな罪を言ったのか決して話しません。だいたい分かっていますが、決して話しません。なぜなら、司祭はイエス・キリストの名によって奉仕をしている僕です。一人ひとりの罪について何かが言えるのはキリストお一人です。僕である司祭には何かを言う権限はありません。だから、司祭には完全な秘密を守るように義務づけられています。イエス・キリストと向き合って、立派な告白ができるように、ミサの中で願いましょう。

年間第 23 主日（マルコ 7:31-37）

わたしたちすべてを父なる神に開くイエス

視覚障害を持っている方に情報を提供する団体が九州から集まり、研修する目的で先週は宮崎に行ってまいりました。集まってきた団体は、おもに点字図書館とか、ライトハウス（この場合のライトは、明るくするほうのライトです）という名前の付く団体でした。わたしが関わっているマリア文庫はその他もろもろの団体なのですが、皆さんしっかり研修で収穫を得てきましたし、わたしは理事会にも出席してきまして中身のある会合でした。
金曜日は 12 時ですべての研修内容が終了したので、マリア文庫の会員は宮崎でわたしたちと共に活動している会員の案内で昼食をご一緒させてもらい、さらに青島という場所を観光してきました。唯一、研修とは別の気分転換になりました。
さて、福音の学びを得ることにしましょう。イエスのもとに、耳が聞こえず舌の回らない人が連れて来られました。イエスは人々の真剣な思いに応えて、病をいやしてくださいました。３つのことについて触れたいと思います。
１つ目はイエスは病をいやす際に、とても細かい動作をされたということ。２つ目は、イエスが奇跡によってもたらしたことは、病からの回復だけではないということ。３つ目は、イエスがだれであるか、人々から理解されなかったということです。
イエスは、耳が聞こえず舌の回らない人に、細かい動作を行いました。「指をその両耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、『エッファタ』と言われた。」（7・33-34）
本来イエスが奇跡を行うのに、これらの動作は必要なかったはずです。それでもこのような細かい動作をされたのは、その人の重荷を、すべてイエスが引き受けてくださるという思いがあったのではないでしょうか。イエスはすべての人の重荷や苦しみを、一つひとつ身に受けてくださいます。
次に、イエスが奇跡によってもたらしたことは何か、ということですが、イエスの細かい動作の中にヒントがあると思います。実はイエスの細かい動作の中に、一見病の治癒とは無関係な動作が入っていました。それは、「天を仰いで深く息をつき」というものです。
この動作は、人を父なる神に結び合わせようとするものです。天を仰ぐ動作は神への祈りで、深く息をつくのは解放してあげたいという切なる願いの表れでしょう。イエスはこの「天を仰いで深く息をつく」動作で、単に病からこの人を解放するだけではなくて、人間全体を、喜びへと解放してくださったのです。イエスという方は、ただ病気を治す人ではなく、人を父なる神へと向かわせ、喜びへと解放する方なのです。
最後に、イエスはこの出来事を目撃した人々に、「だれにもこのことを話してはいけない、と口止めをされた」（7・36）とあります。わたしは、

イエスが人々をそれほど信用しておられなかったのだろうと考えました。結果的に人々は、イエスが行った奇跡だけに目を奪われてしまい、神を賛美することはできませんでした。イエスはあらかじめ、そのことをご存じだったのでしょう。それで、人々に口止めをされたのでした。わたしたちは、人々のようになってはいけません。イエスの奇跡に触れる時、神を賛美する者でありたいと思います。
イエスは「エッファタ」「開け」と言われました。その叫びは、「耳が聞こえず舌の回らない人」のためだけではありません。わたしたちすべての心に、「開け」と呼び掛けているのです。イエスのさまざまな教えや導きにもかかわらず、わたしたちの耳はイエスの言葉がよく聞こえていません。イエスの招きがあっているのに、わたしたちの舌は神を賛美するためによく回らないのです。
そんなわたしたちに、イエスは今も「エッファタ」「開け」と叫んでおられるのではないでしょうか。生活のすべてで、わたしたちはイエスの呼び掛けに耳を傾け、舌を使って賛美する必要があるのです。朝昼晩と食事をする時、イエスは「開け」と言っているのにわたしたちの舌は食事に先立って神を賛美しているでしょうか。
一日の始まり、また一日の終わり。イエスは「開け」と言っているのに、わたしの舌は神を賛美して一日を始め、賛美のうちに一日を終えているでしょうか。こうしてイエスは、わたしたちすべてに、「開け」と言って心を神に向けるように促しているのです。
わたしたち一人ひとりが、イエスによって心を開かれ、神を賛美する者となれるように祈りましょう。人と人との語らいも、心を開いて神を賛美する語らいとすることが可能です。いつも誰にでも、イエスが「開け」と言っておられることに気づき、神に結び合わされることができますように、今日のミサの中で祈り求めましょう。

年間第 24 主日（マルコ 8:27-35）

年間第 24 主日（マルコ 8:27-35）

命を失って、それを救う

今週、敬老者のためにミサをささげています。わたしは、歳を重ねることの重みを考えるようになりました。去年はここまでできていたということが、今年は同じところまでできなくなったりします。
たとえば、今婦人会といっしょにミニバレーの練習を、司祭団の間ではソフトボールの練習をしていますが、バッティング練習が回ってきて、去年は外野の守備ギリギリのところまでボールを飛ばせたのに、今年は何度試しても少し手前で外野の守備の司祭に取られてしまいます。
ミニバレーで言うと、去年は練習の最後までしっかり練習できていたのが、今年は練習の終わり頃になると気持ちが途切れてしまって、「あー、そろそろ終わらないかなぁ」と思うことがあります。去年と今年、１年しか違わないのに、やはり何かが少し違ってきています。
今日敬老のお祝いを受ける 75 歳以上の方も、多かれ少なかれ、今年は去年に比べて少し違いが出て来たなぁということがあるのではないでしょうか。そして、そういう少し荷が重くなった負担を、今もこうして正面から担っておられます。本当に、立派だなぁと思います。
今週の福音は、ちょうど敬老者の姿に重なります。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。」（8・34-35）
自分を捨てて生きるとか、自分の十字架を背負って生きるとか、好んで選ぶ道ではないはずですが、今日お祝いを受ける敬老者の方々は、思い通りに生きることを少し控え、思い通りにならない頭と体を日々担ってこられました。それは、敬老者の立場で、イエスに従う生き方だと思います。考えようによっては十年前二十年前よりも、もっとイエスの望みに従って生きることができるようになったのかもしれません。
思い通りに生きることを少し控えて自分を捨てて生きている姿、思い通りにならない日々を自分の十字架として担っている姿は、ペトロの信仰を表す場面とも重なります。ペトロは、「あなたは、メシアです。」（8・29）とイエスに答えました。
この信仰告白は、イエスに、「あなたは他の誰でもない、ただ一人の救い主です」と言い表しているのですが、敬老者の皆さんも、生き方で「イエスさま、あなたは他の誰でもない、ただ一人の救い主です」と言っておられると思います。他に欲張って求めるものはなくなり、ただイエスの救いだけを必要としている姿。敬老者の皆さんは生き方で、ペトロの信仰を言い表しているのだと思います。
今日のこのミサには、敬老者を祝う人々も集まっています。子供たち、敬老者を家族に持っておられる方、教会家族で敬老者のお祝いのために集まっています。敬老者を祝うわたしたちも、敬老者の生きたお手本から自分の振る舞いを見つめ直したいと思います。
イエスはご自分の死と復活を予告しました。自分に死んで、新しい

命に生きることが、救いのためにどうしても必要だと考えておられます。イエスが必要だと考えておられることに、わたしたちが口を挟むことがどうしてできるでしょうか。
それなのに、つい口を挟んでしまうのです。「すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。」（8・32）イエスには、ペトロの思い通りのイエスであって欲しい。ペトロの勇み足がここに現れています。「あなたは、メシアです」と、気力も体力も充実している時に表明した信仰は、それ自体は素晴らしかったのですが、歳を重ねた信仰、火で精錬された信仰にはたどり着いていなかったのです。
イエスは、思い通りにならない道、すなわち十字架の道を通って、救いを完成しました。「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。」（8・35）わたしたちも、思い通りにならない道を通って初めて、意味深い信仰告白ができるようになるのだと思います。
敬老者が生き方で示す信仰に謙虚に耳を傾け、共にイエスに従って歩む道を見つめ直しましょう。思い通りにならないことを数多く通り抜けた先に、輝く信仰者の生き方があります。

年間第 25 主日(マルコ 9:30-37)

年間第 25 主日(マルコ 9:30-37)

イエスは人類を一人の子供として抱き上げた

先週、婦人会のミニバレーの練習のときに、日曜日の説教って、案外よく聞いているんだなぁというのがよく分かりました。大変失礼な話ですが、みなさんがどれくらい説教を聞いているのか、半信半疑だったのです。
ところが、火曜日の練習だったか、わたしの動きがだんだん緩慢になってきて、目の前に落ちようとしているボールを拾えなかったり、自分が拾いに行くべき時に人に拾いに行かせたりしていたら、「集中力がなくなってきたぞぉ」と味方からはっぱかけられました。
同じようなミスを続けていたところ、相手コートのお母さんたちからも「ほら神父さまは、もう集中力がないぞ～」と冷やかされまして、説教はほとんどの人が最初から聞いているんだと、痛いほど分かりました。
先週の出来事で、説教で話したことはいつか浜串の信者さんたちの中で実を結ぶのと思えるようになりました。
今週の福音朗読で、イエスは「いちばん偉い者」について、弟子たちが考えもしなかったことを取り上げます。弟子たちは、「だれがいちばん偉いか」と議論し合っていたのですが、きっと弟子たちが考えていたのは、力のあるなしとか、貢献したかしなかったかとか、イエスの質問に何回適切に答えたか、そんな優劣ばかり話題にしていたのでしょう。
そうした弟子たちの愚かな議論に、イエスは釘を刺します。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」（9・35）さらに驚いたことに、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われました。「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」（9・37）
おそらく子供を連れた家族とかが、イエスの近くにいたのでしょう。ですが弟子たちの目には、目の前の子供たちなどまったく気付かなかったのかもしれません。出世、社会的地位、周りからの評価。そうしたことで頭はいっぱいで、イエスが見ているものが見えていなかったのでしょう。
イエスははっきりと、ご自分が見ているものを指し示します。それは子供たち、つまり無力で助けを必要としている者たちです。そして一人の子供を抱き上げることで、無力で助けを必要としている者を最優先に考えて動く者が、イエスに評価される者、イエスをお遣わしになった父なる神に評価されるのだと諭したのです。
わたしは、イエスが子供を抱き上げる姿には、隠された意味があると思います。子供に代表される無力で助けを必要としている者とは、人類全体を言い表していると思うのです。
血管が 1 cm 詰まっただけでその後の人生がすっかり変わってしまう。ほ

んの一瞬よそ見をしただけで、自分の身を守ることができない。そんなあわれな人間を、イエスは抱き上げるために人となり、この世界においでになりました。罪な生活を断ち切ることができない、自分の罪も、他人の罪もゆるして清めることができない弱い人間を抱き上げる姿を、一人の子供を通して示しているのではないでしょうか。
イエスは、人類という一人の子供を抱き上げるために、この世においでになりました。その生涯は、「すべての人の後になり、すべての人に仕える」生き方でした。後をついて行きやすい人の後だけたどったのではありません。すべての人の後になりました。仕えやすい人にだけ仕えたのではありません。なぜこんな人間に仕えなければならないのかと理解に苦しむような人にも、イエスは仕えたのです。
イエスの考える偉大さが、ここに詰め込まれています。上に立つ偉大さは、限られた人にしか手本になりません。しかし仕えることで発揮される偉大さは、すべての人に道が開かれています。イエスは、すべての人の模範となるために、仕える道を通して偉大な道を示そうとしたのです。
9 月の第 4 日曜日は、日本の教会では「世界難民移住移動者の日」に当てられています。自分の国を追われた人、理由があって自分の国を離れた人、さまざまな理由で滞在している人がいます。
このような人たちに手を差し伸べることは、弱く助けを必要としている人に仕えることになります。わたしたちが今日おささげした献金は、広く日本に滞在している難民移住移動者のために用いられます。これは、わたしたちにできることの一つです。
ほかにも、わたしたちにできること、わたしたちが考えておくことがまだあると思います。弟子たちが考えていたような、「だれがいちばん偉いだろうか」であくせくするのではなく、どんな場所でも、一人の子供、弱く助けを必要としている人を優先して考える活動を考えましょう。個人として、評議会として、小教区として、いろんな立場で、イエスが取った姿に倣っているだろうか。ときおり振り返る必要があると思います。
最後に、来月 10 月からの大きな動きについてお知らせしたいと思います。教皇ベネディクト 16 世は、昨年 10 月 17 日に、「信仰の門」という教令を発布して、今年 10 月 11 日から来年 11 月 24 日までを「信仰年」と定め、信仰を深める取り組みをし、信仰の力のすばらしさをすべての信者に理解してもらうよう呼びかけておられます。よきおとずれの 10 月号にも、信仰年について大司教さまが詳しく説明しておられます。
わたしたちはこれからの一年間、教えをもう一度学び直し、理解を深めるようにしましょう。カトリックの信仰を持っている信者はこんなにすばらしい生き方ができると、信仰年の間に証しができるカトリック信者に成長していきましょう。その中でも特に「すべての人の後になり、すべての人に仕える」生き方は、カトリック信者が何をいちばん尊い生き方と信じているか、人々に示す確かな方法になると思います。

年間第 26 主日(マルコ 9:38-43,45,47-48)

年間第 26 主日(マルコ 9:38-43,45,47-48)

イエスとの繋がりを壊すものを切り捨てる

まずは今年の司祭団ソフトボール大会の結果報告です。優勝は長崎市内チームで、乱打戦を打ち勝ったという感じでした。当日はバックネットからセンターに向けて一日中強い風が吹いていました。到着してすぐ、ボールが高く上がると何かが起こりそうだなぁと思いました。
中田神父は、去年に引き続き修道会連合チームにレンタルに出され、五島チームで試合に出ることは叶いませんでした。これがあとで思わぬ結果を生むことになるのですが、「まぁ、奉公に出された場所で一生懸命プレーするしかない」そう思って試合に臨んだのです。
大会の始球式は、大司教さまが務めました。写真を玄関に貼り付けていますが、大司教さまが投げたボールはホームベースまでの半分も届きませんで、地面に落ちたあとコロコロと、キャッチャーのところへ転がっていきました。それを見た司祭たちからいっせいに「やり直し！」という厳しい声が掛かり、始球式をやり直して試合が始まりました。
最初の試合、長崎市内チームと五島チームが対戦しました。わたしは五島チームで試合に出られないので三塁コーチャーを引き受けました。たしか 25 対 17 で、長崎チームに負けました。
長崎チームは例年にない強打者揃いで、結局大会を終えた時には岡神父さんが３本、山添神父さんが３本、他にも１本打った神父さんが２人いて、これでは打ち合いで勝てないのも当たり前です。岡神父さんの勢いと言ったらもう・・・分かりますよね。
わたしは修道会連合チームで二試合に出ました。なぜかバッティングが調子良くて、ホームラン２本、ヒット２本、８打数４安打の大当たりでした。ホームラン２本のうち１本は、岡神父さんから打ってやったので、かなり気持ちよかったです。「あ～、説教で絶対言われそう」と言っていましたが、当然です。
夕食の時の懇親会で、五島チームのある司祭から「お前をよそに出さなきゃよかった」と声を掛けてもらいましたが、わたしからそれを言うわけにはいかないし、今日打てても明日打てるとは限りませんから、そう言ってもらえるだけでもありがたいことです。
さて今週の福音朗読で、今この年齢になってみて「あー、そう理解したほうが適切だよなぁ」と気がついた部分がありました。それは 9 章 43 節以下の部分です。
「もし片方の手があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。」（9・43）
「もし片方の足があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったままで地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。」（9・45）
「もし片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出しなさい。両方

の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい。」（9・47）
イエスさまがこの厳しい警告を実際に語ったのだとしたら、わたしたちはできるだけ素直に言葉の意味を考える必要があります。しかし、手や足を切り捨てるとか目をえぐり出すというのを文字通りに取るのは大変困難です。何か、手や足、目に該当するものを切り捨てる、えぐり出すというふうに考えたほうがイエスの考えていることに近いのではないでしょうか。
では、イエスが手とか足、目と言い表したものは何だったのでしょうか。イエスから切り捨ててしまいなさいと言われてもなかなか切り捨てることのできないものとは何でしょうか。それはわたしたちをあるべき姿から引き離そうとする「誘惑」ではないでしょうか。
たとえば、今日済ませなければならないものを明日に回すこと。それは誘惑のなせるわざです。わざわざ近づかなくてもよいものに、近づいてみること。あえて失わなくてもよいものを失って後悔すること。誘惑する材料はたくさんあって、それらはしばしば切り捨ててしまわなければ離れることはできないのです。誘惑となるものを近くに置いていながら、誘惑に陥らないように努力するのは時間と労力の無駄です。
さて誘惑について、福音書の別の箇所にはとても興味深いことが書かれています。イエスは誘惑に陥らないようにとマタイ・マルコ・ルカ福音書これら共観福音書のいずれでも仰っているのですが、そのどれもが、誘惑に陥らないように祈ることを教えています。
「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。」（マルコ 14・38）
生活の中にたえず祈りが織り込まれている人は、誘惑に陥らずに済むと、イエスは言っておられるのです。これはよくよく肝に銘じたいと思います。
切れ目なく繋がっているわたしたちの身体。身体に関して言えば、その一部分を切り捨ててしまうことほど辛く耐えがたいことはないでしょう。イエスとわたしたちの繋がり、信仰生活と社会生活の繋がりも、本来は切れ目なく一体であるはずです。
つまずきや誘惑は自分や隣人をイエスとの繋がりから断ち切らせるものです。イエスは、ご自分との繋がりを危うくするものは、手や足を切り捨ててしまうくらいの決意でしりぞけるように命じます。つまずきとなるもの、また誘惑ときっぱり縁を切る。切り捨ててしまう。そうやってイエスとの繋がりをいつも良い状態に保ちましょう。

年間第 27 主日(マルコ 10:2-16)

年間第 27 主日(マルコ 10:2-16)

一つ一つが神に結び合わされている

今日は上五島地区連合婦人会主催のミニバレー大会です。選手の皆さんはこれまでケガに注意しながら練習を積み重ね、準備してきましたので、ぜひ練習の成果を発揮しましょう。
お父さんたち、子供たち、また応援に参加できる皆さんは、選手の皆さんがふだん通りの力を発揮できるように、精一杯応援をお願いします。
対戦は、福見・高井旅チームがＡブロックの第３試合と第６試合、福見チームがＢブロックの第４試合と第８試合となっています。
わたしは両方のチームの練習に参加しましたが、両方ともそれぞれ特色のあるチームで、ふだん通りの力を発揮すれば、きっと好成績を残せるのではないかなぁと感じております。わたしも、福見・高井旅チームのユニフォームを支給されていますので、参加して頑張りたいと思います。
今週の福音朗読は、離縁についての教えです。夫が妻を去らせる、離縁することについて、ファリサイ派の人々はイエスを問い詰めようとしました。ファリサイ派の人々は、結婚した夫婦をどのように守り育てるかについてはまったく興味がなくて、夫婦の中でのいちばん悩ましい問題さえも、イエスの言葉尻を捉える材料にしか考えていなかったのです。
夫婦にのしかかる重い課題について、イエスの次の言葉がすべて答えてくださっていると思います。「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」（10・9）結婚は、人間がある一組の男女を結び合わせたものではなく、神が結び合わせたもので、それを人は離してはならない。これがすべての答えです。
人間が始めた決まり事であれば、将来人間の都合で変わるかもしれません。けれども結婚は、神が男女を結び合わせてくださった。これが出来事の始まりですから、神が始めてくださったことを引き裂くことはできないということです。
考えてみると、神が結び合わせてくださったものというのは、結婚だけに限らないと思います。わたしたちの身の回りのことは、神が結び合わせてくださったと言えるものがたくさんあります。わたしたちの信仰生活に深く関わっている七つの秘跡はすべて、神が結び合わせてくださったものではないでしょうか。
洗礼の水は、わたしたちを神の子とするために、わたしたちが神の永遠の命に結び合わされる秘跡です。堅信の秘跡は、洗礼を受けた人が、聖霊の七つのたまものに結び合わされて、大人の信者となる秘跡です。聖体の秘跡は、イエスがパンとぶどう酒のもとに実際にとどまって、わたしたちとイエス・キリストとを結び合わせる秘跡です。他の３つの秘跡も、同じように説明を加えることができます。
こうして神は、わたしたちの生活の中に、神が結び合わせてくださったものを、たくさん用意してくださっています。それら神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。これが、今日イエスの言い

たいことではないでしょうか。
洗礼の恵みをいただいている人が、洗礼の恵みを忘れたような生活をしている。堅信の恵みをいただいていながら、証しする人、信仰に反する事柄と戦うことを放棄している。聖体の恵みをいただける環境にありながら、行けば行けるけれどもミサに行かないでいる。それらはすべて、神が結び合わせてくださったものを、人間が引き離している行為ではないでしょうか。
わたしたちの身近な所で、神が結び合わせてくださったものを、人が引き離そうとする危険が潜んでいます。結婚に関わる重大な局面だけが、神が結び合わせてくださったものを引き離そうとする危険な場面ではないのです。身近な場面から、神が結び合わせてくださったものを守り育てるように、十分気を配る必要があります。
10 月のロザリオの月、子供たちの参加がすっかり減ってしまいました。聞く所によるとそこにいても、隠れて出て来ないという話です。そんな中で、５月の聖母月も、今月のロザリオの月も、ずっと出席を欠かさない子供がいます。ありがたいことです。こういう子供を見ていると、神がお祈りの楽しさと結び合わせてくださったその子を、人が離してはいけない。絶対に守り育ててあげなければいけないと思います。
わたしたちの身の回りのことで、神が結び合わせてくださったものをわたしたちは大切に守り育てているでしょうか。人の都合で、あるいはだれかのせいにして、引き離そうとしてはいないでしょうか。
信仰に関わる事柄は、どれも神が結び合わせてくださったものです。その絆を守り育てるために、今週一週間振り返りの時間を持ちましょう。ミサの中で、すべてを結び合わせてくださる恵み深い神に、感謝の気持ちをささげましょう。

年間第 28 主日(マルコ 10:17-30)

年間第 28 主日（マルコ 10:17-30）

天に富を積むために

誰でも、もう一段上の状態、さらに上のレベルに進めたらなぁと思うことがあるでしょう。スポーツでは今まさに日本のプロ野球もアメリカのメジャーリーグも大詰めを迎えていますが、打率が３割ちょうどの選手は、３割３分打ちたいという気持ちは必ず持っていると思います。
また、仕事で考えれば年収が 300 万円の人は、400 万円にアップするともっといいなぁ、そのために課長か係長か部長になって、がんばりたいなぁと思っている人もいるでしょう。
学問の世界では、今年のノーベル賞医学・生理学賞を京都大学の教授が受賞しましたが、あくまでこの教授の研究は基礎研究で、まだ再生医療で患者を救ったわけではありません。当然今の研究を、患者を救うところまで進めたいなぁと思っていることでしょう。
いろんな立場の人が、自分の今の立ち位置から、さらに上を目指していると思います。ちなみにわたしはどうかと言いますと、たとえば何かの役職、上五島地区の地区長になりたいとか、あるいはどこかの教区の教区長になりたいとか、そういうことは目指しておりません。そんなことではなく、よりイエスの役に立つためには、さらに何をすればよいのだろうか、それはよく考えます。
そこで今週の福音朗読に登場した人物に繋がっていきます。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」（10・17）彼は、「何をすればよいでしょうか」と尋ねました。続くイエスとのやり取りで明らかなように、彼は周囲から十分評価されるだけの生活を維持してきたのです。さらにその上に、何を積み重ねたらよいか、知りたかったのでした。
イエスはまず、「神おひとりのほかに、善い者はだれもいない」（10・18）と言ってこの人の目を神に向かわせ、その上で十戒を思い出させる言葉を投げかけます。「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」（10・19）
それに対してこの人は「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と答えたのです。どんな心境だったのでしょうか。１つは、それらを十分守ってきたという自負心があったのかもしれません。もう１つは、幸いに、それら十戒の掟を子供の時から守ってきて、ほっとしたのかもしれません。でもさらに、何かを積み上げて「永遠の命」を確実なものとしたい。それがこの人の今の望みだったのだと思います。
イエスは何と答えたのでしょうか。ひとことで言うと、「何かを積み上げて永遠の命を確かなものとするのではない。むしろ、いっさいを捨てて、永遠の命を確かなものとするのだ」と答えたのだと思います。
「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。『あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そ

うすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。』」（10・21）
たしかに、彼は金持ちでした。「その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである」（10・22）とあります。もちろんイエスはこの人が金持ちだったから持ち物を売り払い云々と言ったわけですが、金持ちの話に終わらせてしまうと、わたしたちの多くは、自分とは関係のない話と受け取るのではないでしょうか。
そこで、今週の出来事がお一人お一人に必ず関係があることを理解するために、もう一度整理しておきたいのです。イエスは彼に、「さらにその上に何かを積み重ねるのではなく、いっさいを捨てることで、永遠の命に近づくのだ」と言いたかったのです。
何が求められているか。福音朗読に登場した金持ちは財産を売り払うことでしょうし、スポーツ選手はこれまでの技術、経験をいったん横に置いてまったくのゼロから次の高みを目指すことです。より上の年収を望む人も、今の状態に満足する気持ちをいったん捨てる必要があり、基礎研究で名声を手に入れた教授の方も、この興奮から離れて、また一から出直して目標に向かっていく。そうして目指すものが手に入るのではないでしょうか。
わたしも、よりイエスの役に立つ道具になるために、今まで書いてきたもの、今まで話してきたこと、この場面ではこのように接してあげるとよいといったような経験、そうしたものをすべて手放して、何度も何度も自分をゼロの状態にしていく。そうすることでもう一つ高い次元で、イエスさまのお役に立てるのかなぁと思っています。
皆さまにとって、「持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」というイエスの呼びかけは、どのように当てはまってくるのでしょうか。病気をして、これまで自分の宝物と思っていた健康を失ってしまった。これも、持っている物を売り払うことになるかもしれません。健康を失って、それでもイエスへの信仰に留まることができるなら、私たちは天に富を積むことになるのです。
事情があって、慣れ親しんだ仕事を取り上げられることがあるかも知れません。職場内の配置転換で、不本意な思いをするかもしれません。そうした時が、あなたにとって「持っている物を売り払う」体験になるかもしれません。その時になお、イエスへの信頼を保って前を向けるなら、天に富を積むことになるでしょう。
ペトロは、「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました」（10・28）と胸を張って言いましたが、彼もまた、十字架に向かうイエスを前に三度「そんな人は知らない」と言って、一番弟子であるという自負心を打ち砕かれ、打ち砕かれてイエスの羊を任せることのできる本当の弟子に変えられたのでした。
金持ちの出来事は、だれもが通らなければならない道です。わたしにとって、持っている物を売り払い、だれかにその恩恵をすべて譲るということはどういうことだろうと、じっくり考えてみましょう。ただで受けた物をすべてただで与える時、わたしたちはさらなる高みに招かれるのです。

年間第 29 主日(マルコ 10:35-45)

報いとは関係なく、困難を受けて立つ(2009/10/18)

昨日から今日にかけて、長崎カトリック神学院では１日体験入学が計画され、浜串小教区からは６年生を１人鯛ノ浦港から送りました。同じ体験入学に、別の小教区から３人の６年生が参加していました。
わたしは自分の小教区の子供に、「よく見て、いっぱい学んできなさい。帰ってきたら感想文を書いてもらうから。原稿用紙 100 枚分ね」と言ったんです。いつもそうやってからかわれているので、うちの子供は「またまたぁ」という顔をしていましたが、そばにいた別の６年生は、顔が真っ青になりまして、「浜串教会の子供じゃなくてよかったぁ」と言っていました。どうやらわたしの冗談はセンスが悪いようです。
子供たちを乗せた船が鯛ノ浦港を離れてから、長崎カトリック神学院に、「鯛ノ浦港から４人送りました」と伝えますと、今年は五島からの参加者は浜串ともう一つの教会の、４人だけなのだと聞きました。世界宣教の日を今週迎えましたが、世界中に神のことばを伝えなければならないのに、五島から体験入学の生徒が４人しかいないというのは不安だなぁと思いました。
さて今週の福音朗読は、ヤコブとヨハネが自分たちの栄誉になるような約束を取り付けようとする場面から始まっています。今週の朗読の置かれた状況を確認すると、イエスは十二人の弟子を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し、その後に今日の出来事が続いています。
イエスは自分の身に起こる出来事をはっきりお話しになりました。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」（10・33-34）
この時、イエスの死と復活の予告はすでに三度目になっていました。ですから、十二人の弟子たちは、これはもう苦難は避けられないということを理解していたはずです。師であるイエスが苦しんで死ぬことになれば、わたしたちにも影響が及ぶのは必至だとうすうす感じていたと思われます。
そんな中で、ヤコブとヨハネがイエスに約束を取り付けようとしているのです。想像を絶するような苦しみが避けられないのだったら、そのあとの栄誉ぐらいなければやってられない。そういう気持ちだったかも知れません。
しかも、イエスはご自身の苦しみと死のあとに、復活が用意されていることをはっきり言っています。弟子たちは、イエスの苦しみの後に来る輝かしい復活を、苦しみの報いととらえたのでしょう。後に続くわたしたちにも、苦しみのあとの報いを約束してもらおうではないか。だいたいこういったところがヤコブとヨハネの願いの根拠だったのでしょう。

２人の願いに、イエスはご自分の右に座る栄誉、左に座る栄誉を約束しませんでした。約束しなかったわけは２つあるでしょう。１つは、ご自分の復活の出来事は、苦しみの報いではないからです。もう１つは、苦しみは報いがなければ無意味なのではなくて、苦しみそのものに意味があることを知らせたかったからです。
それぞれ、考えてみましょう。まず、イエスは死んで、そののちに復活するお方です。どのような死に方をしたにせよ、イエスは復活するお方です。死に勝利して、永遠の命を持っておられることを宣言するお方だからです。ですからイエスの復活は、苦しんだことの報いではないのです。苦しみは、苦しみそのものに意味と価値を見いだす必要があります。
次に、弟子たちは報いがあるのは当然だと考えています。苦しんだだけで終わるというのは、損をしていると考えているのかも知れません。自分たちにも苦しみが及びそうな予感がしています。苦しんだだけで終わりなのだろうか。師匠であるイエスのために苦しみを受けるのだから、イエスからその報いを受けても悪くないではないか。そう考えての行動だったのかも知れません。
けれども、イエスは右と左の席を約束しませんでした。約束がなかったことで、苦しみは報いとは直接結びつかないのだということが分かってきました。イエスは問いかけます。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」（38 節）苦しみを苦しみとして、そのまま受け入れることができるか。イエスは知りたかったのです。
ヤコブとヨハネは、「できます」と答えました。これはイエスが期待していた通りの返事ではありません。ヤコブとヨハネは、右と左の席という報いを約束してもらいたかったので、「できません」とは言えなかったのです。引くに引けなくて、「できます」と言ったと考えた方がよいでしょう。
それは例えて言えば、弟子をいっさい取ろうとしない先生に弟子入りしたくて、「どんなことでもやります」と言っているようなものです。その人は、弟子になれるという報いを当てにして、「どんなことでもやります」と言っているだけなのです。報いとは無関係に、どんなことでもやりますと答えているわけではないのです。
ヤコブとヨハネもそうでした。自分たちも何かしら栄誉を受ける当てがあれば、いくらでも苦しみを受け入れよう。報いのない苦しみは、考えられなかったのです。やはり、報いを横に置いて困難に立ち向かおうとしないのが、人間の正直な姿かも知れません。
今日は世界宣教の日に当たっていますが、報いを横に置いて、報いのことなどいっさい気にせず、宣教に目を向ける人になりたいと思います。わたしたちキリスト者がいるその場所が、宣教の場所です。報いを気にしないで、報われないことを恐れないで、困難に立ち向かう力と勇気を、イエスに願いたいと思います。

年間第 30 主日（マルコ 10:46-52）

「行きなさい」と送り出すイエスに従う

水曜日に、浜串教会の中学２年生が堅信式前の試験を受けました。筆記試験と祈りの口頭試験です。筆記試験は括弧の穴埋め問題で、108 問設定されていまして、１問につき 1.5 点で満点は 150 点、祈りの試験は範囲が 10 問あって、その中から５問をくじで引いて答えます。これが 50 点。全体で、200 点満点、合格点は 150 点となっていました。
筆記試験は 108 問ありますから、たとえ８問しくじっても 150 点満点をもらえます。この少しの余裕で、まぁ中にはギリギリ合格する人もいるのかなぁと思っていました。一週間前に試験問題を配って勉強してこいと言っておいたのですが、わたしは正直、「勉強してこないのもいるだろうなぁ。そいつは主任司祭の憐れみで救ってあげないといけないかなぁ」という覚悟はあったのです。
ところが、いざ蓋を開けますと、みんな猛烈に勉強したらしく、堂々と自分たちの力で合格を勝ち取ってしまいました。わたしが憐れみをかけて、恩を売るという、そういう計画は泡と消えました。残念であります。今年の中学２年生は、勉強すればちゃんと結果を出せる生徒のようです。
今週の福音朗読は、盲人バルティマイのいやしの物語です。マルコ福音記者は、バルティマイの目をどうやって見えるようにしたか、その具体的なことにはあまり関心がなく、むしろイエスと出会うまでの苦悩に多くの表現を割いています。
彼は道端に座り、叫んで、イエスに見つけてもらおうとしています。多くの人々が、バルティマイを黙らせようとしました。これは、バルティマイがイエスに出会うために乗り越えなければならない壁となります。イエスと自分が出会うためには、何としてもイエスに見つけてもらわなければなりません。それで、バルティマイは叫び続けました。
イエスは彼にどのように答えてくださったのでしょうか。イエスは彼を見つけて、ご自分のもとへ呼び、そして最後には「行きなさい」と送り出します。このイエスの一連の動きは、バルティマイだけでなく、わたしたちすべてに深く関わっています。
まずはバルティマイのその後を見届けましょう。彼は目が見えるようになりたいと願いました。イエスは、奇跡を起こすことばさえも言わずに奇跡を行い、「行きなさい」と声を掛けたのです。つまりそれは、いやしのことばよりも、「行きなさい」ということばのほうが、もっと大切な意味を含んでいるということではないでしょうか。
バルティマイは、願い通りすぐに見えるようになりました。もし、見えることだけで彼が満足したなら、次の言葉は物語に加えられなかったことでしょう。「なお道を進まれるイエスに従った。」（10・52）
バルティマイは見えるようになったとき、イエスに従うべきだと理解したのです。バルティマイにとって、見えるようになったのはほんの始まりで、イエスに従ってこれからを生きることのほうが、もっと重大なこ

とだったのです。
ここに、今週わたしたちが学ぶべき点があると思います。悩みを抱え、苦悩しているすべての人に、イエスは足を止め、その人を見つけてくださいます。そしてご自分のもとへ呼び、最後には「行きなさい」と声を掛けてくださいます。
どこへ行くのか。それはバルティマイと同じ道です。バルティマイは「なお道を進むイエスに従った」のでした。イエスがこれから進む道、それは、エルサレムへの道です。つまり、十字架にかかって命をささげ、救いを完成される道のりです。
ですから、イエスに見つけてもらい、「行きなさい」と送り出された人は皆、救いを完成させるための道を歩き始めることになります。バラバラに、好き勝手に歩くのではなく、その速さも、いつから歩き始めるかも人それぞれですが、皆、イエスが歩んだ救いの完成への道を、歩き始めるのです。それも、イエスのあとに従って歩むのです。
堅信式を受ける中学２年生の皆さんは、今年は 11 月 11 日に、青方教会に集まって堅信の秘跡を受けます。皆呼び集められ、司教さまに秘跡を授けてもらって、「行きましょう、主の平和のうちに」という呼び声で送り出されます。実はこの日一日はイエスに声を掛けてもらい、なお道を進まれるイエスに従う一日なのです。堅信の秘跡を受けて、さらに歩みを確かなものにして、イエスに従う日なのです。
結婚した人たち、皆さんは教会に呼び集められ、神に結び合わせてもらい、そして祝福のうちに送り出されました。その日から、なお道を歩まれるイエスに従う日を積み重ねてきています。修道者も司祭も、だれもがイエスに呼ばれ、「行きなさい」と送り出されて今を生きているのです。
振り返って、わたしたちは本当に、「なお道を進まれるイエスに」従っているでしょうか。堅信式や、結婚式や、誓願式叙階式で、わたしたちの目は以前よりも見えるようになり、イエスの歩む道を歩み続けているはずなのです。
もしかしたらある人は、歩みを止め、遠ざかっていくイエスの姿を見ても追いつこうとせず、道を逸れようとしているかもしれません。それでもイエスは、またきっといつかあなたを見つけ出し、ご自分のもとに呼び、「行きなさい」と声を掛けてくださいます。
イエスは今日、わたしたち一人一人に、「何をして欲しいのか」と尋ねます。本当に今必要なことを願い、イエスに従ってこれからの道を歩み続けることができるように、ミサの中で声を上げることにしましょう。

年間第 31 主日(マルコ 12:28b-34)

年間第 31 主日(マルコ 12:28b-34)

隣人はいつも自分の目の前にいる

最近一人のシスターを上五島病院に見舞っています。浜串小教区では名前を言っても良いと思いますが、〇〇〇〇シスターです。足が弱くなって入院されたのかなぁと思っています。詳しいことは分かりません。
この前見舞いに行った時は、ちょうどリハビリの時間でした。戻るまで待とうかなぁと思ったのですが、看護士のかたが「リハビリ室は一階です。どうぞ」と言うので、リハビリ室に行ってご聖体を授けることにしました。皆さんは見たことがないかも知れませんが、病院服を着て、指示通りのリハビリをしていました。たくさん話をしたわけではないのですが、一言ひとことが、心にしみこんでくるようでした。
病人見舞いをしていると、心が洗われる時があります。シスターのお見舞いも、その一人です。本来なら、修道服を着て修道院で暮らしているはずなのに、今病院で、支給された服を着て、一緒に過ごしたりしないたくさんの知らない人と一緒に暮らしている。もうそれだけで、シスター偉いなぁと思うし、謙虚な気持ちになるのです。
わたしは病人訪問と、隣人愛について深く考えさせられました。まさに今日の福音朗読です。律法学者がイエスに尋ねます。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」（12・28）それに対してイエスは、次のように答えました。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」（12・30-31）
イエスの答えは、第一の掟と第二の掟として示されましたが、その答えを聞いた律法学者は、「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」（12・32-33）と答えました。第一の掟と第二の掟をくっつけて理解したのです。そして、イエスは律法学者の返事は適切であると褒めました。
律法学者が答えたように、第一の掟と第二の掟は、くっつけて理解するのが適切な理解なのでしょう。つまり、神を愛するということと隣人を自分のように愛するということとは、いわば紙の表と裏のように、切り離せないものなのです。
病院に入院しているシスターがどんな過ごし方をしているか、わたしは見たわけではないのですが、隣人を自分のように愛する日々を過ごしているのだろうなぁと思っています。シスターと同じ部屋にいる人は、実際には知らない人です。けれども、シスターはその相部屋の人を、隣人として受け入れ、共に病気の苦しみを耐え、嬉しいことがあれば一緒に

喜んであげ、修道院にいれば経験しないで済むような会話を耳にしたり態度を目にしたり、忍耐しなければならないことはそれはもうたくさんあって、それらを黙って、忍耐しておられるのではないかと思います。その姿は、「隣人を、自分のように愛しなさい」というイエスの招きに、全身全霊で答えようとするものだと感じました。
わたしが仮に入院することになれば、こうはいかないと思います。どうして相部屋に入院しなければならないのだと不平を言ったり、どうして周りの人のどうでもよいような会話を聞かなきゃならないんだとこぼしたり、生活上のいろんな制約を嘆いたり、とても隣人を自分のように愛するといったお手本にはなれないと思うのです。
シスターは違います。「ご聖体を授けに来たよ。お祈りして拝領しような」と言ったら喜んで、わたしが祈りを唱える箇所までシスターが唱えて祈ってくれました。聖体拝領のこの日をどんなに待っていたか。それはちょっとの間の訪問でも痛いほど分かります。「あー今日はご聖体を運んできてくれる日だったか」という人と、ご聖体を一日千秋の思いで待っている人は、それは一緒に過ごしている短い間だけでも分かります。神さまを肉眼で見ることはできないわけですが、隣人を心から受け入れて愛する人は、隣人の向こうに、神さまを見ている人だと思います。入院生活という思い通りにいかない時間にも、相部屋になった隣人を愛せる人は、当然元気になってからも隣人を愛せる人でしょうし、病の中で隣人の向こうに神さまを見ることのできる人は、普段の生活ではなおさら、隣人を愛することで神を深く愛せる人なのではないでしょうか。
隣人を自分のように愛すること。そのチャンスは遠い場所で起こるのではありません。目の前で、自分のそばで起こります。隣人を愛することと神を愛することとは一体です。隣人を深く愛する人は、すでに神を深く愛しているのです。
イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは、神の国から遠くない」と言われました。わたしたちも、「あなたは神の国から遠くない」と言われたいものです。その近道は、生活の中にあります。
頭で考えるのではありません。生活の中で、実行して理解するものです。これが正解というものは無いと思いますが、「神の国から遠くない」という生活はあるはずです。その、「遠くない生活」「限りなく近い生活」を喜んで生きていくことができるように、導きを願いましょう。

年間第 32 主日(マルコ 12:38-44)

主日の福音 12/11/11(No.618)

年間第 32 主日(マルコ 12:38-44)

どれだけ行いに愛を込めることができるか

先週からようやく、来年１月の司祭団マラソン大会のトレーニングを開始しました。46 歳にもなると、練習を開始する決心をすることがまず大変です。「外は寒いだろうなぁ」と思っただけで練習を明日に延ばしてしまいます。実際外に出てみると思ったほど寒くはないのですが。

浜串教会バス停からマリアさまの手前まで６往復しようと思って走り始めますが、最初はその６往復ができないのです。６往復で８キロ走ったことになるのですが、頭が「６往復し終わった時には相当疲れるだろうなぁ」と考えてしまうと、４往復５往復した頃に「いやー、今日はよそう。次回あらためて６往復しよう」と、脳が諦めてしまうのです。

大会当日は 10 キロのコースが予定されていますから、８キロくらいはふだんからどんな状態であっても走れないと結果は出せません。「今日はやめとこうぜ」と誘惑する脳を何とかだましだまし、練習を積み上げようとしている所です。

わたしはもともと運動音痴なので、この司祭団マラソンくらいしか安定して良い結果を出せるスポーツがありません。まぐれで結果の出るスポーツはあるかも知れませんが、マラソンは、練習さえ積めばきっちり結果を出すことができます。

ですから、この司祭団マラソン大会に賭ける思いは大きいのです。それは、今週の福音朗読でイエスがやもめの献金を見て仰った言葉に通じます。「皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」（12・44）

朗読された福音書に登場する大勢の金持ちと貧しいやもめ、両方の献金にどれほど開きがあったか、そのことも記されています。「皆は有り余る中から入れた」ここには、お金をいくらぐらい入れたかが描かれていませんが、それは裏を返せば、いくらにもならないお金だったということです。手放しても気にならないほど、微々たる額だったのです。

これに対し、貧しいやもめが手放したお金は、覚悟を決めてささげたお金でした。「自分の持っている物をすべて、生活費を全部」献金箱に入れた。この世で生きるためのすべをささげ、神にすべてを頼って今日を生きる。その覚悟をもって、すべてを入れたのです。

マザー・テレサは、愛の行いの心構えとして次のように語りました。「大切なことはどれだけたくさんのことや偉大なことをしたかではなく、どれだけ心を込めてしたかです。」金持ちが投げ入れた献金と、貧しいやもめが入れた生活費全部とでは、どれだけ心を込めてしたかに大きな開きがあります。イエスがとらえていた貧しいやもめの心構えを、マザー・テレサも見事にとらえていたということです。

わたしたちは他にも、この貧しいやもめと同じようにどれだけ心を込めて愛のわざをおこなうことが大切であるか、教えてくれるお手本を持っています。

皆さんは幼きイエスの聖テレジアという聖人をご存じでしょう。彼女は、幼くしてカルメル会という観想修道会に入りましたが、彼女には他にも姉がいまして、そのすべてが修道女になり、しかも１人をのぞいて全員がリジューという土地の同じ修道院に入ったのだそうです。ですから姉たちは目の前で妹の修道生活を見て生活したことになります。

妹テレジアは、亡くなってから 28 年という異例の速さで列聖されました。その時のことを、姉のシスターが「妹がなぜ列聖されるのか分からない」と言ったのだそうです。幼きイエスの聖テレジアの偉大さは、どれだけ神への愛に燃えて修道生活を送ったかを、「右の手のしていることを左の手に知らせない」（マタイ 6・3 参照）ほど、隠れた主にのみ仕えて暮らしたということです。

今週の福音でわたしたちに求められていることは、今の自分に持てる愛情のすべてを込めて、目の前の一つ一つのことを果たしなさいということだと思います。何かの行事に参加するにしても、ある人はあふれんばかりの健康に恵まれています。ある人は、その場に参加するだけで精一杯という人もいます。どんな状態であれ、どれだけ心を込めて愛のわざを行うかが、問われているのではないでしょうか。

今日、午後２時から、浜串小教区の６人の中学生が堅信式に臨みます。堅信の秘跡を受けて、大人の信者の仲間入りをします。準備は、それなりに整えてきたわけですが、本人がどれくらいの思いで、堅信の秘跡を受けたいと願っているのかが大事です。

堅信の秘跡を受けると大人の信者の仲間入りをするのですから、これからカトリック信者として、責任を引き受けるということを意味します。自分の人生を、カトリックの信仰を土台にしてしっかり歩いて行くこと。教会の公の礼拝であるミサに、これからも積極的に参加すること。今週の朗読のように、献金箱に入れる献金も、親から渡されたからそれを投げ入れるのではなくて、この献金が、神の国の完成のためによりよく使われますように、そういう思いを込めてささげること。大人にはそういう姿が期待されています。

また、これからさらに高い教育を受けるために進学し、自分で働き、一緒に生活していく相手を見つけ、自分で国の政治家を選んだりします。教会の教えがもっとよく理解できる人になりたいとか、イエスの教えがより人々に広がっていくお手伝いをしたいとか、そういう気持ちを持って、堅信の秘跡を受けてもらえたらと心から願っています。

大人の信者と言われるには、中学２年生はまだまだ頼りないかもしれません。けれども、堅信式で聖霊の七つのたまものは確実に注がれます。わたしは、聖霊の七つのたまものが注がれた人として、これから彼らの意見に耳を傾け、尊重してあげたいと思います。

堅信を受ける受堅者が、これからの信仰生活、すべてを神に託して前に進む人になれるように、皆さんで一緒に祈ってあげましょう。

年間第 33 主日(マルコ 13:24-32)

主日の福音 12/11/18(No.619)

年間第 33 主日(マルコ 13:24-32)

千年を一日のように過ごす

年間第 33 主日を迎えました。年間の季節は、来週の「王であるキリスト」の週で最後になります。この年間の季節の終わりを利用して、教会は「終末」について考えさせようとしています。
「終末」は、どちらかというと言葉の響きに「終わってしまう」という感じがあります。医療でも「終末医療」と言うと「重い病気の末期で不治と判断されたとき、治療よりも患者の心身の苦痛を和らげ、穏やかに日々を過ごせるように配慮する療養法」という特別な意味になります。
イエスが今週の福音で語ろうとする「終末」は、どのようなものでしょうか。天体に異変が起きて、人の子が大いなる力を栄光を帯びて雲に乗って来ると仰います。その瞬間を想像するのは難しいですが、そこに人々が居合わせた時、どんな態度を取ることになるかは想像できます。２通りの人々、１つは恐れに囚われる人々、もう１つは希望に満ちてその時を迎える人々です。
天地が過ぎ去り、人の子が力と栄光を帯びて現れる。これは、この世のものがすべて意味を持たなくなり、人の子がすべての人にとってすべてとなることを意味しています。ですから、もしもこれまでの生活がこの世に頼り切って、神の子イエスへの信頼を持たずに生きていたなら、終末のその日がやって来ると、恐れに囚われることになるでしょう。
一方、この世はいつか過ぎ去ると知って、過ぎ去らないもの、神の子イエスへの信仰に生きてきた人々にとっては、この世のすべてが過ぎ去って神の子イエスがすべてとなったその時は、希望に満ちた場面となるはずです。わたしたちは、この世の終わり、終末がいつになるか分からなくても、それがいつやって来ても今の暮らし方次第で恐れおののく日になるのか、希望に満ちて迎えることになるのかが決まってくるわけです。
そうであるなら、終末を考える場合、それがいつになるのかを推理するよりも、今をどのように過ごすかのほうがよほど大切であるということが分かってきます。終末は千年後かもしれませんし、すぐそこまで来ているのかもしれません。
いずれにしても、わたしたちが今を、過ぎ去るこの世に絶対の信頼を置くのではなく、決して過ぎ去らない神の子イエスへの信仰に土台を置いて生きる。この生き方さえ変えなければ、恐れるものは何も無いのです。
では、神への信頼を置いて生きる姿を、もう少し具体的に考えてみましょう。先週中学２年生の６人は、堅信の秘跡を受けました。大司教さまの前に１人ずつ出て、聖香油を額に塗ってもらい、「主の平和」と肩をポンと叩いてもらったのを覚えているでしょう。
ちなみに、昔の堅振の秘跡では、「主の平和」と声を掛ける時は、司教さまが受堅者の頬を平手打ちしていたそうです。強い信仰を持っているかどうかを確かめる儀式だったのかもしれません。
わたしは、この堅信の秘跡を受けた１日のような過ごし方を、毎日の生

活の中で繰り返して欲しいと思っています。大司教さまに毎日会いに行くという意味ではなくて、大司教さまを迎えるために、朝からどんな過ごし方をしただろうか、１時間前にはどんな気持ちで待っただろうか、ミサの間は、どんな心で過ごしただろうか。実際に秘跡を受けてから、どれくらいの喜びを感じただろうか。そんなことを思い出して、毎日の生活に活かして欲しいのです。
堅信式のミサの時、皆さんは今までの中でいちばん気を引き締めてミサに参加したはずです。堅信式のミサでご聖体拝領をした時、いちばん緊張して拝領したはずです。その気持ちを忘れずに、ふだんの教会のミサに参加し、聖体を拝領しましょう。
司教さまがささげておられるミサも、主任司祭がささげているミサも、同じ緊張感で参加しているなら、いつ終末の時がやって来ても恐れる必要はありません。ご聖体を司教さまから授かった時と同じ気持ちでいつもの日曜日に聖体を拝領するなら、終末の日を、希望に満ちて迎えることができるはずです。
堅信を受けた中学生を例に取りましたが、すべての人にとって、今を信仰に固く根ざして生きるコツがあります。それをことばで言い表すと「千年を一日のように過ごす」ということです。
ペトロの手紙２の３章８節に次のような言葉があります。「愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。」
あと１日しかなかったらどのように過ごすか、千年続けてもかまわない生き方があるとしたらどのような過ごし方か。この機会に考えてみましょう。すべての人にとってそれは、「神の子イエスへの信仰に根ざした生き方」のはずです。
今日の聖体拝領、司教さまから授けてもらっているつもりで拝領してみましょう。一つ一つのことに、いちばん心を込めた時のことを思い出して、今日を過ごしましょう。その積み重ねの先にもし終末のその日がやって来ても、わたしたちは希望に満ちあふれてその日を迎えることができるはずです。

王であるキリスト(ヨハネ 18:33b-37)

主日の福音 12/11/25(No.620)

王であるキリスト(ヨハネ 18:33b-37)

王にすべてを従わせて生きる

先週金曜日、浜串教会出身で聖母の騎士修道会の神父さま叙階 25 周年銀祝の感謝ミサが長崎市のカトリック本河内教会でささげられ、同じ修道会の先輩後輩の神父さまと、浜串教会の歴代の主任神父さまが出席して、盛大に執り行われました。
感謝ミサでは、聖母の騎士の修道会会員としての誓願 50 周年の方が 2 人、そして司祭として 25 年を迎えた方が 2 人お祝いの対象になっていました。お祝いの対象者が複数いらっしゃる時は決まってそうですが、ミサの司式はこの人が、ミサ中の説教はこの人が、祝賀式の挨拶はこの人が、といった感じで役割分担をすることになります。浜串教会出身の神父さまはミサの司式を担当しました。
説教を担当したのはもう 1 人の司祭叙階 25 周年銀祝を迎えた神父さまでした。わたしの予想では説教も浜串の神父さまがするものと思っていたのでちょっと拍子抜けしたのですが、予想していない神父さまではあっても、25 年を司祭として務めてきた方の話ですから、聞いていてとても参考になりました。
また、ミサの後の祝賀会の中で、修道士として 50 年間、修道会の誓願を守ってきた方のあいさつがありました。修道士ですので、表に立つことは少ない方だと思いますが、披露されたその半生は心を打ちました。
さて今週は、先週予告しておいたとおり年間最後の主日「王であるキリスト」を迎えています。この王であるキリストの週を終えると、来週からは待降節、イエスの誕生を準備する季節です。年間の主日を終わる今週、イエスの「王」としての姿に注目して学びを得ることにしましょう。
まずわたしは、「この世の王」と「王であるキリスト」の違いについて考えてみました。決定的な違いは、この世の王は限られた国の王であり、全人類の王であるキリストとは一線を画す存在だということです。いくら全世界の覇権をもくろむ王であっても、地上の王の権威が及ぶ範囲は限られています。地上の王の権威が及ばない場所があるのです。
これに対して、王であるキリストの権威は、すべての人、すべての場所、すべての時代に及びます。実際に、イエス・キリストは 2 千年たった今でも、多くの人、多くの場所、あらゆる時代に王として認められているのです。
また、この地上の王と王であるキリストの決定的な違いとして、地上の王は生まれた時は王ではなく、いつか王になる人ですが、イエス・キリストは、生まれたその時から変わらない王でした。地上の王は、仮に王の世継ぎとして生まれたとしても、現在の王が亡くなったり、引退しなければいつまでたっても王にはなれません。ところがイエス・キリストは、宿屋がなくて家畜小屋で生まれたその時でも、王として占星術の学者たちから礼拝と贈り物を受けたのです。
今週選ばれた福音朗読も、ピラトがイエスに「お前がユダヤ人の王なの

か」と尋問しています。ちなみにこの２人の対決は、表面上はピラトがイエスを尋問しているように見えますが、中身はイエスが一つ答えるたびにピラトは困惑し、追い詰められています。ですからイエスは裁判の被告に立たされていながら、真理を明らかにすることによってピラトを尋問しているのです。
ピラトは真理の前に身をかがめ、イエスに聞き従う直前までいったのですが、残念ながら彼は自分の身分が邪魔をして、真理であるイエスに聞き従うことはできませんでした。このピラトの姿に、今週わたしたちが学ぶべき点が見えてきます。すなわち、わたしは、イエス・キリストを王として認めているだろうか、ということです。
すでに、王であるキリストの特徴として２つのことを確認しました。１つはイエス・キリストはすべての人、すべての場所、すべての時代を超えて王であるということでした。わたしの生活の中で、イエス・キリストを二の次にするような場面が、だれに対しても、どんな場所でも、どんなタイミングでもあってはいけません。その点、揺るぎない信念をもって守ってきたでしょうか。
もう１つ、イエスはある時から王となられた方ではなく、初めから王であり、生涯のどの場面を取っても王であり続けました。わたしたちは、イエスのさまざまな場面を思い出し、イエスを王として認め、受け入れてきたでしょうか。
「こんな姿のイエスさまを王として受け入れられない」わたしたちの心が揺れていて、そんな時がいつか起こるかも知れません。今日の「王であるキリスト」の祭日を機会に、次の一年間は、イエス・キリストをどんなときにも王として迎える生活をする、その覚悟を新たにすることにしましょう。
わたしたちは、地上の国に属していない王を持っている国民です。王の喜ぶ生き方を、日々積み重ねましょう。また王であるキリストの生き方を、より多くの人に伝え、王の国民である「囲いに入っていないほかの羊」（ヨハネ 10・16）が、王であるキリストをはっきり意識することができるように、働きかけを続けましょう。
イエス・キリストをみずからの王とし、また王であるキリストの生き方だけを徹底して証ししている人の 50 年、また 25 年の節目を祝う式典に参加して、自分自身の歩き方をもう一度見つめる良い機会を与えてもらいました。

待降節第 1 主日（ルカ 21:25-28,34-36）

待降節第１主日（ルカ 21:25-28,34-36）

待ち望む人に救い主は必ず来られる

車を運転していて、信号機が赤になった時、運転するみなさんはどう感じるでしょうか。「ちょうどのときに赤になって、なんて運が悪いんだろう。早く変わらないかなぁ」と思うでしょうか。
わたしは、どちらかというと、「赤になった。ということは、もうすぐ青になる」と考えます。つまり、望んでいることと反対のことが起こった時、「望んでいる状況になるのはもうすぐだ」と考えるのです。
ずっと前からこのように考えていたわけではありません。以前は、信号が目の前で赤に変わった時に、「なんてついてないんだろう」と本気で思っていました。ところが、２つの事情で考えが変わったのです。
１つは交通事故です。交差点の信号が黄色から赤に変わり、わたしが停止線で車を止めた瞬間、「ガチャン」という音がしました。対向車線の車と、交差する道路から出て来た二輪車が、出会い頭にぶつかったのです。
もし対向車線の車が停車し、わたしが無理をして交差点に入っていたら、交差する道路を走っていた二輪車は、当然わたしと接触し、事故を起こしていたでしょう。他人事ではない事故でした。わたしは事故の当事者たちを横目に見ながら、その場を去りました。
もう１つは、考え方一つで見え方は違うということをある時教えてもらったからです。その当時、わたしはとても攻撃的で、だれかが傷つくまで意見することがしばしばありました。いろんなことに、攻撃的でした。ところが、そうした場面に当時の自分と違った考え方でとらえる目を持ってる人と出会いまして、その人の考えに耳を傾けているうちに、あー、違う見方もありなんだなぁと考えられるようになったのです。今は、考え方一つでずいぶん見え方は違うのだということが分かりました。
教会の季節は、待降節に入りました。待降節は、救い主イエス・キリストの降誕を待ち望む季節です。待降節の始まりにあたり、この季節をどのように過ごせばよいのか、考えてみたいと思います。
最初にちょっと触れたことに関連しますが、待降節は「待つ季節」です。これをどうとらえるか、という問題が当然起こります。積極的に待つのか、「待たされている」という消極的な見方をするのかです。「待たされている」と感じるなら、どうしてこんなに長い待ち時間があるのかとイライラし、この待降節を早く終わりたいとしか考えないでしょう。
むしろわたしたちは、待降節のあいだ積極的に救い主を待つべきです。与えられた福音朗読に、次のような言葉があります。「このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」（21・28）
救い主が来るその時が近づいています。待降節は、救い主の降誕が近いことを知らせている季節なのです。そうであるなら、今は救い主をお迎えする準備を着実に進めるべきです。待つ季節なんて面倒くさい、では

なく、待つことで確実に救い主をお迎えすることができるのです。もっと言うと、待つ人でなければ救い主をふさわしくお迎えすることはできないのです。
もし手元に聖書と典礼、あるいは新約聖書があるなら、本日の福音朗読箇所を開いてみてください。物語の中に、「人々」と「あなたがた」という言葉があることに気がつくと思います。
ここでの「人々」と「あなたがた」は、使い分けられています。「人々」は、人の子が来ることにより恐れ、おびえ、不安に駆られます。「人々」で示されるグループは救い主イエス・キリストの到来の時にその場にいても、前もって準備のなかったグループです。
これに対して、「あなたがた」というのはイエス・キリストの到来を、「解放の時」「喜びの日」として迎えることができます。「解放の時が近い」と感じ、「いつも目を覚まして祈り」、その時を準備して待っていたからです。
わたしたちに、待降節の期間求められている態度がどちらであるかは明らかです。わたしたちも、目を覚まして祈り、イエスの降誕を迎える準備をしなければなりません。教会によっては、クリスマスのための聖歌の練習を積む教会もあります。
貯金箱を作って、御子イエスさまにおささげする献金を用意する習慣のある教会もあります。貯金箱には、準備した人の犠牲の心、生活に困っている国内外の多くの人が少しでもイエスの誕生を安心して迎えられるようにとの思いやりの心が表現されています。
こうして、待つことで救い主が来ると強く感じられるようになることが、待降節の大事な意味合いだと思います。伝統的な習慣が特にない教会でも、一人ひとりが、心の準備をして降誕の日を待ちましょう。何かを犠牲する心、忍耐や柔和の心、愛する心を高めながら、わたしたちにとっての最高のプレゼントである主イエス・キリストを待つことにしましょう。

待降節第 2 主日（ルカ 3:1-6）

主日の福音 12/12/09(No.622)

待降節第 2 主日（ルカ 3:1-6）

神の言葉が降る生活を目指す

今週取り上げたいのは「しるしを見て、何を考えるか」ということですが、まずはとりとめのない話からです。ここ何週か、侍者の男の子がミサの前に髪の毛を濡らして整える場面に出くわしています。どうやら寝癖が気になるようで、水を付けては鏡を見て「大丈夫かなぁ」といったしぐさをしているのです。
わたしはそれを見て、「いいなぁ。寝癖ができて」と心の中で思いました。羨ましいですよねー。寝癖も、髪の毛があるからこそそうなるのであって、なければ、望むこともできません。
ところが数日前に、朝わたしが起きて鏡の前に立ったら、髪の毛が寝癖で跳ねているではありませんか。嬉しかったですねー。嬉しさのあまりそのままミサに出ようかと思ったくらいです。
ただ、わたしが寝癖を直さずにミサに出れば、子供と同じ見方はされませんから、そこは思い直して整えました。今度男の子が寝癖を直していても、「いいなぁ」とは思わないだろうと思います。
さて待降節の第 2 主日と第 3 主日は、洗礼者ヨハネを登場させて救い主への準備を促す朗読が選ばれます。今週選ばれた朗読箇所も、簡潔な表現ですが、洗礼者ヨハネが教えを宣べる場面です。この朗読箇所はわたしたちに対するしるしです。わたしたちはしるしを見て、何を考え、どう行動するかを決めなければなりません。
今、「今週の朗読はしるし」と言いましたが、洗礼者ヨハネの活動だけを見ていると、しるし全体を拾うことができず、見落とすことになります。朗読全体から、しるしの意味しているものを考えてみましょう。
「神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。」（3・2）洗礼者ヨハネに、神の言葉が降ったことは、「しるし」ではありますが「しるしの一部」です。どのような背景の中で、洗礼者ヨハネに神の言葉が降ったのでしょうか。
そのことが、直前に述べられています。直前の箇所には、その当時の権力者たちの名前がずらりと並んでいます。ローマ皇帝、ユダヤ総督、ガリラヤ領主、また近隣地域の領主、大祭司など、言ってみれば当時のユダヤ社会を支配している人々が紹介され、その中で荒れ野にいる洗礼者ヨハネに神の言葉が降ったというのです。
何を意味しているのでしょうか。権力者、地上の支配者が何人もいたにもかかわらず、神の言葉が降ったのは彼らではなく、荒れ野にいる洗礼者ヨハネに降ったということです。なぜでしょうか。それは、神のご計画があったからです。
洗礼者ヨハネに降った神の言葉をもう一度思い出しましょう。「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。谷はすべて埋められ、山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、でこぼこの道は平らになり、人は皆、神の救いを仰ぎ見る。」（3・4-6）

この神の言葉を理解し、協力できる人は、この世の権力者ではなく、洗礼者ヨハネのような人です。力で人々を支配する者に、主の道を整えること、主の道をまっすぐにすることはできない。だから、神の言葉は権力者には降らず、洗礼者ヨハネに降ったのです。
神は、ご自分の計画を実行するために、適任者を選ぶのだと思います。ご自分の計画を確実に進めるために、場所と時間と人を慎重に選びます。神さまだって、計画が水の泡になるのは嫌いだからです。
イザヤの預言に、少し言葉を補いましょう。「谷を埋める」とは、「社会の底辺にある人々に希望の光を届ける」ことでしょう。「山と丘は低くされる」とは、名誉や金銭でおごり高ぶっている人に謙虚な心を取り戻させることでしょう。神の望む生き方をすべての人が生きるように、悔い改めの洗礼へと人々を招く。そのために神が選んだのは、権力者ではなくて洗礼者ヨハネでした。
さて最後に、今週の学びを得ましょう。わたしは、「しるしを見て、何を考えるか」ということを最初に投げかけました。今週神が示そうとするしるしを見て、わたしたちは何かの態度を取らなければなりません。
その答えは、「神の言葉はだれに降ったか」を思い出すことです。神の言葉は、権力を好む人にではなく、悔い改めて神の望む生き方に自分を合わせようと準備している人に降るのでした。ですから、わたしたちに求められているのは、神の言葉が自分に降るような生活を選ぶことです。
神の言葉が降るような生活。それは、やがて来られる救い主にすっかり向きを変える生き方です。イエス・キリストなしには物事が始まらない、そういう生き方です。朝、目が覚めた時にイエス・キリストなしに今日一日が始まらないと考えるなら、わずかでもいいから祈りをして一日を始めるはずです。
食事をしようというときに、イエス・キリストなしにこの食事は始まらないと考えるなら、食事の前に祈るはずです。こうして、イエス・キリストなしに物事は始まらないと考える人に、神の言葉が降るのです。
神の言葉は、洗礼者ヨハネに降りました。わたしたちもまた、神の言葉が降るような生活を心がけるなら、社会に対してしるしとなることができます。そしてわたしたちを見て、だれかが主の道を知り、その道を歩き出すのです。
皆さんは、「主の道を備えよ」という聖歌をご存じでしょう。できればこの聖歌を覚えて持ち帰り、日々心の中で歌い続けましょう。わたしにも、周りの多くの人にも、神の言葉が降り、神の子を喜び迎えることができるように、ミサの中で照らしを願いましょう。

待降節第 3 主日（ルカ 3:10-18）

主日の福音 12/12/16(No.623)

待降節第 3 主日（ルカ 3:10-18）

ヨハネは民衆を救い主に確実に導く

待降節第 3 主日も、洗礼者ヨハネを通して救い主を待つ準備を進めたいと思います。悔い改めを宣べる洗礼者ヨハネに、群衆、徴税人、兵士たちがそれぞれ「わたしたちはどうすればよいのですか」と問いかけました。

彼らが洗礼者ヨハネに期待したのは、もしかしたら実行不可能なお題目を授けてもらうことだったかもしれません。世間知らずの洗礼者ヨハネが実行不可能なお題目を授けてくれた。ありがたいけれども実行は不可能だ。そのほうが、人々にとって都合が良かったかもしれません。

ところが洗礼者ヨハネが示した勧めは、それぞれの人が暮らしているその場で実行可能な戒めでした。人々にとっては、高尚ではあるけれども、実行不可能なお題目のほうが良かったのです。実行不可能であれば、洗礼者ヨハネの勧めを無視することができたからです。けれども、彼らが受けた勧めは、足もとで、生活を変えることなくそのまま実行可能だったのです。

「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」「規定以上のものは取り立てるな」「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」

人々は、拍子抜けしたかもしれません。そして同時に、自分たちにとって実行可能な勧めから逃げられなくなったことにも気付いたはずです。

当時人々を教え導く役割にいたのは宗教指導者たち、律法学者やファリサイ派の人たちでした。ヨハネは、彼ら宗教指導者のように人々に荷を負わせるけれども、自分は指一本触れようとしない人ではありませんでした。人々は、正面から、自分に必要な悔い改めと向き合わなければならなくなりました。

このヨハネの姿勢は、イエスにつながっていきます。イエスもまた、人々に勧めを与える際に、決して実行不可能なことを言いませんでした。たとえそれが、「持っている物をすべて売り払い、貧しい人々に分けてやりなさい。（中略）それから、わたしに従いなさい。」（ルカ 18・22）という掟であっても、実行可能だったから金持ちの議員に勧めたのでした。

当時の宗教指導者と違って、具体的、現実的な勧めを与える洗礼者ヨハネをメシアではないかと、民衆は心の中で考えるようになります。ところがヨハネは、その考えをことごとく退けます。

「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入

れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」（3・16-17）
あとから来られる方が、「メシア・救い主」です。たとえヨハネが、当時最も優れた預言者であったとしても、民衆が本当に救いを求めるお方は、自分のあとに来られる方です。ヨハネはそのことをはっきり理解していました。
ただし、ヨハネはイエスの御生涯の最期まで見届けていませんので、「わたしよりも優れた方」が、どのように優れているのかを示すことはできなかったかもしれません。
わたしたちは違います。わたしたちはイエスの御誕生、ご死去、御復活について、聖書から十分に学ぶことができます。その点を踏まえて、洗礼者ヨハネの証しとイエスの証しを比べてみましょう。
ヨハネの姿勢が、あとから来られるイエスにも引き継がれていることはすでに話しました。ヨハネもイエスも、自分の置かれた場所で、実行可能な勧めを与える方でした。違いは、ヨハネは神に立ち帰る道を示しましたが、イエスは神に立ち帰る道を、「わたしに従いなさい」という招きで示したということです。
ちなみに、福音書の中で「わたしに従う」という箇所を探すと、18箇所当てはまる箇所が見つかります。これだけでも、ヨハネとは違って、あとから来られる方、救い主イエス・キリストは「わたしに従いなさい」という呼びかけで神に立ち帰る道を示すことが分かります。そしてわたしたちは、このお方を今心待ちにして、待降節を過ごしているのです。
ヨハネは、神に立ち帰る道を具体的に示してくれました。このヨハネの招きに従う人々を、もうすぐおいでになる方、イエス・キリストは、もっと強く引き寄せます。「わたしに従いなさい」と呼びかけて、歩く道を照らしてくださるのです。
幼子を迎える準備を急ぎましょう。わたしたちに、神に立ち帰る道を「わたしに従いなさい」という声で呼びかけてくださる救い主を、心待ちにしましょう。今全世界の教会は、教皇さまの呼びかけで信仰年を過ごしています。今年のクリスマスが、信仰を見つめ直し、確信を持ってイエスに従うきっかけとなるよう、恵みを願いましょう。

待降節第4主日（ルカ 1:39-45）

主日の福音 12/12/23(No.624)

待降節第 4 主日（ルカ 1:39-45）

「主がおっしゃったこと」を理解する 2 人

水曜日に、4 度目くらいの司祭団マラソントレーニングの再開をしました。11 月初めに再開したのですが挫折し、3 度目も挫折し、今回でたぶん 4 度目くらいです。もしかしたら 5 回目かもしれませんが、皆さんどうでもいい話だと思うのでここはあまり引っ張らないことにします。
トレーニングを再開したわけですが、来年 1 月 29 日（火）まで残り時間も少ないので、少し負荷をかけようと思いました。後浜串に向かう登り始め、土石流対策を施しているところにカーブミラーがあります。教会前バス停からそのカーブミラーまでを往復しようと考えました。
片道 425 メートル、往復で 850 メートルです。2 往復すると 1700 メートル、区切りがいいのは 6 往復で 5100 メートルです。ざっと 5 キロと考えると、最終目標としてはこの 6 往復 5 キロを、25 分でカバーしたいわけです。
ところが、いざ走ってみると、すでに 4 往復で 30 分かかっています。4 往復と言ったら 3.4 キロです。1 キロ 9 分かかっているじゃありませんか。とんでもなく遅いので、今年のマラソン大会直後に公言していた「3 位を目指します」は、何だかどこかのマニフェストみたいに「たいそうなことを言っていたが、何一つ実現できなかったじゃないか」そんな陰口をたたかれそうな雲行きです。ペースを上げるように努力します。
さて、今週の福音朗読は、マリアがエリサベトを訪問する場面です。わたしは、エリサベトが最後に言った「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」（1・45）を黙想したいと思います。
エリザベトの言葉は、直接にはマリアのことをたたえた言葉です。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方」は、明らかにマリアのことだからです。ただエリサベトも、自分が言った言葉の意味を理解している女性です。なぜならエリサベトもまた、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた」女性だからです。
マリアとエリサベトの間には、「理解できる人だけがたどり着ける世界」があるのだと思います。何を言いたいか、皆さんもお分かりだと思います。たどり着いた人だけが分かること、体験した人だけが分かる感覚のようなものがあるのです。
例を挙げましょう。わたしの釣りの師匠は、魚をかけるタイミングをこう言いました。「『コツッ』と手元に感じた時は遅いんです。『コ』と『ツ』の間でかけないと、魚はかからんのですよ。」本当にそうだなぁと思います。魚のほうも命がけですから、のんびりしている人にまで釣り上げられていたら滅びてしまいます。わずかな相手の動きを感じ取れる人だけが、狙っている魚にありつけるわけです。
正月も近くなって、あちこちで餅をついて丸めている頃でしょう。1 分間で 5 個丸めることのできる人はいるでしょうか。1 分で 1 個も丸める

ことのできないわたしには、5個丸めることのできる人の話はとてもついていけません。今わたしは司祭団マラソン大会の走り込みをしている段階ですが、現状は1キロを6分とか7分で走るレベルの話で、1キロ3分で走る人の会話にはついていけないのです。
そのように、マリアとエリサベトがたどり着いている信仰の世界、お互いを「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた人」と認め合う人同士の会話は、文字通りに信じて生きてきた生活の裏付けがなければ、成り立たない会話なのです。
そこで、マリアとエリサベトが、これまでにどのような形で「主がおっしゃったことは必ず実現する」と信じたのか、拾ってみたいと思います。
エリサベトは、「不妊の女」と周囲の人から言われていました。エリサベトがたとえ社交的で、面倒見が良い人であっても、彼女は「面倒見の良い女」とは呼んでもらえなかったのです。一つのことだけを取り上げて、みんなが同じ見方で彼女を見ていたのです。
そのエリサベトに、神はいつくしみの目を注いでくださいました。彼女はこれを、神はずっとわたしたち夫婦を愛しておられたと信じたのだと思います。神がいつくしみの目を注いでいることを彼女が忘れなかったから、子供を授かったとき神に感謝できたのです。天地創造のとき、主は命じられました。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。」（創1・28）主がおっしゃったことは必ず実現すると、信じたのです。
マリアは、ダビデの家系に属するヨセフの婚約者でした。ダビデの家系に属する人の許嫁ですから、ダビデの子孫に関する言い伝えを固く信じていたことでしょう。それは、「ダビデの子孫から、救い主が生まれる」ということです。
どのようにしてその預言が成就するのか、それはいつなのか、何も確かなことは無かったのに、マリアは「主がおっしゃったこと」として少しも疑わずに信じたのです。そして救い主の預言は、少しも疑わなかったマリアを通して実現しました。
マリアとエリサベト。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた2人が、神をたたえ合っています。こんなにすばらしい光景が、他にあるでしょうか。もしわたしたちに、このような体験ができるとしたらどんなにステキなことでしょう。
実はわたしたちにも、マリアとエリサベトは道を示しているのだと思います。「主がおっしゃったことは必ず実現する」救い主がもうすぐおいでになります。救い主はこの世界においでになります。期待している人もいるけれども、救い主のことを気にもしていない人もいる。そんな現実の世界に、神の子はお生まれになるのです。
わたしたちは、固く信じましょう。救い主が、すべての人のためにお生まれになることを。救い主が、すべての人の心の闇を照らす光であることを。救い主は、弱い人、貧しい人の心をよくご存じであることを。「主がおっしゃったことは必ず実現する」と、1人でも多くの人が声をそろえてたたえる時、そこに幸いが訪れます。

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

あなたの手の中に幼子を抱いて帰ろう

主の降誕、おめでとうございます。今年は、先週の木曜日に夜半のミサの説教が降ってきました。この日は夕方のミサがあり、保育園の園児たちもミサに参加します。園児たちもクリスマス会を終えて、救い主が生まれたベツレヘムでの出来事を考えるのにちょうど良い時でした。
わたしは園児のみんなに呼びかけました。「救い主が生まれた時、その場所でいちばんあたたかいものは何だったでしょうか。」質問が難しかったようですが、わたしはこう答えました。「馬小屋で、いちばんあたたかかったのは、御子イエスさまではないでしょうか。」
今まさに出産しようとしているマリアのために、宿屋も見つかりませんでした。ヨセフは、自分が犠牲になっても、マリアにだけはお産のために部屋を確保したいと努力したことでしょう。それでも願いは叶いませんでした。この時からすでに、あたたかい場所がなかったのです。
どのようにして見つけたのか、ヨセフとマリアは家畜小屋に入り、男の子を出産します。ただそこには、あると助かるような物は無かったのです。その場をあたたかくする暖炉も、お湯も無かったことでしょう。
その、あたたかくするものが何も無い場所に、救い主はお生まれになりました。生まれたての赤ちゃん、そこにあるすべての物の中で、いちばんあたたかい命だったことでしょう。準備の整っていないことを申し訳なく思っているヨセフとマリアにとっても、幼子は希望の光であり、心をあたたかくする存在だったのです。
今年のクリスマス、救い主の誕生を、「あたたかさをもたらすために救い主は生まれた」とまとめたいと思います。人々は皇帝に人口登録を命じられ、有無を言わさず命令の中に置かれていました。家畜の小屋しか場所を見つけることができず、社会の冷たさの中に置かれて、それでも救い主は、ぬくもりを届けるために、この世界にお生まれになったのです。すべての人が、幼子からぬくもりを感じるためにです。
わたしたちは、この夜半のミサを終えると喜びを胸に抱いて帰ります。その喜びは、イエスが届けてくれたものです。イエスが届けてくれたぬくもり、父なる神がお与えくださった最高の贈り物です。一人ひとり、生まれたばかりの赤ちゃんを手に抱いている姿を思い描いてください。布にくるまれ、布を通してでも十分伝わる幼子のぬくもりを想像してください。その幼子特有のぬくもりを、わたしたちは持ち帰るのです。
幼子を抱いている時、周りの人は何と声をかけるでしょうか。きっと、わたしにも赤ちゃんを抱かせてくださいと言うでしょう。わたしたちも、今日お生まれになった幼子を腕に抱いて帰り、出会う多くの人に幼子を抱かせてあげましょう。今日お生まれになった救い主の喜びを、出会う人に伝えることにしましょう。

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

神のことばはこの世界を住まいとされた

あらためて、御降誕おめでとうございます。主の降誕日中の典礼は、ヨハネ福音書を福音朗読に選びます。神の子、父の独り子は、ひとことで言うならば光であるということです。毎年同じテーマなのですが、この点について今年も考えてみたいと思います。
２つ、指摘したいと思います。１つは、わたしたちが喜び祝っている神の子イエスは、暗闇の中で輝いている光です。神の子イエスはまことの光で、世に来てすべての人を照らします。暗闇は、物理的な暗さと、心の暗闇、両方を含んでいます。
神の子イエスが現れたことで、暗闇が光で照らされました。光は、それがかすかなものであっても、わたしたちにその存在を感じさせます。暗い夜道を歩く時、遠くにある外灯であっても、歩くために大いに助けになります。世に来られたイエスは、たとえその存在が遠くに感じられる時でも、わたしたちの歩む道に大きな助けとなるのです。
今の生活で、真っ暗闇の体験はあまり多くはないかも知れません。けれども、手探りでスイッチを見つけ、明かりを灯すことはあるでしょう。それはわたしたちに考えるヒントを与えてくれます。わたしたちの生活は、物理的な暗さだけが暗闇ではないはずです。人間関係や、達成しなければならない目標やノルマに押しつぶされそうになった時、心の中は暗闇になるかもしれません。
そんな時、わたしたちは暗闇を照らす光、暗闇を明るく照らす明かりのスイッチを探すのです。場合によってはそれは、手探りで探さなければならないかもしれません。けれども、暗闇をすっかり明るくしてくれる光である御子イエスにわたしたちがたどり着いた時、すべての暗闇は消え去るのです。御子の存在が、暗闇を照らす光となってくれるのです。
もう１つは、神の御子は「肉となって、わたしたちの間に宿られた」（1・14）ということです。これは、まずはイエスの中に神がおられるということを意味しています。そして同時に、わたしたちの中にもいてくださるのです。御子の誕生の神秘によって、イエスご自身と、この世界が、神がいてくださる場所となりました。
イエスがわたしたちの間におられることをもう少し掘り下げましょう。わたしたちは生まれ育った環境をそれぞれ持っています。わたしの実家は、幼い頃台所は土間でした。風呂も五右衛門風呂で、薪を使って風呂を沸かしていました。
いろんな生活があり、精神的物質的豊かさもさまざまです。その、十人いれば十人とも違う暮らしの中に、神のことばであるイエス・キリストは宿ってくださったのです。宿ってくださり、置かれた場所に不平一つ漏らさず、そこに留まり続けてくださるのです。
わたしたちはこれまですでに、「あなたがいてくれて嬉しい」という体験を味わっているはずです。身近な人であったり、精神的に支えてくれ

る人であったりです。イエスは、わたしたちの間に宿られて、「あなたがいてくれて嬉しい」という存在になってくださるのです。
御子イエスは今日、わたしたちの暗闇すべてを照らすためにおいでになりました。同時に、この世界を住まいとしてくださいました。わたしたちが暮らしている今を、同じ場所に住んで、同じ喜びや悲しみを分け合ってくださいます。この幼子に、今日感謝をささげて帰りましょう。わたしたちに近くいてくださる神に、信頼の祈りをこのミサでおささげいたしましょう。

聖家族（ルカ 2:41-52）

主日の福音 12/12/30(No.627)

聖家族（ルカ 2:41-52）

神の計画に留まることは人間にふさわしい

2012 年最後の日曜日を迎えました。わたしにとっては、小教区の神の家族が、どのように繋がっているのかがまた少し理解できた１年でした。まったく、歩みののろいカメのようですが、来年もこの小教区の神の家族を神さまと結び合わせるために働きたいと思っております。
主の降誕を祝ってからの典礼の流れ、わたしはちょっと首をかしげることがあります。御降誕のあと聖家族、神の母聖マリア、主の公現、主の洗礼と続いていきますが、聖家族を祝う順番は、もう少し後に、具体的には御公現のあとに回したらどうかなぁと思うのです。
今日の朗読を含め、聖家族に選ばれている福音朗読は３箇所あります、１つはエジプトに避難するマタイ福音書の場面、もう１つは両親が幼子を神殿に奉献するルカ福音書の場面、最後にこの神殿奉献に続く物語である神殿での少年イエスの物語です。
どれを選んだとしても、占星術の学者たちから礼拝を受ける出来事を記念する御公現のあとに、聖家族を持ってきたほうが、流れとしてスムーズではないかなぁと思うのです。典礼の専門家ではないので、それ以上強く言うことはできませんが。
さて、今年の聖家族に選ばれているのは、神殿での 12 歳の少年イエスにまつわる物語です。イエスは神殿に留まり、境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられました。ここにすでに、イエスは神がおられるこの神殿で、中心にいるのにふさわしい方なのだということが暗示されているかもしれません。
けれども、両親は少年イエスが自分たちからはぐれたのだと思い、引き返しながらイエスを捜し求めます。イエスは、神殿の真ん中に留まっていること、つまり父である神のいる場所を中心と考えていますが、両親は自分たちのもとに留まっていることが中心に留まることだと考えていたのかもしれません。だから両親は少年イエスがいるべき場所から外れてしまったと考え、捜し求めたのです。
心配でたまらず、「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」（2・48）と心を痛める母マリアに、イエスは不思議な答えを返しました。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」
ここでは２つのことを取り上げたいと思います。「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」（2・49）とイエスは言っておられます。「わたしが自分の父の家にいる」と言ったのはどういうことでしょう。
これは、すでに話した通り、ヨセフとマリアの両親の中にいることが中心に留まることと考えておられるか、父である神の中にいることが中心に留まることと考えておられるかに注目すれば、少年イエスが言ってお

られることの意味を汲み取ることができでしょう。少年イエスは徐々にご自分の使命を自覚し、父である神の中にいることが、自分の生活の中心なのだということを意識していたのだろうと思います。
ただ両親には、イエスの言葉の意味が分かりませんでした。それにイエスが一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになったので、そのことを追求しなかったかもしれません。この答えは、マリアが「これらのことをすべて心に納めていた」とあるように、ゆっくり時間をかけて意味が明らかになっていきます。
もう１つは、問いかけの部分です。「知らなかったのですか」という問いかけは、「知らなかったのですね」という意味ではないようです。むしろ、「知らないはずはないでしょうに」という意味があるそうです。実はここが最も大切な部分かもしれません。
「知らないはずがないでしょう」「ご存知のはずです」という意味を持たせて少年イエスは両親に「知らなかったのですか」と問いかけているのですが、本当に知っていたのでしょうか。知っていたとも言えますし、知らなかったとも言えるような気がします。
「知らなかった」と言えるのは、マリアはその後、この出来事を心に納めて思い巡らすことになります。出来事の意味を理解するまで、ずっと思い返すのですから、理解できていなかったかもしれません。
けれども、ヨセフもマリアも、自分たちが神のご計画の中で活かされていること、神の計画を中心に据えて生きる必要があることを、十分理解し、実行していました。その意味では、イエスが考えておられた「わたしが自分の父の家にいる」という態度を、ヨセフもマリアも生活の中で実行していたのです。ですから、知らず知らずのうちに、イエスが両親に知らせようとしていたことを理解していたとも言えます。
神に信頼して、神の計画から逸れることなく、神の計画を生活の中心に置いて生きる。それをごく自然に行動できる。だからヨセフとマリア、御子イエスは聖家族なのだと思います。すべてを理解しているから聖家族なのではありません。理解できないこともありましたが、それを心に納め、そこに隠されて今は見えない神の計画を信じることができた。この姿勢を生涯貫いたので、「聖家族」なのです。
わたしたちも、聖家族から生き方の模範をいただきましょう。「なぜこんなことをしてくれたのですか」そんな事件を家族のだれかが起こすかも知れません。「なぜこんなことがわたしたち家族に起こるのですか」そう言いたくなる出来事に遭遇するかもしれません。そんな時でも、神のお考えがきっとあるはずだから、神を信じる信仰から逸れない。神のご計画を中心に据えて生きる。この気持ちを保ちたいと思います。
父である神のご計画の中に、家族の生活を整えていけるように、聖家族の取り次ぎをミサの中で願うことにいたしましょう。

神の母聖マリア（ルカ 2:16-21）